

# 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告

- I 跡部遺跡（第7次調査）
- II 跡部遺跡（第8次調査）
- III 跡部遺跡（第9次調査）
- IV 小阪合遺跡（第22次調査）
- V 小阪合遺跡（第23次調査）
- VI 小阪合遺跡（第24次調査）
- VII 中田遺跡（第11次調査）
- VIII 中田遺跡（第12次調査）
- IX 中田遺跡（第13次調査）
- X 美園遺跡（第1次調査）
- XI 美園遺跡（第2次調査）
- XII 東郷遺跡（第39次調査）
- XIII 久宝寺遺跡（第15次調査）
- XIV 成法寺遺跡（第9次調査）
- XV 竹渕遺跡（第3次調査）
- XVI 植松遺跡（第1次調査）
- XVII 太子堂遺跡（第4次調査）
- XVIII 東弓削遺跡（第6次調査）
- XIX 田井中遺跡（第9次調査）

1993年

# 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告

- I 跡部遺跡（第7次調査）
- II 跡部遺跡（第8次調査）
- III 跡部遺跡（第9次調査）
- IV 小阪合遺跡（第22次調査）
- V 小阪合遺跡（第23次調査）
- VI 小阪合遺跡（第24次調査）
- VII 中田遺跡（第11次調査）
- VIII 中田遺跡（第12次調査）
- IX 中田遺跡（第13次調査）
- X 美園遺跡（第1次調査）
- XI 美園遺跡（第2次調査）
- XII 東郷遺跡（第39次調査）
- XIII 久宝寺遺跡（第15次調査）
- XIV 成法寺遺跡（第9次調査）
- XV 竹渕遺跡（第3次調査）
- XVI 植松遺跡（第1次調査）
- XVII 太子堂遺跡（第4次調査）
- XVIII 東弓削遺跡（第6次調査）
- XIX 田井中遺跡（第9次調査）

1993年

## はしがき

八尾市は河内平野の中心部に位置し、古来より幾度となく旧大和川の氾濫を受けながら、その自然環境のもと、豊かな土壤に育まれてきた地域であります。また当地の東に連なる信貴牛駒山系の西麓部には群集墳で有名な高安古墳群が存在し、平地部では古来より先人達が生活するうえで築いてきた貴重な文化遺産が数多く埋蔵されております。

現在八尾市は、大小様々な分野での都市開発事業が進められ、21世紀に向か近代都市へと大きく飛躍しようとしております。しかし、こういった我々に豊かさや便利さを与えてくれる都市開発は、その反面で先人たちの数々の足跡である文化遺産を破壊する危険な面をもっています。確かに一部の遺跡では整備され保存・保護されているとはいえ、そのほとんどは痕跡を止めず消滅していきます。そこで、私共では「開発の波」に呑まれ、失われていく貴重な文化遺産を後世の人々へ伝承することが責務であると認識し、破壊される遺跡については発掘調査を実施して記録保存に努めております。

今回、平成3年度に実施しました成法寺遺跡（第9次）、平成4年度に実施しました跡部遺跡（第7次～第9次）、小阪合遺跡（第22次～第24次）、中田遺跡（第11次～第13次）、美園遺跡（第1次・第2次）、東郷遺跡（第39次）、久宝寺遺跡（第15次）、竹渕遺跡（第3次）、植松遺跡（第1次）、太子堂遺跡（第4次）、東弓削遺跡（第6次）、田井中遺跡（第9次）の12遺跡に及ぶ調査・整理が完了しましたので報告書を刊行する運びとなりました。本書が学術研究及び本市の地域史の資料として、さらに文化財保護への啓発普及に活用して頂ければ幸いです。

末筆となりましたが、調査においてご協力いただきました関係各位の皆様方に深くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご支援を賜りますようお願いいたします。

平成5年12月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

## 序

1. 本書は財團法人八尾市文化財調査研究会が平成3年度及び平成4年度に実施した発掘調査成果の報告を収録したもので、内業整理及び本著作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成4年度をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書の構成・編集は岡田清一が行い、文責などは各例言に明示した。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（昭和57年11月1日発行）・八尾市教育委員会発行の「八尾市埋蔵文化財分布図」（平成3年4月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。
1. 本書で用いた方位は、磁北を示している。
1. 造構は下記の略号で表した。  
堅穴住居—S I 溝—S D 井戸—S E 土坑—S K 小穴—S P 自然河川—N R
1. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。  
弥生土器・土師器・瓦器・瓦・埴輪・石類—白、須恵器—黒、木製品—斜線。
1. 各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

## 目 次

### はしがき

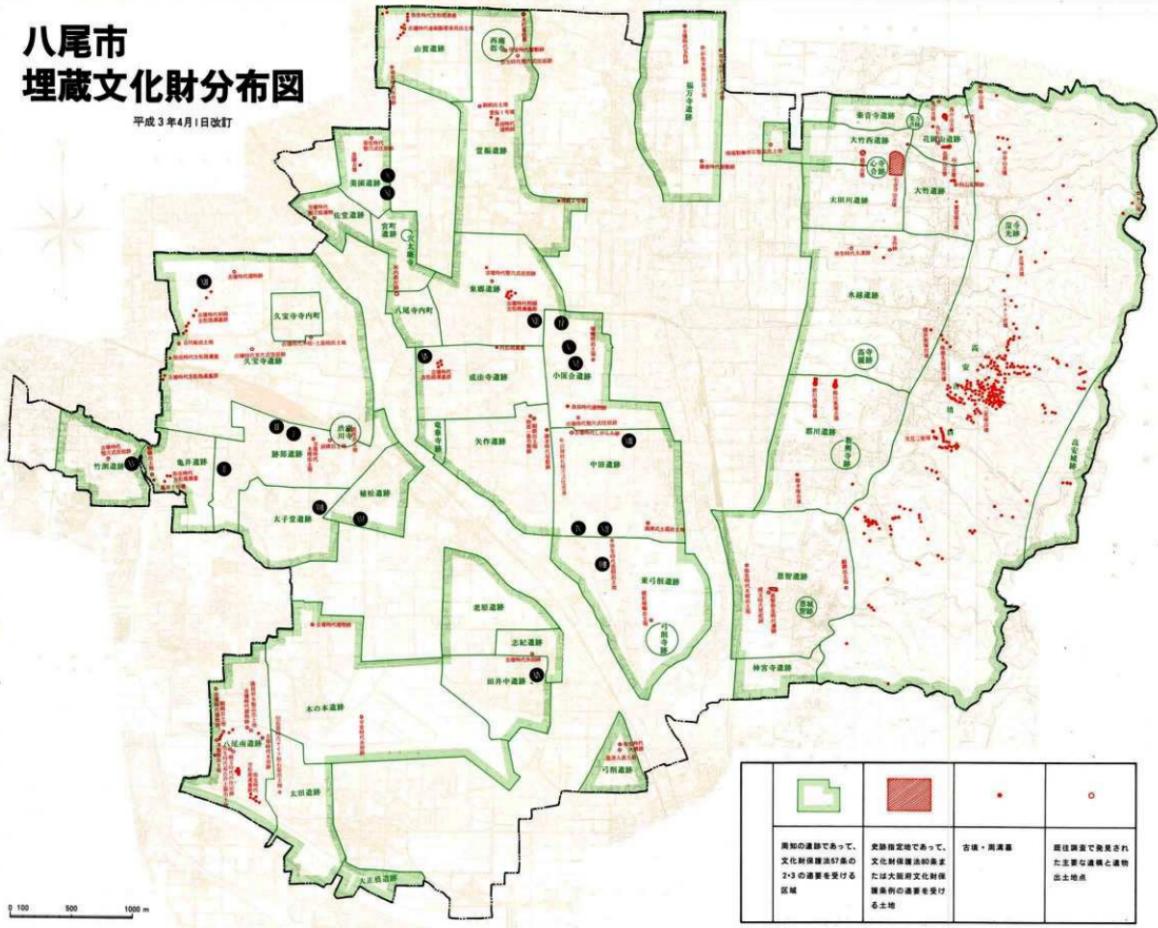
### 序

### 八尾市埋蔵文化財分布図

I	跡 部遺跡 第7次調査 (A T92-7)	1
II	跡 部遺跡 第8次調査 (A T92-8)	9
III	跡 部遺跡 第9次調査 (A T92-9)	25
IV	小阪合遺跡 第22次調査 (K S92-22)	29
V	小阪合遺跡 第23次調査 (K S92-23)	63
VI	小阪合遺跡 第24次調査 (K S92-24)	73
VII	中 田遺跡 第11次調査 (N T92-11)	87
VIII	中 田遺跡 第12次調査 (N T92-12)	97
IX	中 田遺跡 第13次調査 (N T92-13)	117
X	美 国遺跡 第1次調査 (M S92-1)	129
XI	美 国遺跡 第2次調査 (M S92-2)	145
XII	東 郷遺跡 第39次調査 (T G92-39)	151
XIII	久宝寺遺跡 第15次調査 (K H92-15)	161
XIV	成法寺遺跡 第9次調査 (S H91-9)	167
XV	竹 渕遺跡 第3次調査 (T K92-3)	179
XVI	植 松遺跡 第1次調査 (U M92-1)	195
XVII	太子堂遺跡 第4次調査 (T S92-4)	205
XVIII	束弓削遺跡 第6次調査 (H Y92-6)	215
XIX	田井中遺跡 第9次調査 (T N92-9)	225

## 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成3年4月1日改訂



## I 跡部遺跡第7次調査 (A T92-7)

## 例　　言

1. 本書は、八尾市春日町1丁目47、48で実施した店舗付共同住宅に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第7次調査（AT92-7）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第34号平成4年5月28日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が栗山義孝氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年7月9日から平成4年8月10日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は220m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては垣内洋平・福島友香・松田恵一・白井淳裕が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測一北原清子・沢村妙子、図面トレース一北原が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本 文 目 次

1	はじめに.....	1
2	調査概要.....	2
1)	調査の方法と経過.....	2
2)	基本層序.....	2
3)	検出遺構と出土遺物.....	3
3	まとめ.....	5

# I 跡部遺跡第7次調査 (AT92-7)

## 1 はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する跡部本町1～4丁目、跡部北の町1・2丁目、跡部南の町1・2丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目の東西1.4km南北0.5～1kmに展開する弥生時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

地理的には長瀬川左岸の三角洲状の微高地に位置し、現地表の海拔は9.5m前後を測る。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に亀井遺跡、北に久宝寺遺跡が位置している。

今回の調査地点である八尾市春日町1丁目47、48周辺では、昭和56年に当調査地の西50mの地点（春日町1丁目57）で八尾市教育委員会が実施した調査で、弥生時代前期～中期の土坑1基・溝3条のほか古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。また、調査地の東30mの地点（春日町1丁目45-1）で当調査研究会が実施した調査（AT89-5）では、弥生時代後期末



第1図 調査地周辺図

以前に埋められた銅鐸1個・銅鐸埋納坑1基・溝1条・落ち込み1ヶ所を検出したほか、古墳時代前期（庄内式期古相）の土坑1基・布留式期古相の豊穴住居2棟・土坑1基・溝1条・小穴27個、平安時代後期の土坑1基が検出されている。以上のように、今回の調査地は銅鐸埋納坑を検出した地点に近接していることから、集落内における銅鐸埋納の位置関係の問題や埋納地点周辺の環境を探る意味でも重要な地点と考えられた。

発掘調査は、事業者と八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者協定に基づき（財）八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した。現地での発掘調査期間は平成4年7月9日から平成4年8月10日で、調査面積は220m<sup>2</sup>を測る。

## 2 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、建物の建築予定地に沿って調査区を設定した。調査区の形状がL字状を呈するため、屈曲部を境として調査地を北区（東西11m・南北31m）と南区（東西20m・南北14m）に二分して調査を実施した。調査地の地区割りは、調査地の北西隅のX 0・Y 0地点を基点として東西30m南北50mにわたって設定した。一区画の単位は10m四方で、東西方向はアルファベット（西からA～C）、南北方向は算用数字（北から1～5）で示し、地区的表示は1 A～5 C区と呼称した。地点の表示については、東西線X（X 0～X 50）、南北線Y（Y 0～Y 30）と設定し、X線とY線の交点の数字で示した。掘削に際しては、地表下2.7～3.0mまでを機械掘削した後、以下0.4m前後については層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に務めた。その結果、南区で地表下2.9m前後（標高6.9m前後）に存在する第10層上面で弥生時代後期に比定される自然河川1条（NR-1）を検出した。遺物は、第10層から弥生時代中期に比定される上器類の小破片が極少量出土したほか、第9層からは弥生時代後期から古墳時代前期（布留式古相）に至る上器類の小破片が出土したが、数量的には弥生時代後期に比定されるものが大半を占めた。これらの上層およびNR-1からの出土遺物を含めて、遺物の総量はコンテナ箱に1箱程度である。

### 2) 基本層序

第0層 盛土。層厚1.4m前後。上面の標高はT. P +9.8m前後。

第1層 10B G4/1暗青灰色極細粒砂。旧耕土。層厚0.15m前後。

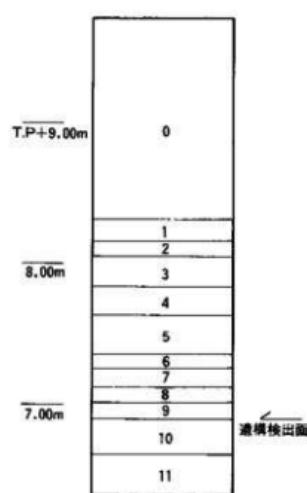
第2層 10B G7/1明青灰色極細粒砂。床上。層厚0.15m前後。

第3層 10Y R7/3にぶい黄橙色極細粒砂。層厚0.2～0.3m。

第4層 7.5Y R6/2灰褐色粘質土。層厚0.15～0.3m。飛鳥時代の遺物を極少量含む。

第5層 5B G7/1明青灰色～2.5Y 7/4浅黄色シルト。層厚0.15～0.3m。

- 第6層 10B G5/1青灰色シルト混じり粘土。層厚0.1m前後。
- 第7層 N6/0灰色シルト混じり粘土。層厚0.1~0.2m。
- 第8層 N5/0灰色粘土。層厚0.1~0.2m。
- 第9層 N4/0灰色粘土。層厚0.1~0.3m。弥生時代後期~古墳時代前期(布留式古相)の遺物を少量含む。
- 第10層 5B6/1青灰色粘土上。層厚0.3m前後。北区では粘性が強く、植物遺体を多く含み沼沢地状を呈している。南区では上面が遺構検出面。弥生時代中期の遺物を極少量含む。
- 第11層 10G Y6/1緑灰色粘質シルト。粘性が強い。層厚0.4m以上。



第2図 基本層序模式図(1/40)

## 3) 検出遺構と出土遺物

## ・検出遺構

## 自然河川(NR)

## NR-1

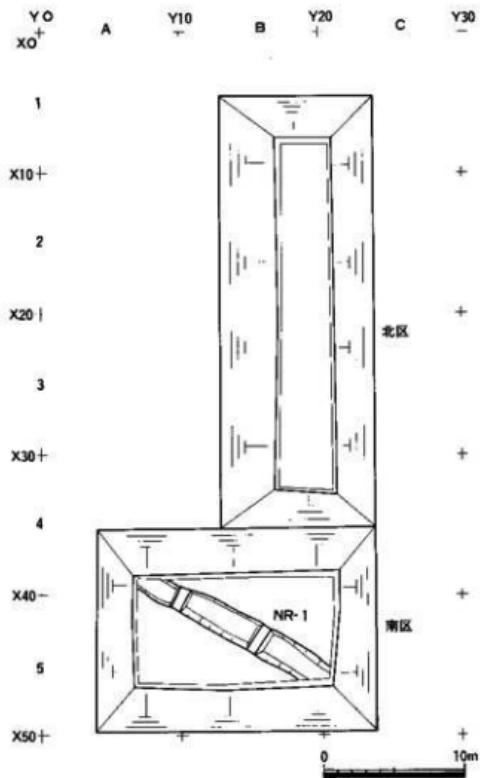
南区で検出した。南東~北西方向に伸びるもので、幅1.8~2.2m、深さ0.7m前後、検出長15.5mを測る。断面の形状は、逆台形である。埋土は上層から第1層灰色粘質シルト・第2層灰色粘質シルトと明オーリップ灰色極細粒砂の互層・第3層青灰色極細粒砂シルト・第4層灰白色極細粒砂である。遺物は第1層から弥生時代後期に比定される土器類が少量出土したほか、第4層の最下部からは弥生時代中期に比定される土器類が極少量出土している。図化し得たものは弥生時代後期に比定される甕1点(10)である。

## ・遺構に伴わない出土遺物

遺物は第9層を中心に出土した。土器類を中心としており、量的にはコンテナ1箱程度出土したが大半が小破片であった。時期的には、弥生時代後期~古墳時代前期(布留式古相)に比定されるものであるが、時期別の比率では弥生時代後期のものが大半を占めた。そのうち、図化し得たものは21点(1~9・11~22)である。

## 弥生土器

(1) は口縁部が大きく外反して伸びた後、端部が外傾する面をもつ広口長頸壺である。色



第3図 検出遺構平面図

調は乳灰色で胎土にやや大粒の長石・チャートが散見される。(4)も長頸壺であるが口縁部を欠損している。体部上半にヘラ状工具による直線文が縱方向に3本施文されている。(2・3)は短頸直口壺である。(5)は複合口縁壺の口縁部で、口縁部外面の上端と下端に波状文と円形浮文で構成される文様が施されている。胎土には長石の小砂粒を多く含むもので、色調は明橙色を呈する。(6~10)は壺で、いずれも外側に煤が付着している。(11~14)は高杯で、(11)は杯部、(12~14)は柱状部の資料である。

#### 土師器

(15)は口縁部が直上に伸びる複合口縁壺である。全体に器壁面の風化が著しく、調整等は不明である。淡褐色の色調で、胎土には長石・赤色酸化土粒が多量に含まれている。(16)は

小型の直口壺で、口縁部外面は棒状工具によるミガキ、体部は乱方向のミガキが施されている。胎土には長石・チャートを多量に含むもので、色調は乳灰色である。(17・18)は庄内式甕である。共に体部外面に右上がりの細筋タタキの後ハケナデでタタキを消すもので、体部内面はヘラケズリを施している。胎土に角閃石・雲母を多量に含む生駒西麓産である。(19)は高杯の口縁部で、口縁端部の内外面に波状文が施されている。淡橙色の色調で、胎土は良好である。(20)は受部と脚部が貫通する小型の器台である。(21・22)は台付き鉢である。共に色調は明るい橙色で、胎土には長石が少量含まれている。

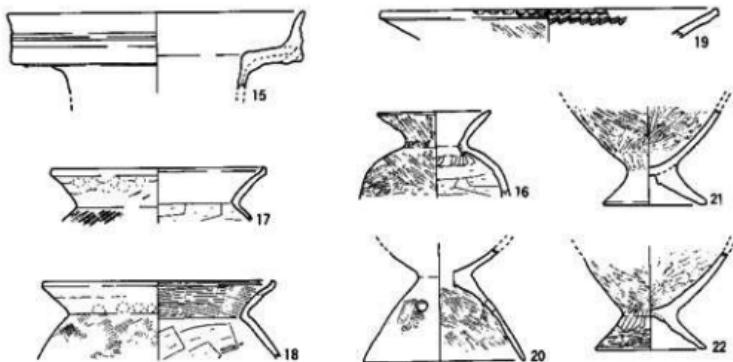
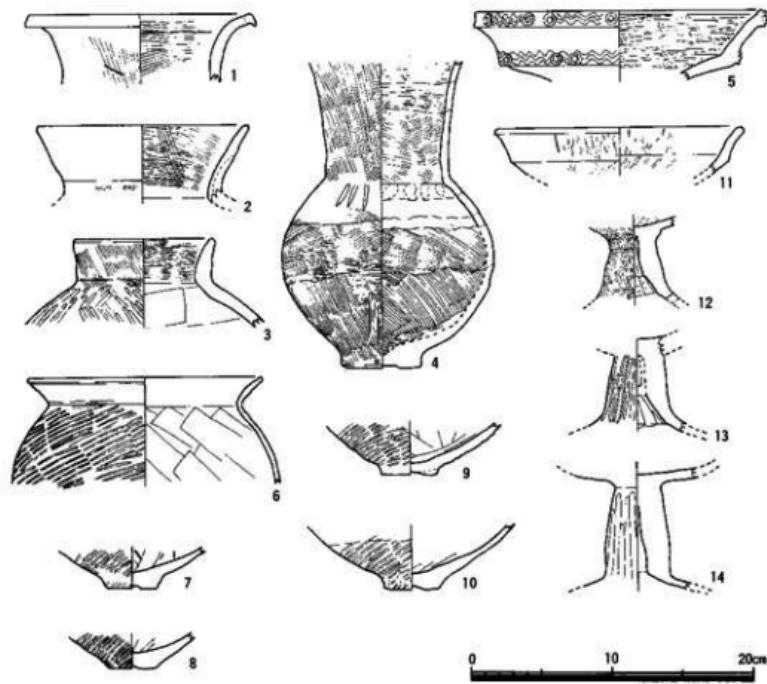
### 3 まとめ

今回の調査地点は、銅鐸埋納坑をはじめとして、古墳時代初頭（庄内式古相）・古墳時代前期（布留式古相）・平安時代後期の遺構・遺物を検出した調査地（AT89-5）や弥生時代前～中期・古墳時代初頭（庄内式古相）の遺構・遺物を検出した調査地（昭和56年市教委調査地）に近接することから、それに関連した遺構が検出されることが予想された。調査においては、既往調査で得られた成果と同様の遺物が出土したもの、明確な遺構は検出されなかった。また、銅鐸埋納坑を検出した第5次調査地（AT89-5）との比較では、銅鐸埋納坑を検出した地点を境として北部は沼沢地状を呈していたものと推定されており、本調査でも北部では同様の状況が認められた。このことから、この付近一帯は弥生時代後期段階までは居住域としては不向きな土地であったことが窺われる。なお、本調査終了後、調査地点から南東約280mの地点で実施された第10次調査（AT92-10）では、弥生時代前期～後期に亘る遺構・遺物が検出されており、当該期の遺物を包含する土層が約1mに及ぶことが確認されている。以上からみれば、この調査地付近一帯が、跡部遺跡の弥生時代全般を通して居住域の中心であったことが想定されることから、本調査地や銅鐸埋納坑を検出した第5次調査（AT89-5）地点は遺跡範囲の北端に位置したものと推定される。

註1 (財)八尾市文化財調査研究会『跡部遺跡発掘調査報告書』大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸  
(財)八尾市文化財調査研究会報告31 1991

註2 (財)八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告2 1983.3

註3 (財)八尾市文化財調査研究会「4. 跡部遺跡第10次調査(AT92-10)」平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 1993



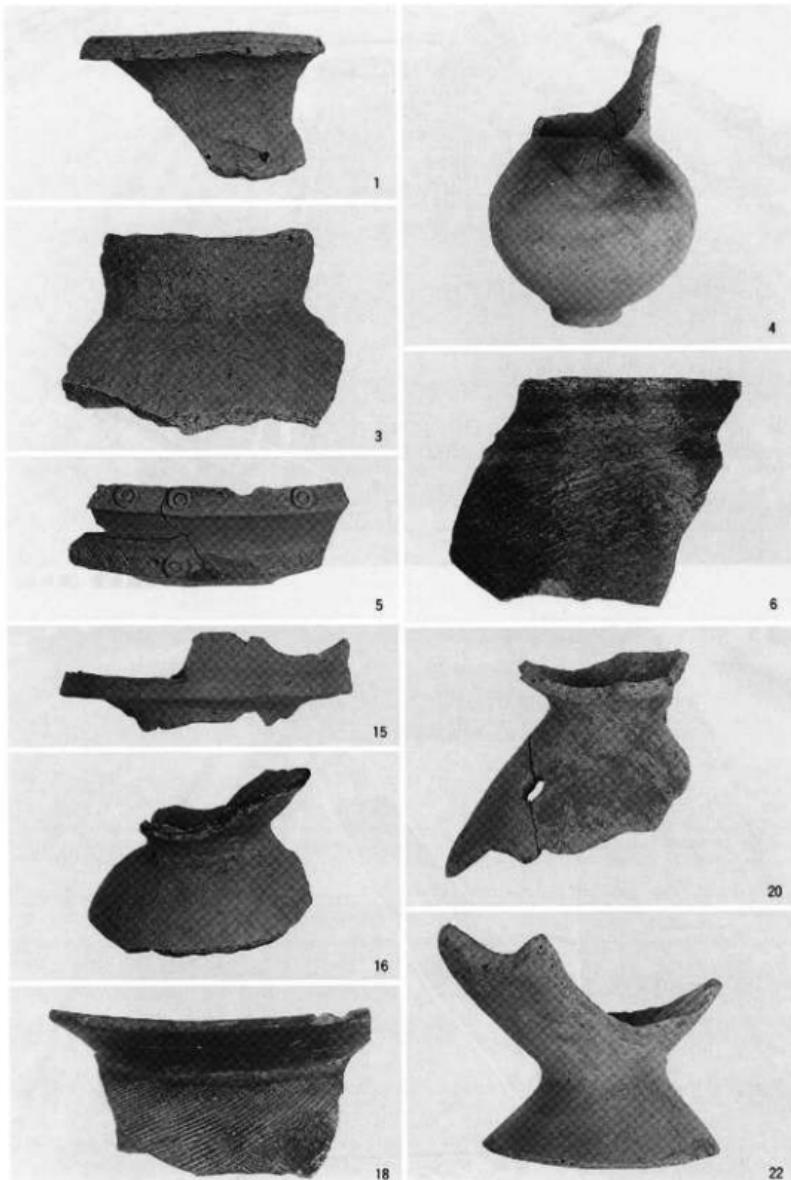
第4図 NR-1(10)、包含層(1~9)(11~22)出土遺物



北区全景（南から）



南区全景（東から）



包含層出土遺物

## II 跡部遺跡第8次調査 (A T92-8)

## 例　　言

1. 本書は、八尾市跡部本町4丁目4-20で実施した鉄塔新設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第8次調査（AT92-8）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第59号平成4年6月29日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が日本電信電話株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年8月20日～9月5日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は100m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては西田寿・瀬尾泰大・後藤信男が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測は市森千恵子・西岡千恵子が行った。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	9
2.調査概要.....	10
1) 調査方法と経過.....	10
2) 基本層序.....	10
3) 検出遺構と出土遺物.....	11
4) 遺構に伴わない遺物.....	15
5) 出土遺物観察表.....	18
3.まとめ.....	20

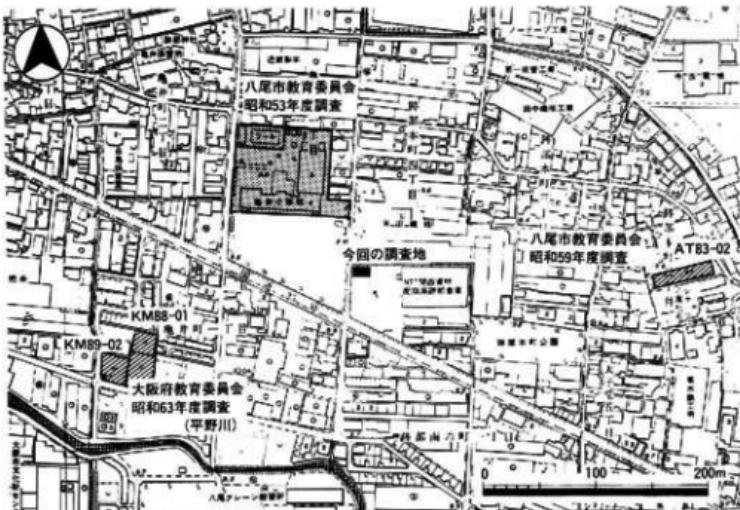
## II 跡部遺跡第8次調査 (A T92-8)

### 1. はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する遺跡で、現在の行政区画では跡部北の町1・2、春日町1・3・4、太子堂1・2、跡部本町1~3、渋川町4~7、安中町3丁目付近に広がる複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地している。

当調査地周辺の遺跡では、東に植松遺跡、南東に太子堂遺跡、西に亀井遺跡、北に久宝寺遺跡があり、さらに当遺跡の北東部には渋川廃寺推定地が含まれる。

当遺跡では、今までに八尾市教育委員会・当調査研究会によって数次にわたって発掘調査が実施されている。昭和56年に八尾市教育委員会が春日町1丁目において実施した調査では、弥生時代前期～中期の土坑・溝、古墳時代前期の方形周溝墓とも考えられる遺構が検出されている。当調査研究会が実施した発掘調査では、昭和57年に跡部本町1丁目において、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層を確認、昭和59年には当調査地から東に250m地点にあたる跡部本町2丁目で、中世の井戸・土坑・溝・小穴を検出している。さらに、昭和63年に前記の昭和57年の調査地の西側で古墳時代前期の土坑・溝を検出、そして平成元年の春日町1丁目における公共下水道工事に伴う発掘調査では、弥生時代中期後半に造られたとみられる銅鐸が埋



第1図 調査地位図

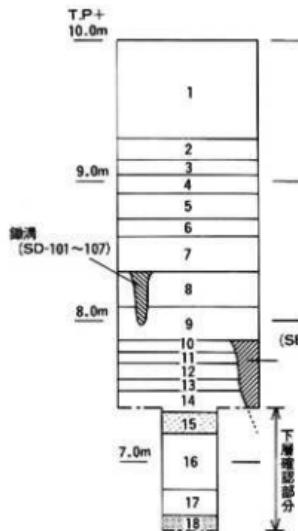
納場から良好な保存状態で発見されている。

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、当調査研究会が跡部遺跡内で行った第8次調査で、鉄塔新設工事に伴うものである。調査は土木建築工事によって破壊が予測される部分を対象として、東西約12m×南北8mの調査区を設定した。掘削については、現地表下約1.6mまでの土層を機械掘削した後、以下の0.5m~1.0mまでの土層については人力による掘削・精査を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。

### 2) 基本層序



現地表から下層確認を含む層までの深度は約3.5mを測り、その堆積層は18層に分けられる。調査区内の各層は全体的にみて、フラットな状況を示す。

第1層：盛土及び搅乱層。層厚70cm前後。

第2層：旧耕土。層厚5~15cm。

第3層：床土。層厚10~20cm。

第4層：オリーブ灰色極細粒砂。層厚10~30cm。唐津焼き椀、常滑の陶器などの小破片を含む近世の遺物包含層である。

第5層：灰褐色微砂混粘質土。層厚10~30cm。第4層同様、近世の遺物包含層である。

第6層：灰褐色極細粒砂。層厚10~30cm。中世~近世の遺物を僅かに含む。

第7層：黄褐色シルト混粘質土。層厚10~20cm。土師器、瓦器椀の小破片を若干含む鎌倉時代の遺物包含層である。

第2図 基本層序模式図(1/40)

る。

第8層：淡茶灰色微粒砂。層厚20~30cm。層内には遺物は全く含まれていない。この層の上面を第1調査面とした。

第9層：茶褐色粘質土。層厚20~30cm。奈良時代の遺物包含層で、比較的須恵器を含む割合が高い。

第10層：赤褐色粘質シルト。層厚10cm前後。鐵化鉄分を多量に含む。この層の上面を第2調

査面とした。

第11層：黄褐色シルト。層厚10cm前後。

第12層：青灰色粘質シルト。層厚5~10cm。

第13層：暗灰色粘土。層厚5~10cm。

第14層：灰黒色細砂混粘質土。層厚10~15cm。この層に関しては、調査地の西へいくほど上層が希薄になり、砂を含む割合も高くなっていく。そしてこの層の上面を精査したところ、明確ではないが部分的に足跡らしきところがみられた。畦畔は調査面では確認することができなかったが、第14層の堆積状況からみてこの層の上面が水田遺構となる可能性が高いといえる。時期は遺物が検出されないので不明であるが、層位的にみて奈良時代以前と考えられる。

第15層以下の下層確認では、旧河道とみられる粘土・砂・シルトの堆積状況が認められ、とくに第18層の灰白色微砂層での湧水は著しく、下層確認の結果1.0m以上の砂の堆積がみられた。層内には遺物は一片もみられなかつたが、八尾市教育委員会の試掘結果から照合すると古墳時代前期（庄内式期）に比定される河川の氾濫源ではないかと考えられる。

第15層：灰白色細砂。層厚10~20cm。

第16層：灰色粘土。層厚40cm前後。

第17層：灰色粘質土シルト。層厚20cm前後。

第18層：灰白色微砂。層厚20cm以上。

### 3) 検出遺構と出土遺物

#### 〈第1調査面〉

第8層淡茶灰色微粒砂上面（標高8.3m前後）において、鎌倉時代の土坑2基（SK-101, 102）・小穴2箇所（SP-101, 102）・溝7条（SD-101~107）を検出した。

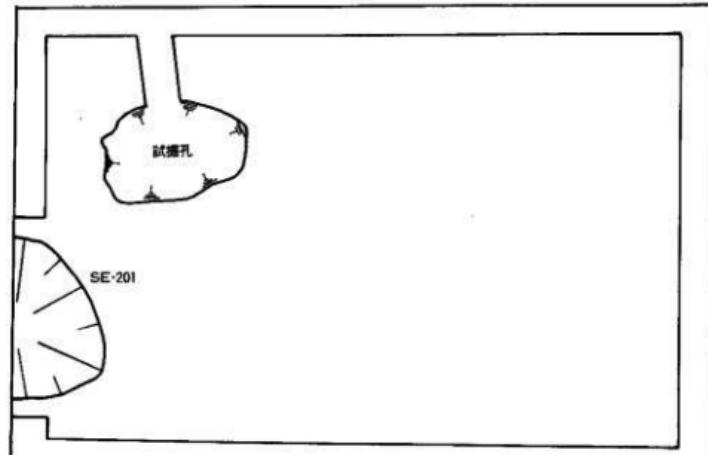
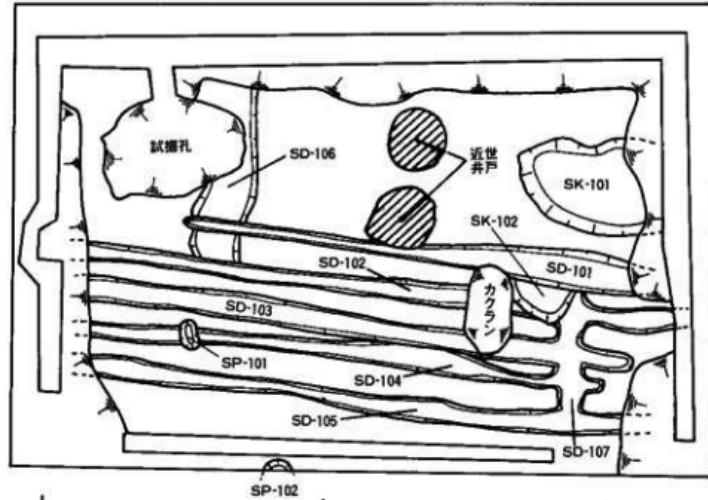
#### 土坑（SK）

##### SK-101

北東部で検出した。東部は擾乱によって破壊されている為全容は不明である。検出部分で東西1.8m、南北1.6m、深さ0.2mを測る。遺構内埋土は緑灰色粘質土の単一層で、出土遺物は土師器の小破片が僅かにみられただけである。

##### SK-102

中央東部で検出した。北部は溝によって切られ、西部は擾乱によって一部破壊されている為全容は不明である。検出部分で東西1.1m、南北0.7m、深さ0.2mを測る。遺構内埋土は緑灰色粘質土の単一層で、遺構内からの遺物はみられなかった。



0 10m

第3図 第1調査面(上)・第2調査面(下)連続平面図

## 小穴 (S P)

## S P-101

南西部で検出した。上面は楕円形を呈し、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.1mを測る。遺構内埋土は淡灰色微砂混粘土の單一層で、遺物は出土しなかった。

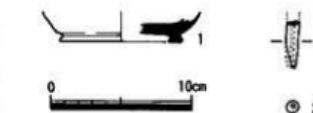
## S P-102

中央南部で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部長径0.3m、深さ0.1mを測る。遺構内埋土は暗灰色微砂混粘土の單一層で、遺物は土師器の小破片が少量出土した。

## 溝 (S D)

## S D-101～S D-107

東西方向に伸びる溝を5条、南北方向に伸びる溝を2条検出した。幅0.2～1.0m、深さ0.2～0.5mを測り、遺構内埋土はいずれも淡灰色微砂混粘土の單一層である。出土遺物は土師器・瓦器の小破片で、中世における耕作に伴う鶴溝と考えられる。そのうち図化できたものはS D-105から須恵器杯身(1)が1点、S D-107から小型の土錐(2)が2点だけである。



第4図 SD-105(1)、SD-107(2)出土遺物実測図

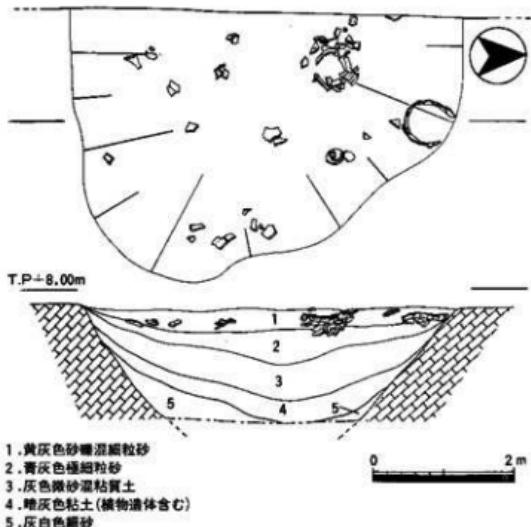
## &lt;第2調査面&gt;

第10層赤褐色粘質シルト上面(標高7.8m)において奈良時代の井戸1基(S E-201)を検出した。

## 井戸 (S E)

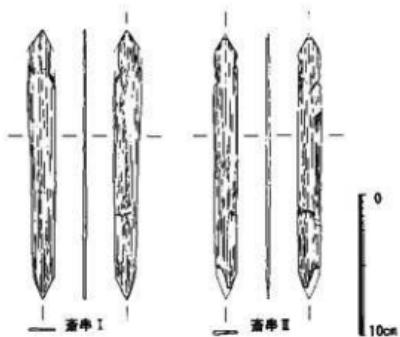
## S E-201

南西部で検出した。井戸側をもたない素掘りの井戸で、西部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分の長径2.8mを測る。深さについては検出面から約1.0m掘削したところ西側壁の鋼矢板部分が傾き、掘削を続けることは非常に危険と判断したので途中で調査を断念した。井戸内埋土は検出部分で上から黄灰色砂礫混細粒砂・青灰色極細粒砂・灰色微砂混粘質土・暗灰色粘土(植物遺体を含む)・灰白色細砂の5層に分層できる。埋土内からは奈良時代(8世紀初頭から中葉頃)に比定される遺物が出土し、その中で図化できたものは、須恵器の杯身(3・4)、鉢(5)、甕(6)、土師器では杯(7)、甕(8～10)、把手付き甕(11・12)がある。また青灰色極細粒砂層の中から2枚の帯串(いぐし)がみつかった。これは細長い板材の上端を丸頭状に、下端を剣先状につくられた串状の木製品で、一方の側面には数箇所の切り込みが入れられた痕跡が認められる。規模は、Aの方は縦19cm、横1.9cm、厚さ0.2cmを測る。



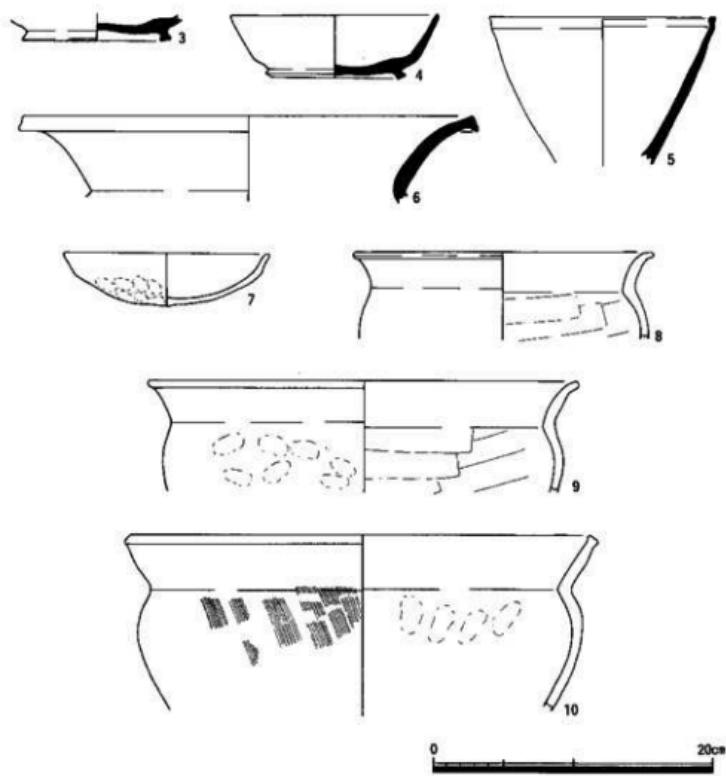
第5図 SE-202平面断面図

両端を尖らせ、そのうち一端は一部折損しているが左右には切り込みがみられる。Bの方は縦17cm、横1.7cm、厚さ0.2cmを測る。この2枚の柵串は、形態的に黒崎直氏の分類によるとC-IV型式にあたるものとおもわれる。柵串はまた「削り掛け」、「小塔婆」とも呼ばれ、祭祀具として用いられるもので、結界をあらわし、外部の悪気を遮断するとともに、人形の負った罪穢を外に漏らさぬ役割を果したものとされている。柵串を通じての井戸祭祀については、兼康保明氏が滋賀県高島郡



第6図 SE-201内出土遺物実測図

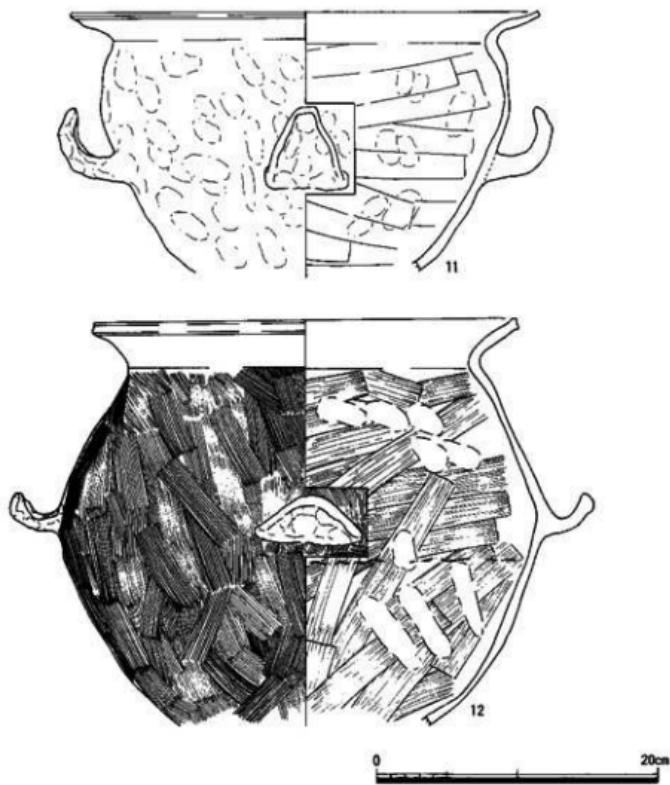
高島町鴨遺跡の井戸の調査例から、井戸の作成工程のなかにおいて用いられたものではないかと分析されている。今回の検出状況もこれと類似するところがみられ、みつかった2枚の柵串については少なくとも廃棄した井戸に投棄されたものではなく、井戸作成工事の際に用いられたものではないかとおもわれる。



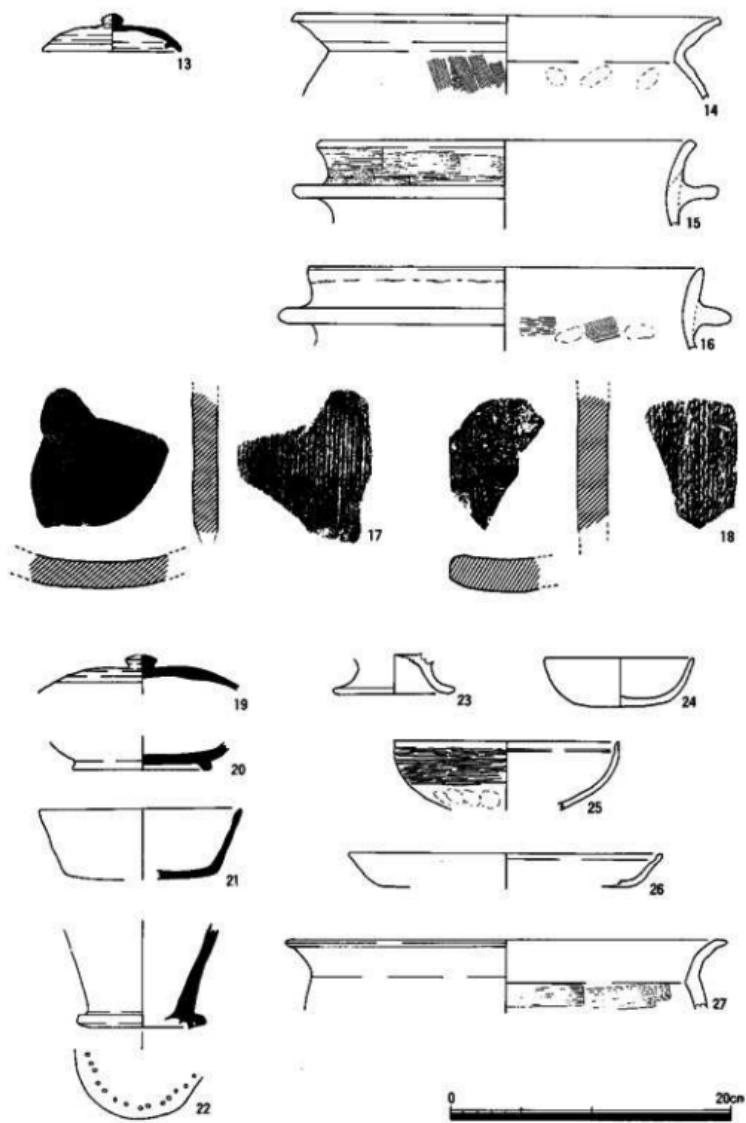
第7図 SE-201出土遺物実測図 I

## 4) 遺構に伴わない出土遺物

遺物は第7層と第9層の2層から出土している。第7層からは時期的に奈良時代～中世に比定されるもので、そのうち岡化できたものは、須恵器では1点のみ擬宝珠状のつまみが付く杯蓋(13)、土師器では甕(14)、羽釜(15・16)、平瓦(17・18)がある。第9層からは時期的に奈良時代に比定される遺物で、そのうち岡化できたものは、須恵器では擬宝珠状のつまみが付く杯蓋(19)、杯身で高台を有するもの(20)と有さないもの(21)、底部に数箇所の刺突孔がみられる鉢(22)がある。土師器ではミニチュアとみられる高杯(23)、杯(24・25)、中皿(26)、甕(27)がある。



第8図 SE-201出土遺物実測図II



第9図 遺構に伴わない出土遺物実測図 第6層(13~18)、第7層(19~27)

## 5) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 口径 (cm) 器高	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	保存状況 備考
1 杯 身 (須恵器) SD-105	高台杯 8.6		体部外面回転ヘラケズリ、他内外面回転ナデ。	淡青灰褐色	精良	良好	底部のみ
2 土 越 (土師器) SD-107	孔径 0.3		手づくね、ナデ。	灰色	0.5mm以下 の砂粒を含む	良	1/2
3 三 杯 身 (須恵器) SE-201	高台杯 10.5		内外面回転ナデ。	外 乳灰色 内 灰色— 墨灰色	精良	良好	底部のみ
4 三 同 上	口径 14.8 器高 4.5 高台杯 9.0		体部内外面回転ナデ。底部外周不定方向ナ デ。	外 淡灰褐色 内 淡綠灰褐色	0.5mm以下 の砂粒を少 量含む(長 石・石英)	良好	4/5
5 鉢 (須恵器) SE-201	口径 16.0		内外面回転ナデ。	淡青灰褐色	精良	良好	口縁部1/4
6 三 甕 (須恵器) SE-201	口径 32.0		同上。	外 淡灰褐色 内 淡青灰褐色	3mm以下の 砂粒を少 量含む(長石)	良好	口縁部1/4 自然積付着
7 同 杯 (土師器) SE-201	口径 14.4 器高 3.7		口縁部内外面ヨコナデ、体部外周ナデユ ビオサエ、内面ナデ。	外 明茶色— 淡茶褐色 内 明茶色	2mm以下の 砂粒を少 量含む(長石 ・石英)	良好	2/3
8 同 (土師器) SE-201	口径 21.0		口縁部内外面ヨコナデ、体部外周ナデ、内 面ヘラナデ。	淡黄茶色	1mm以下の 砂粒を微量 含む(長石)	良好	口縁部1/6
9 三 同 上	口径 30.4		口縁部内外面ヨコナデ、体部外周ナデ、ユ ビオサエ内面ヘラナデ。	暗灰色	1mm以下の 砂粒を少 量含む(長石 ・石英)	良好	2/3 煙付着
10 同 同 上	口径 32.8		口縁部内外面ヨコナデ、体部外周ハケナデ (6本)、内面ナデ・ユビオサエ	褐色—乳灰茶 色	2mm以下の 砂粒を少 量含む(長石 ・石英)	良好	口縁部4/5
11 三 把手付き壺 (土師器) SE-201	口径 33.4		口縁部内外面ヨコナデ、体部外周ユビオサ エ、内面ヘラナデ。	外 暗色— 灰黑色 内 暗色— 灰色	3mm以下の 砂粒を含む (長石・ナホー ト・赤褐色 鐵化鉄)	良好	1/4 黒斑有り
12 三 同 上	口径 30.0		口縁部内外面ヨコナデ、体部外周ハケナデ (8本)、内面ヘラナデ・ユビオサエ・接合痕。	灰茶色	2mm以下の 砂粒を含む	良好	4/5 煙付着
13 同 杯 盖 (須恵器) 第7層	口径 9.6 器高 2.7 つまみ径 1.6 つまみ高 0.8		天井部外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ。	淡灰色	2mm以下の 砂粒を少 量含む(長石 ・チャート)	良好	3/4

遺物番号 固底番号	器種 (土師器) 第7層	法量 口径 (cm) 巻高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況 備考
14	甕	口径 30.2	口縁部内外面ヨコナデ、底部外周ハケナデ(8本)、内面ナデ・ユビオサエ。	褐灰色	1mm以下の 砂粒を含む (長石)	良好	口縁部1/3
15	羽釜 (土師器) 第7層	口径 26.0 脚径 30.3	口縁部外面ヘラナデ・複合痕、内面ヨコナデ、他はナデ。	茶褐色	4mm以下の 砂粒を多量 含む(長石 ・雲母・角 閃石)	良	口縁部1/6 焼付着
16	甕 上	口径 28.0 脚径 32.3	口縁部内外面ヨコナデ・複合痕、体部外周 ナデ、内面ヘラナデ・ユビオサエ。	茶褐色	4mm以下の 砂粒を多量 含む(長石 ・雲母)	良	口縁部1/6 焼付着
19	杯 盆 (須恵器) 第9層	つまみ径 2.2	天井部外周回転ヘラケズリ、内面不定方向 のナデ。	外 淡灰色 内 褐灰色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(長石 ・チャート)	良好	1/3
20	杯身 (須恵器) 第7層	高台径 9.7	底部外周回転ヘラケズリ、内面不定方向の ナデ。	灰白色	3mm以下の 砂粒を微量 含む(長石 ・チャート)	良好	底部のみ。 底部外周に 「一」のヘラ 記号有り。
21	甕 上	口径 12.4	体部内外回転ナデ、底部外周回転ヘラケズ リ、内面ナデ。	外 淡灰色 内 乳白色	4mm以下の 砂粒を多量 含む	良好	
22	鉢 (須恵器) 第9層	底径 7.0	体部内外回転ナデ、底部内外面不定方向 のナデ。	灰白色	4mm以下の 砂粒を多量 含む(長石)	良好	1/3 底部外周に 刺突孔を巡 らす
23	高杯 (土師器) 第9層	底径 8.4	内外面ナデ。	淡青色	1mm以下の 砂粒を微量 含む(長石)	良好	底部1/2
24	杯 (土師器) 第9層	口径 10.4 巻高 3.5	口縁部内外面ヨコナデ、他内外面ナデ。	外 淡米灰色 内 乳白色	3mm以下の 砂粒を少量 含む(長石 ・赤褐色酸 化粒)	良好	3/4
25	甕 上	口径 16.0	体部外周ヘラミガキ、底部外周ユビオサエ、 他ナデ。	外 淡褐色 内 明茶褐色	1mm以下の 砂粒を微量 含む(長石 ・雲母)	良好	1/4
26	中皿 (土師器) 第9層	口径 22.4	口縁部内外面ヨコナデ、底部外周ナデ、内 面剥離の為調整不明。	褐灰色	2mm以下の 砂粒を含む (長石・雲 母)	良	1/5
27	甕 (土師器) 第9層	口径 21.0	口縁部内外面ヨコナデ、底部外周ヘラナデ、 内面ナデ。	淡黃茶色	1mm以下の 砂粒を微量 含む(長石)	良好	口縁部1/5

### 3.まとめ

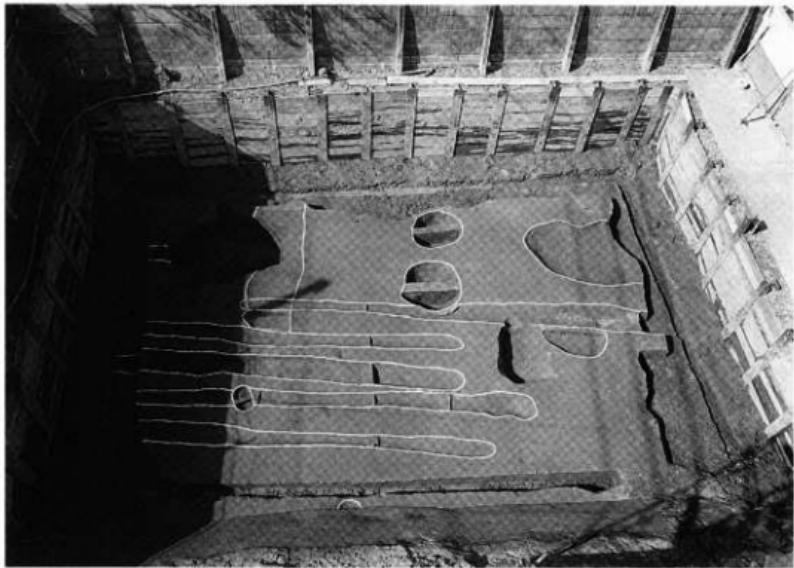
今回の調査では、鎌倉時代の耕作面及び、奈良時代に比定される遺構面の2時期に渡る遺構・遺物を検出することができた。鎌倉時代～近代までは、今回の調査結果及び当地周辺における発掘調査の資料から周辺地域においては、農耕作にみられる生産域であったことがわかる。しかし奈良時代においては当調査では井戸1基のみしか遺存しておらず、他の面はおそらく鎌倉時代～近代にかけての時期に耕作等によって削平されたとおもわれ、当時代の遺構の性格を明確に把握することはできない。ただ、この井戸については本文でも触れたように出土遺物のなかの『斎串』から井戸祭祀にまつわる当時の人々の考え、そして土器からは庶民生活の一端をそれぞれ窺い知ることができる。

ここで当遺跡内における既述の周辺の調査（第1図参照）をみると、北西部では昭和53年に八尾市教育委員会による調査において、古墳時代中期（5世紀初頭～5世紀中頃）の木杭列を伴った小溝遺構が確認されている。これは水田畦畔状農道と考えられているが、当調査地においては下層確認も含めてその時期の遺構はもとより遺物もみられなかった。これは第15層以下の砂層の堆積状況からみて、当地においては河川によってこの時期の生活面が削平を受けたという説方もできる。また、当調査地の東方部では昭和58年に当調査研究会の調査（A T83-2）によって平安時代末から室町時代にかけての遺構が確認され、さらに翌昭和59年にはその西側で八尾市教育委員会の調査によって平安時代末の遺構・遺物が検出されている。これらの遺構は居住域を示すものであるが、当調査地では第1調査面（鎌倉時代の耕作面）と対応するところであり、今回の調査によって当遺跡内での中世期における生活域の西への広がりが明確となった。

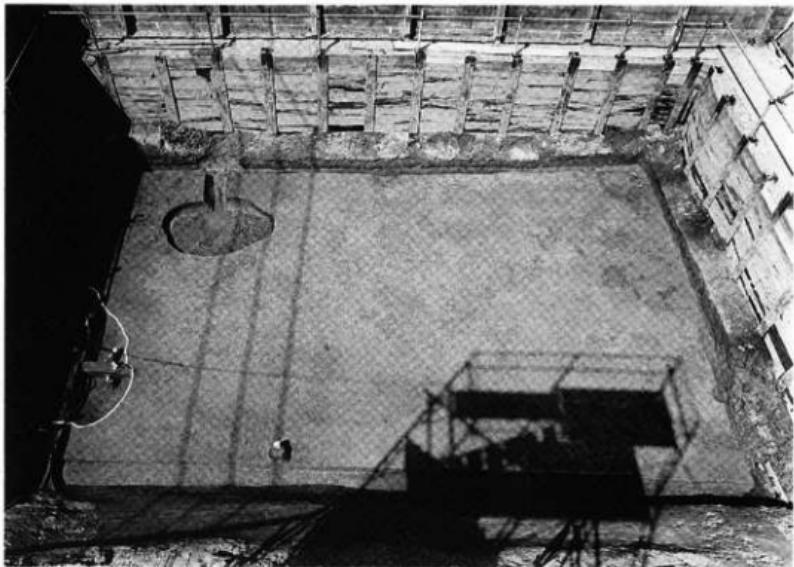
#### 註記

- 註1 黒崎直 「斎串考」『古代研究』10号 1976年
- 註2 長慶保明 「井戸における斎串使用の一例—滋賀県高島郡高島町鶴遺跡の井戸—」『古代研究』19号 1980年
- 註3 八尾市教育委員会 「昭和53・54年度 墓藏文化財発掘調査年報」八尾市文化財調査報告7 1981.3
- 註4 (財)八尾市文化財調査研究会 「昭和58年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984年
- 註5 八尾市教育委員会 「八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告11 昭和59年度 国庫補助事業 1985.3

図版一



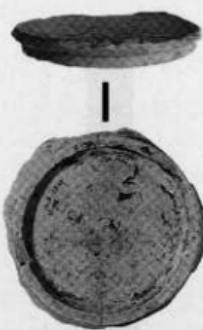
第1調査面全景（南から）



第2調査面全景（南から）



SE-201 検出状況（西から）



3



4



6



9



10



11



12

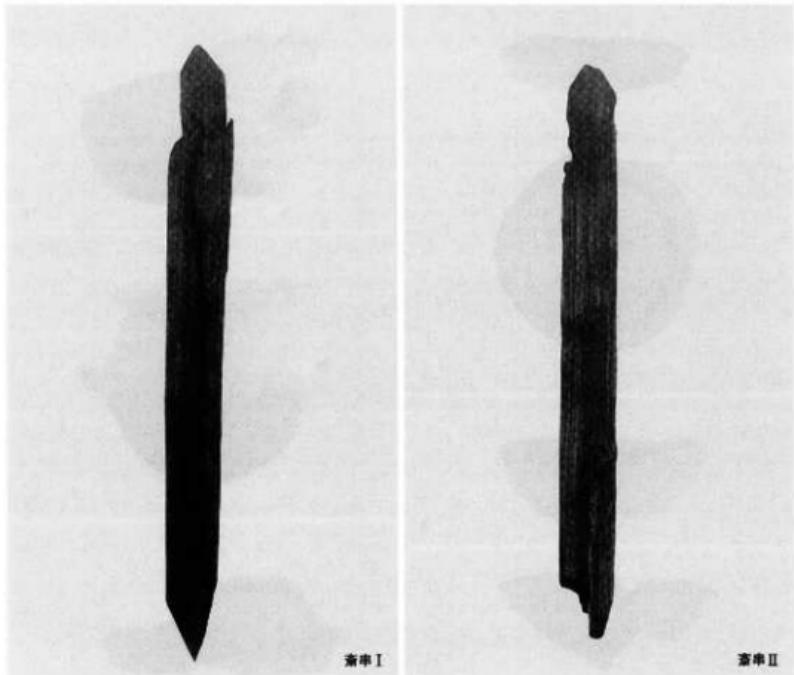


15



22

SE-201 (3・4・6・9・10~12)、遺構に伴わない出土遺物 第6層 (15・22)



S E - 201 墓土出土遺物

### III 跡部遺跡第9次調査（AT92-9）

## 例　　言

1. 本書は、八尾市春日町1丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第9次調査（AT92-9）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社第63号平成4年7月14日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年10月7日から平成4年10月13日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は約20m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては垣内洋平・福島友香が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測一北原清子、図面トレース一北原が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめ	25
2.調査概要	25
1) 調査方法と経過	25
2) 基本層序	25
3) 検出遺構と出土遺物	27
3.まとめ	27

### III 跡部遺跡第9次調査 (AT92-9)

#### 1 はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する跡部本町1～4丁目、跡部北の町1・2丁目、跡部南の町1・2丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目の東西1.4km南北0.5～1kmに展開する弥生時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

地理的には長瀬川左岸の三角洲状の微高地に位置し、現地表の海拔は9.5m前後を測る。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に龜井遺跡、北に久宝寺遺跡が位置している。

当調査地の周辺では、昭和56年に春日町1丁目57で八尾市教育委員会が実施した調査で、弥生時代前期～中期の土坑1基・溝3条のほか古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。また、平成元年に春日町1丁目45-1で当調査研究会が実施した調査(AT89-5)では、弥生時代後期末以前に埋められた銅鐸1個・銅鐸埋納坑1基・溝1条・落ち込み1ヶ所を検出したほか、古墳時代初頭(庄内式古相)の土坑1基、古墳時代前期(布留期古相)の竪穴住居2棟・土坑1基・溝1条・小穴27個、平安時代後期の土坑1基が検出されている。さらに、平成4年に春日町1丁目47で当調査研究会が実施した調査(AT92-7)では、弥生時代中期から古墳時代前期に至る遺物包含層の存在が確認されている。今回の調査地点は、昭和56年に八尾市教育委員会が実施した調査地の北約100m地点に位置する。(調査地点はP1第1図参照)

#### 2 調査概要

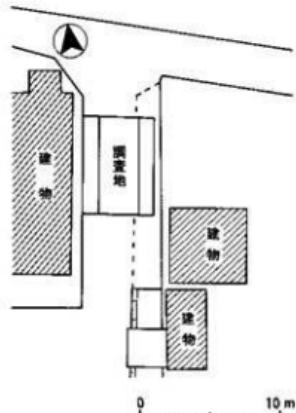
##### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事の発進立坑設置に伴うもので、鋼矢板で囲繞された東西幅3m、南北幅7mを調査対象とした。調査では、地表下1.3mまで機械掘削した結果、古墳時代中期と奈良時代の遺物を少量含む第3層を検出したため、0.2m前後については人力掘削と平面精査を実施し、第3層の遺物包含の状況と第4層上面での遺構有無の確認に務めたが、第4層上面では遺構は検出されなかった(第1調査面)。さらに、1.4m前後を機械掘削した結果、地表下2.8m前後(標高6.4m前後)に弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物を極少量含む第9層を確認した。上面と同様、第9層と第10層上面を対象として、人力掘削と平面精査を実施したが、第10層上面では遺構は検出されなかった(第2調査面)。

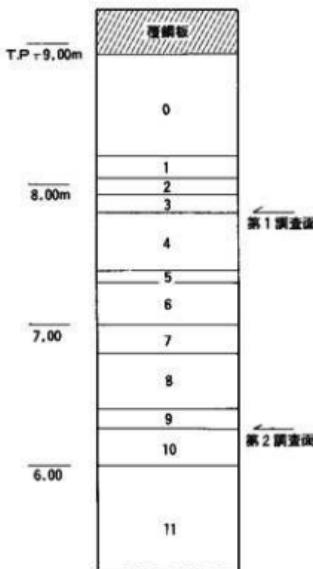
##### 2) 基本層序

第0層 鋼矢板打設時の攪乱。層厚1.0m前後。覆鋼板上面の標高はT.P+9.2m前後。

- 第1層 10B G7/1 明青灰色極細粒砂。層厚0.2m前後。床土。
- 第2層 7.5Y R7/3 にぶい橙色極細粒砂。層厚0.1m。
- 第3層 10Y R6/2 灰黃褐色粘質土。層厚0.15m前後。古墳時代中期と奈良時代の遺物を少量含む。
- 第4層 10Y R7/1 灰白色粘質土。層厚0.5m前後。上面が第1調査面。
- 第5層 10Y R7/3 にぶい黄橙色極細粒砂。層厚0.1m。
- 第6層 10G Y8/1 明緑灰色粘土。層厚0.2~0.3m。
- 第7層 N6/ 灰色粘土。層厚0.1~0.2m。
- 第8層 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト混じり粘土。層厚0.3~0.4m。
- 第9層 N4/ 灰色粘土。層厚0.1~0.2m。弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物を極少量含む。
- 第10層 10B G6/1 青灰色粘土。層厚0.25~0.4m。上面が第2調査面。
- 第11層 5B G7/1 明青灰色シルト混じり粘土。層厚0.65m以上。



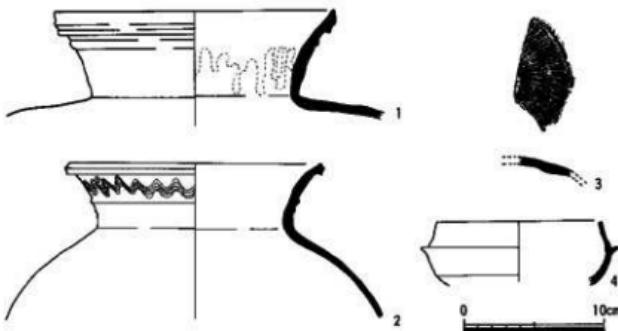
第1図 調査位置図



第2図 基本層序模式図(1/40)

### 3) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では2面にわたる調査を実施したが、顕著な遺構は検出されなかった。しかし、第3層と第9層で遺物包含層を確認した。第3層からは古墳時代中期と奈良時代の遺物が少量出土している。古墳時代中期の遺物には、須恵器甕2点(1・2)、蓋形土器1点(3)、杯身1点(4)がある。奈良時代の遺物には土師器杯・丸瓦等があるが、いずれも小破片で摩耗を受けたものである。第9層からは、弥生時代後期から古墳時代初頭に比定される土器片が数点出土しているが、いずれも小破片で全容を知り得たものは無い。



第3図 第3層出土遺物実測図

### 3まとめ

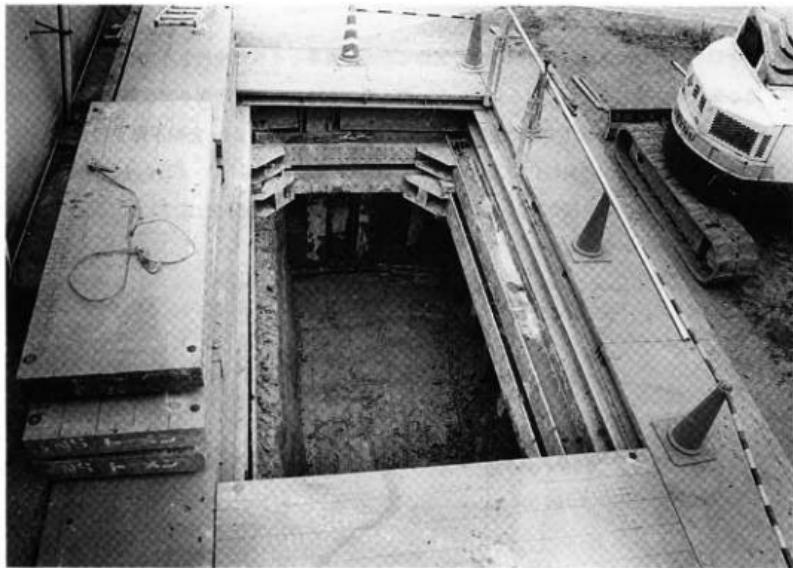
今回の調査では、顕著な遺構は検出されなかったが、第3層と第9層で遺物包含層の存在を確認した。第3層からは出土した古墳時代中期の須恵器類は、いずれも余り摩耗を受けていない資料であることから、近隣に当該期の集落が存在している可能性が高い。奈良時代の出土遺物の中には、丸瓦片1点が含まれている。丸瓦については、調査地の東約250m地点に白鳳時代の創建とされる渋川庵寺跡が存在しており、これらと有機的な関係が推定される。一方、第9層からは極少量ではあるが弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が出土している。当該期の集落は、当調査地の南西約350mで実施した第1次調査(A T82-1)、第4次調査(A T88-4)および南東約160mで実施した第5次調査(A T89-5)で確認されているが、当調査地付近は遺物の出土状況からみて、この時期集落の中心から離れた位置にあったようである。

註記

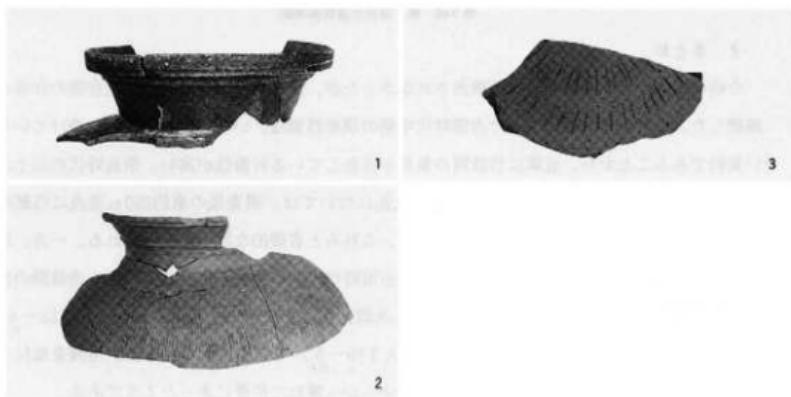
註1 (財)八尾市文化財調査研究会『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その結果への概要－』  
1983.3

註2 (財)八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財研究会報告書25 1989.12

註3 (財)八尾市文化財調査研究会『錦部遺跡発掘調査報告書』一大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鋸一  
(財)八尾市文化財調査研究会報告31 1991.3



調査地全景(南から)



包含層出土遺物

#### IV 小阪合遺跡第22次調査 (K S 92-22)

## 例　　言

1. 本書は、八尾市若草町23-1、23-4の一部、23-6、23-7、23-8で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する小阪合遺跡第22次調査（KS92-22）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第60号 平成4年7月2日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が柴本マツエ氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年8月5日～8月28日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は200m<sup>2</sup>である。調査については千賀幸二・大西謙太郎・松岡章雄・後藤信男が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

## 本文目次

1.はじめに.....	29
2.調査概要.....	31
1) 調査の方法と経過.....	31
2) 基本層序.....	32
3) 検出遺構と出土遺物.....	34
4) 遺構に伴わない出土遺物.....	37
5) 出土遺物観察表.....	49
3.まとめ.....	52

## IV 小阪合遺跡第22次調査 (KS92-22)

### 1. はじめに

小阪合遺跡は八尾市の中心部にあたる遺跡で、行政区画では若草町・小阪合町1・2丁目・南小阪合町2・4丁目・青山町1～5丁目・山本町南7・8丁目の一帯に存在する弥生時代～近世に至る複合遺跡である。地形的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡中央には小河川である楠根川が蛇行しながら北西流している。現在の標高は8～9mを測る。

周辺には当遺跡と同様、弥生時代から遺跡が密集している。西には成法寺遺跡、南西には矢作遺跡、南には中田遺跡、北には萱振遺跡などが接している。

近接の調査では当調査研究会が第7次調査(KS86-7)・第9次調査(KS87-9)・第12次調査(KS87-12)・第22次調査(KS91-21)、その他八尾市教育委員会・大阪府教育委員会の調査機関で行われている。これらの調査成果については第1表に掲載した。



第1図 調査地位位置図及び周辺図

第1表 小阪合遺跡発掘調査一覧表

No.	地名	調査所在地	調査期間	調査内容	調査面積	検出品目	出土 產物	測量	報告書
1	-	吉山町 3丁目	昭和19年2月26日 ~3月3日	中川選手家跡構 造	40	小便・糞便溝	古墳・中世の遺物		八尾市
2	-	山田町南 8丁目	同上	同上	60		古墳・中世の遺物		八尾市
3	-	吉山町 1丁目	昭和54年12月	地下構造調	150		古墳・中世の遺物		八尾市
4	KSB2-01	八尾市青山町4丁 目北	昭和57年11月27日 ~12月1日	南小阪分区櫛型 理構造	1,950	出土実測 土坑・古墳竪溝一井戸 ・土坑・廻ら込み・古墳中期一二 段・溝・古墳・柱立・井戸・竿穴・ 廻ら込み・青瓦・鍵瓦・瓦砾・瓦 ・瓦	竿穴二つ(廻ら込み) ・井戸式土坑・布管 ・大井戸・土的器・残 ・柱立・鍵瓦・青瓦六 ・瓦・土瓦・瓦	10	高級 当調査研究 会報告10
5	KSB3-02	青山町 1丁目 ~2番	昭和58年6月21日 ~7月14日	南小阪分区櫛型 理構造	350	近い溝・土坑・小穴・瓦片	土面断片・織物片	1	高級 当調査研究 会報告11
6	-	東小阪町 1丁目 内	昭和58年6月1日 ~3月25日	南小阪分区櫛型 理構造	5,000	古墳前期一溝・自然河川・平安一築 井戸式一溝・自然河川			大阪府
7	KSB3-03	青山町4丁目北 部	昭和58年10月27日 ~11月5日	南小阪分区櫛型 理構造	1,544	古墳後期末・土坑・西側斜面一十段 ・溝・六段の溝一溝・糞便一井戸 ・小穴・竿穴一溝・近井 溝	糞便全段(V)・井戸式 土坑・布管式土坑・ 古墳式・残瓦器・ 筒瓦一十段分・織物一 糞便	10	高級 当調査研究 会報告13
8	KSB4-04	吉山町・西小阪 町内一部	昭和59年5月15日 ~11月15日	南小阪分区櫛型 理構造	1,940	古墳後期一廻ら込み・古墳斜面 ・井戸・長・廻ら・井戸・古墳中期一溝 ・輪郭斜面・竿穴・小穴・廻ら込み ・糞便一井戸・鍵瓦・瓦砾	竿穴二段(V)・井戸 式土坑・布管式土坑・ 山形式一廻ら込み・ 糞便地盤(船形船 形)等	10	高級 当調査研究 会報告15
9	-	南小阪分区 1丁目 内	昭和59年11月1日 ~20年12月28日	中川選手家跡構 造工事	200	糞便代一水糞			大阪府
10	XSB4-05	南小阪分区 1丁目 の一部	昭和60年1月23日 ~3月20日	南小阪分区櫛型 理構造	659	出土後期末～南北溝削一溝・平安 期・櫛型油壓・青瓦・溝・小穴 ・糞便一溝	糞便二段(V)・井戸 式土坑・糞便末一瓦 等(瓦形器)	1	西村 当調査研究 会報告16
11	KSB5-06	青山町3丁目北 部	昭和60年7月10日 ~12月28日	南小阪分区櫛型 理構造	1,742	古墳中期一溝・土坑・竿穴・糞便一 溝・空町一川	糞便二段(V)・井戸 式土坑・糞便式 土器・糞便・土	10	高級 当調査研究 会報告18
12	-	吉山町4丁目北	昭和60年11月5日 ~11月12日	柳原西電力取 扱工事	53	古墳中期・土坑・小穴・溝			八尾市
13	-	西小阪町 1丁目 北	昭和60年1月 6日 ~3月25日	南小阪分区櫛型 理構造	200	糞便代一溝・糞便代一溝			大阪府
14	-	小阪町 1丁目内	昭和61年2月7日 ~8日	南小阪分区櫛型 理構造	93	糞便・自然河川			八尾市
15	KSB6-07	小阪分区 1・2丁目 の一部	昭和61年5月 5日 ~8月 8日	ポンプ清掃工事	727	糞便一回工	糞便生土器(V)・井戸 式土器・布管式土器 等・糞便器・糞便・土 器・糞便・瓦砾・青瓦 等	2	高級 当調査研究 会報告14
16	XSB6-08	青町 1・2丁目の 一部	昭和61年8月25日 ~12月25日	南小阪分区櫛型 理構造	598	古墳中期一溝・古墳中期一竿穴・平 穴・古墳斜面・土坑・空町一溝・平 穴・糞便器一溝合一竿穴・竿穴・小穴・溝 ・空町一溝・小穴・溝・糞便溝	糞便生土器(V)・井戸 式土器・布管式土器 等・糞便器・糞便・土 器・糞便・瓦砾・青瓦 等	10	高級 当調査研究 会報告14
17	KSB7-09	小阪町 1・2丁目	芦根62年4月 7日 ~7月 3日	ポンプ清掃工事	330	糞便・自然河川	糞便生土器(V)・井戸 式土器・布管式土器 等	1	高級 当調査研究 会報告16
18	KSB7-10	南小阪分区 1丁目 芦根62年5月 1日 ~17日	南小阪分区櫛型 理構造	1,023	糞便中期一竿穴・溝・古墳初期・土 器器皿・土坑・糞便・糞便中期一竿 穴・糞便・糞便器一溝	糞便生土器(V)・井戸 式土器・布管式土器 等・糞便器・糞便	40	高級 当調査研究 会報告16	
19	KSB7-11	南小阪分区 1丁目 11	昭和62年5月 21日 ~9月 5日	ポンプ清掃工事	276	糞便一回工・糞便一溝	糞便器	1	高級 当調査研究 会報告16
20	-	吉山町 1丁目内	昭和62年10月1日 ~12月25日	南小阪分区櫛型 理構造	400	糞便中期・糞便・溝・糞便中期一上 段・糞便代一溝			大阪府
21	-	西小阪町 1丁目 北	昭和62年5月 1日 ~2月25日	糞便施設リユーブ 工事	560	古墳中期・竿穴・糞便・糞便中期一 竿穴・溝			大阪府
22	-	小阪分区 1・2丁目 北	昭和62年5月 1日 ~10月 27日	糞便施設リユーブ 工事(NTT)	4	糞便・糞便代一溝丸・糞便			八尾市
23	KSB7-12	小阪分区 1・2丁目 北	昭和62年5月 23日 ~12月 25日	ポンプ清掃工事	600	糞便・糞便	糞便器	1	高級 当調査研究 会報告15
24	KSB7-13	吉山町 1丁目	昭和62年11月 7日 ~12月 25日	南小阪分区櫛型 理構造	260	糞便初期・糞便・糞便中期一竿 穴・糞便・糞便器・糞便・糞便	糞便生土器(V)・井戸 式土器・布管式土器 等・糞便中期の糞便器 ・糞便器・糞便	10	高級 当調査研究 会報告16

No	地名	調査所作成	調査期間	調査面積	検出実績	出土遺物	発掘量	報告書
23	KSBP-14	南小阪合町4丁目	昭和60年1月11日 ～1月15日	春松久礼	13なし	なし	0	高井 馬場研究会報告24
26	一	青山町1丁目54	昭和65年5月22日	春森所	9小便の遺構	遺物を確認	近江	八尾市報告書 22
27	KSBP-15	小阪合町3丁目53-11	昭和65年5月17日 ～5月31日	サンブ隊旗底	358吉河一川用	土器類	0	高井 馬場研究会報告25
28	一	小阪合町1丁目内	昭和65年6月6日	並寺祐喜	27遺像なし	二号墓	八尾市	八尾市報告書 23
29	KSBP-16	青山町1-3・5丁	昭和65年7月5日 ～8月20日	山本町合区農業 事業事務	500古墳周辺一河川2、古墳中期一河川 1、戸内一柱樋1	土器類・陶器類	2	高井 馬場正助元 会報告25
30	KSBP-17	青山町2丁目47	昭和65年10月3日 ～10月4日	共同住宅	32	土器類	1	高井 馬場研究会 報告25
31	一	南小阪合町1丁目	昭和66年1月14日	金井トネ通	79古墳時代一埴輪片瓦	土器類・埴輪	1	八尾市 八尾市報告書 26
32	山本町南4丁目	昭和66年12月2日	公美亭水道	衛生施設系・石室壁	衛生上部(V)	1	八尾市 八尾市報告書 20	
33	一	青山町2丁目21	平成元年1月17日	共同住宅	6古墳一中空の遺物を確認	土器類	八尾市	八尾市報告書 20
34	KSBP-18	青山町3丁目2-1	平成元年4月4日 ～4月28日	共同住宅	204矢内平橋・芦戸1・藤込2・7・小穴 74・塙11・衛生施設・柱跡・古墳台 場1・戸内1・千安1・壁塗1・壁 20	衛生土器(V)・土器 ・石器・土器類 ・陶器・瓦器	20	高井 馬場研究会 報告26
35	KSBP-19	青山町3丁目9-9 4枚発見ブリック 屋舎1	平成2年10月16日 ～11月1日	共同住宅	164古墳後期一軸穴式柱塗1・上塙塗1、 余良・河川・千安・河川1・塙塗1 ～20	南方式土器・衛生式 柱塗1・上坪塗・漆器 等	10	河井 馬場研究会 報告26
36	KSBP-20	青山町2丁目1	平成2年1月9日 ～5月16日	共同住宅	240古墳後期一中空一河川1・千安・井戸 1・土塙1・塙塗1	九九式柱塗・中空・二 塙・木製品(竹筒・ 漆器・小形木製品等)	7	河井 平成2年生 事業報告
37	KSBP-21	吉田町25-1,25-2, 25,5,27,28	平成2年1月8日 ～7月10日	マンション	300上塙・中空・塙塗1・吉河一上 戸1・土塙1・塙塗1・井戸1・千安1・ 井戸1・井戸2	衛生・土器類・瓦 器・漆器等・瓦・土 器等	10	高井 馬場研究会 報告29
38	南小阪合町1丁目 8番の1～6番 9番	平成4年5月7日 ～11月	共同住宅	105中空・塙1・小穴2・河川1	土器・土財類	1	八尾市 八尾市報告書 27	
39	一	青山町5丁目21-1 9番	平成4年6月8日	春森謹慎	3.8古墳跡・小穴2	古式穴土器・尾塗不 規・土器類	八尾市	八尾市報告書 25
40	一	吉田町25-1,25-4	平成4年6月26日	共同住宅	9大穴以降・塙1・小穴1	土器類・埴輪器・瓦 器	1	八尾市 八尾市報告書 27
41	一	青山町5丁目3-1 9番・山本町南3丁 目203	平成4年6月29日 ～7月10日	共同住宅	8山塙後期一塙1・小穴4・中空一塙 3・小穴1・土坑状の掘り込み1	土器類・陶器類・瓦 器	1	八尾市 八尾市報告書 27
42	KSBP-22	吉田町25-1,25-4 9番・25-6,25-7, 25-8	平成4年8月5日 ～8月28日	共同住宅	200衛生施設一塙1・吉河削除一塙1・ 平成時代式・井戸1・小穴14・塙塗1 ～10枚3・小穴4・馬糞	衛生土器(V)・井戸 式土器・衛生式土器 ・土壁器・埴輪器・ 瓦器・瓦・瓦被卓・ 木製品	7	高井 報告
43	一	青山町5丁目79-1	平成4年8月21日	共同住宅	13中空・溝1	土器類・瓦器	1	八尾市 八尾市報告書 27

## 2. 調査概要

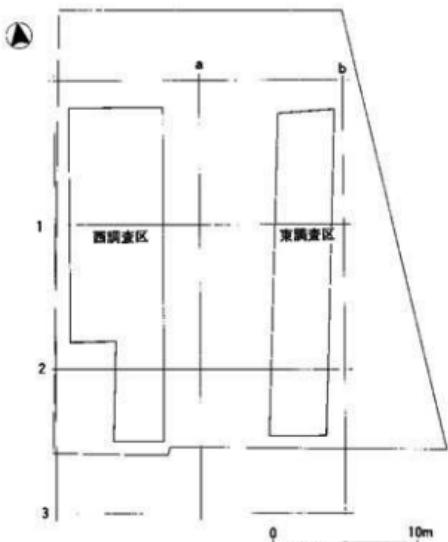
### 1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は、事業者と八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会との両者で協定書を締結して実施した。調査地は小阪合遺跡推定範囲内の北部にあたり、南部約40mの所では共同住宅に伴う発掘調査(KS91-21)、東部では楠根川の流域下水道工事に伴う発掘調査(KS86-7)が行われている。今回の調査は共同住宅建設工事の基礎部分で、南北トレンチ2箇所(東調査区[88m<sup>2</sup>]・西調査区[112m<sup>2</sup>])を設定し、西調査区から実施した。まず、現地表から1.1mまでの土層を機械で排除し、それより以下、約0.3~0.4mの上層については人力掘削を実施した。調査期間は平成4年8月5日～8月28日である。調査面積は約200m<sup>2</sup>を測る。

調査にあたっては、西調査区の北部に任意の点を設け、それを基点にしてトレンチ全体を踏

える範囲に10m四方角の区画を作成した。区名は南北線が西から東へアルファベットのa～b、東西線が北から南へ数字の1～3を付称し、交差する北西側を優先して1a～2b区と呼称して調査を進めた(第2図)。

今回の発掘調査は、当調査研究会が当遺跡で実施した第22次調査にある。



第2図 調査区位置図

## 2) 基本層序

調査区の基本層序は、第3図に示す第1層～第13層までの13層が調査区内で普遍的にみられる基本層である。第14層～第23層は遺構及び自然河川の堆積土である。なお、第10層以下の土層は下層確認トレンチで確認したものである。

第1層 盛土(層厚0.6～1.0cm)。

下部は土質改良を行って

おり、堅くなっている。

第2層 旧耕土(層厚5～20cm)。近年まで耕作していた土層で、東調査区中央から東側は一段(25～30cm)低くなっている。高い部分は畑としているようで南北方向の畝がみられる。

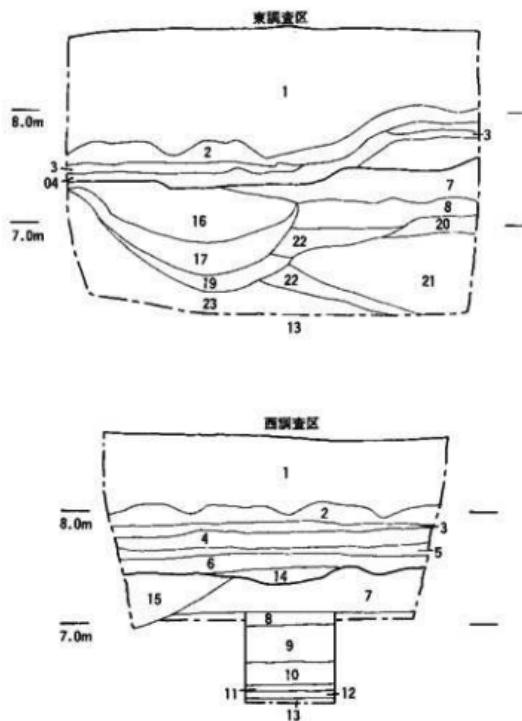
第3層 灰褐色～灰青色微砂(層厚5～15cm)。疊土である。

第4層 灰褐色シルト(層厚5～10cm)。南東側でなく、北西側に拡がる層である。近世以降の整地層と思われる。

第5層 暗灰褐色砂礫混砂質土(層厚20～30cm)。南西側の高い部分に堆積する。

第6層 淡灰黄色粘質シルト(層厚20～40cm)。室町時代の遺物を含む土層である。第1調査区の南部では近世により削平されている。

第7層 淡灰茶色シルト(層厚10cm)。この上面から平安時代末～室町時代の遺構を検出した。標高は7.5m前後を測る。弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物及び炭化物を



- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 1 盛土         | 13 灰色粗砂            |
| 2 旧耕土        | 14 淡黄灰色粘質シルト(炭を含む) |
| 3 灰褐色～灰青色微砂  | 15 淡灰褐色粘質シルト       |
| 4 灰褐色粘質シルト   | 16 灰色粗砂混細砂         |
| 5 雜灰褐色砂礫混砂質土 | 17 杂灰褐色細砂混微砂       |
| 6 浅灰黄色粘質シルト  | 18 淡灰色粘質シルト        |
| 7 淡灰紫色シルト    | 19 雜灰色粘土           |
| 8 淡茶灰色細砂     | 20 淡灰褐色微砂          |
| 9 淡灰色粗砂      | 21 淡茶灰色細砂          |
| 10 灰色粗砂      | 22 淡灰色微砂           |
| 11 青灰色粘土     | 23 雜灰色シルト混粘土       |
| 12 青灰色細砂混粘土  |                    |

第3図 断面図 (S = 1 / 50)

ごく少量含む。この上面を第1調査面とした。

- 第8層 淡褐灰色粘質シルト（層厚70cm）。上面で弥生時代後期末の溝（SD-201）を検出した。標高は7.1m前後を測る。この上面を第2調査面とした。
- 第9層 淡黄灰色シルト（層厚20~50cm）。
- 第10層 灰色粘土（層厚40cm）。炭化物を少量含む。
- 第11層 青灰色粘土（層厚10cm）。
- 第12層 青灰色細砂混粘土（層厚10cm）。
- 第13層 灰色粗砂（層厚50cm以上）。弥生時代後期末以前に埋没した自然河川の堆積層とみられる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代後期末～室町時代に至る遺構・遺物を検出した。東調査区では室町時代の溝2条（SD-102・SD-104）で、SD-102は西調査区からの継続する溝である。西調査区では2面の調査を行った。第2調査面では弥生時代後期末の溝1条（SD-201）・古墳時代前期以降の溝1条（SD-202）、第1調査面では平安時代末の井戸1基（SE-101）、小穴13個（SP-101~SP-113）・溝1条（SD-101）、室町時代の小穴4個（SP-114~SP-118）・土坑（SK-101~SK-103）・溝（SD-102）を検出した。調査区で出土した遺物は弥生時代後期末～室町時代に至るもので、コンテナ箱にして約7箱分であった。そのうち大半の遺物は室町時代の遺構内から出土した。

以下、各調査区ごとに記し、検出遺構は時代の古い順に報告している。

#### <西調査区>

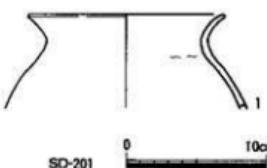
##### ① 弥生時代後期から古墳時代前期（第2調査面）

溝（SD）

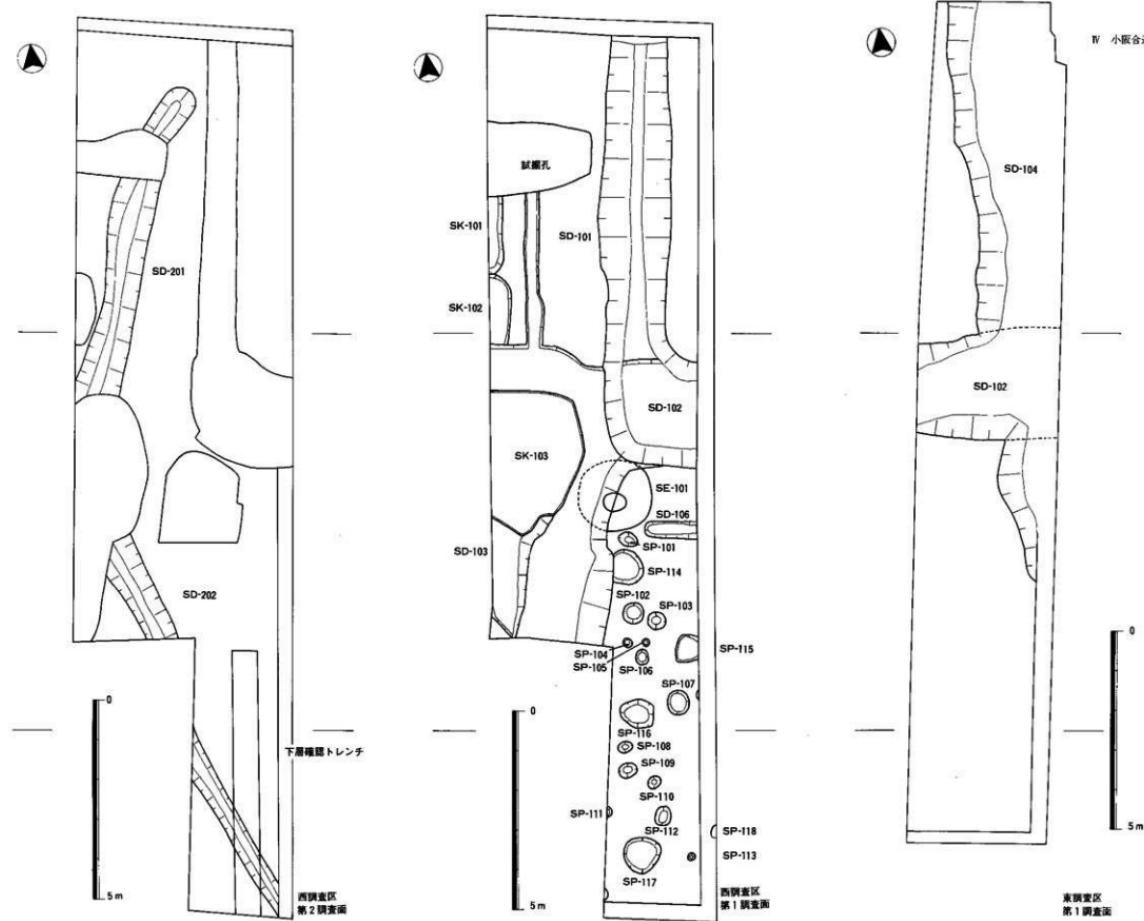
SD-201

調査区の北部で検出した。方向は南北方向を示す。

南部は調査区外に至り、北部は途中で途切れている。検出長m、規模は検出部で幅1.04m、深さ36cmを測る。断面形は半円形を呈する。堆積土は茶灰色粘質土・淡灰茶色粘質土・淡灰色粘質シルトである。遺物は弥生時代後期末に比定されるV様式壺（1）の破片1点が出土している（第4図）。



第4図 SD-201出土遺物実測図



## SD-202

調査区の南部で検出した。方向は南南東一北北西の方向で、南部は調査区外に至り、北部はSD-103に切られている。規模は検出部で、幅0.9cm、深さ50cmを測る。断面形は半円形を呈する。堆積土は淡灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

## 遺構に伴わない遺物

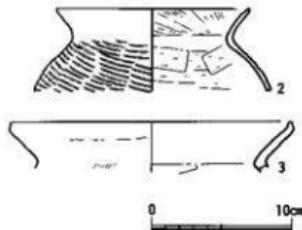
第2調査面の上層である第7層内からごく少量出土した。弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器片である。図示できたものはV様式系の甕(2)・庄内式甕(3)の2点である(第6図)。

## ② 平安時代末から室町時代(第1調査面)

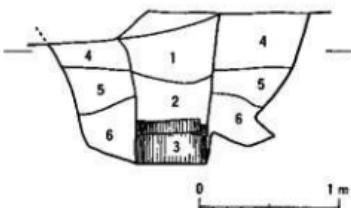
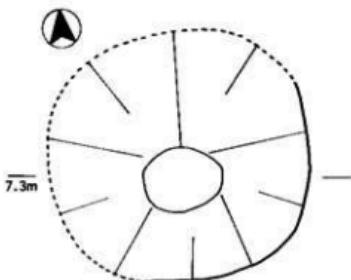
## 井戸(S E)

## SE-101

調査区中央(2a区)で検出した曲物を備えた井戸である。平面の形状は、掘形がほぼ円形で、井戸側が円形を呈する。西側の一部は室町時代の遺構で削平をうけていた。曲物は掘形の検出面より約60cm下で検出しておらず、上部は曲物の腐敗した痕跡がみられないことから埋め戻す際に抜き取ったものと考えられる。これより下から曲物二段を検出した。上段は腐敗し、一部を残す程度で規模・形態は不明である。下段はほぼ完全な形で遺存していた(第7図)。曲物の大きさは直径41.8cm、高さ30.0cm、厚み4mmを測り、その外側の上部と下部に直径42.6cm、上部の高さ7.1cm、下部の高さ6.4cm、厚み4mmを測るものがいた。堆積土は、井戸枠内が上層から暗灰褐色細砂混粘質シ



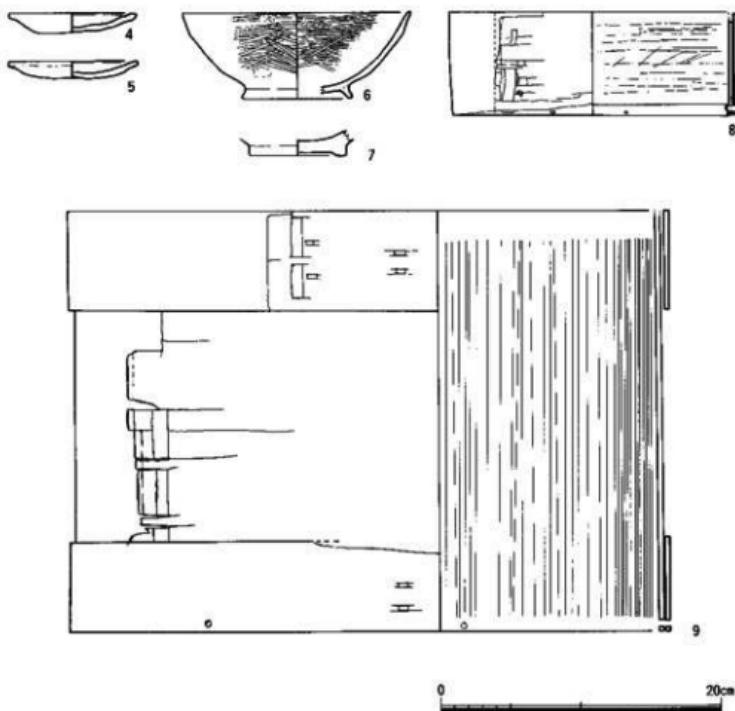
第6図 第7層出土遺物実測図



- 1 暗灰褐色細砂混粘質シルト
- 2 暗灰褐色シルト混粘土
- 3 暗灰青色シルト混粘土(植物遺体を含む)
- 4 暗灰色シルトと黄褐色粘質土のブロック土
- 5 淡灰黄色シルトと茶褐色粘質土のブロック土
- 6 青灰色粘質土

第7図 SE-101平面図

ルト・暗灰褐色シルト混粘土・暗灰青色シルト混粘土（植物遺体を含む）、掘形内が暗灰色シルトと黄褐色粘質土のブロック上・淡灰黄色シルトと茶褐色粘質土のブロック上・青灰色粘質土である。遺物は、掘形内から平安時代末に比定される土師器・瓦器片、井戸側（曲物）内から平安時代末に比定される土師質小皿・瓦器碗などの破片がごく少量出土している。図示できたものは曲物内から出土した土師器の小皿（4・5）・瓦器の桶（6）・磁器の白磁碗（7）である。また、井戸底の曲物内から桶（8）1点が出土した。桶は小型の曲物に底板付けたもので、大きさは径約20.6cm、高さ7.3cmを測る。底部には底板を固定したと思われる木釘の孔が8ヶ所みられる。この桶は井戸の水取り用に使われたものではないかと思われる。9の曲物は下段のものである（第8図）。



第8図 SE-101出土遺物実測図及び曲物実測図

### 土坑（SK）

#### SK-101

調査区西部（1a区）で検出した。北部は試掘調査により削平され、西部は調査区外に至るため、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西幅0.5m以上、南北幅1.85m以上、深さ18cmを測る。堆積土は茶褐色細砂混シルトの一層である。遺物は、内部から鎌倉時代に比定される土器の小片がごく少量出土している。

#### SK-102

SK-101の南部（2a区）で検出した。西部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西幅0.6m以上、南北幅1.8m以上、深さ50cm以上を測る。堆積土は暗茶灰色シルトと灰色粘質土のブロック土・暗青灰色細砂と灰青色シルトのブロック土で、人口的に埋め戻したものと思われる。遺物は、内部から古墳時代～室町時代に比定される土器片がごく少量出土している。

#### SK-103

SK-102南部（2a区）のSD-103の底面で検出した。西部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西幅2.4m以上、南北幅3.6m以上、深さ1.5mを測る。断面は、逆台形を呈する。堆積土は暗褐色粘質土と灰茶色シルトのブロック土である。この遺構も人工的に埋め戻したものと思われる。断面はほぼ方形を呈する。この遺構は灌漑用の貯水池として掘られたものと思われるが、詳細なことは不明であり、断言できない。遺物は、内部から古墳時代～室町時代に比定される土師器・須恵器・中国磁器・瓦・基礎石（反花台）などの破片がごく少量出土している。これらの遺物は埋め戻す際に混入したものであろう。図示できたものは3点で、中国磁器の碗（10）・硯（11）・反花台（12）である（第9図）。12は灯籠・五輪塔・仏像などの台座（基礎台）が考えられる。

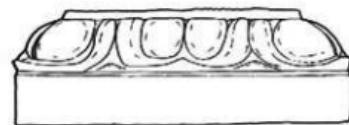
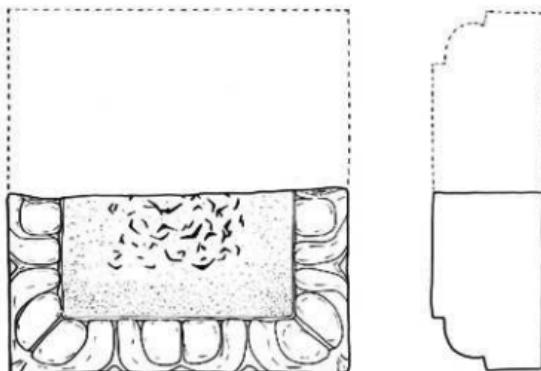
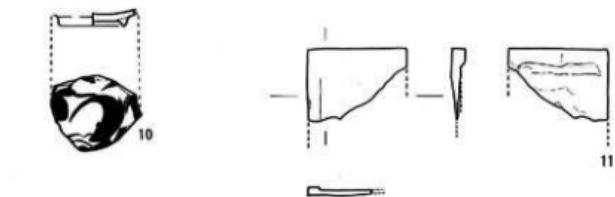
### 溝（SD）

#### SD-101

調査区の西部（1a・2a区）で検出した。方向は南北方向に伸び、南部はSD-103と合流する。北部は調査区外に至る。規模は検出部で、幅30～50m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は灰褐色粘質シルトの一層である。遺物は、内部から室町時代に比定される土師器・須恵器・陶器・瓦などの破片が少量出土している。

#### SD-102

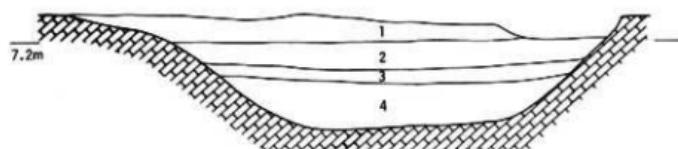
調査区北東部（1a・2a区）で検出した。方向は南北方向に伸び南部で屈曲し、東側の調査区外に至る。東調査区に伸びている。南西部はSD-103と合流し、SK-103が溝底部で検出している。規模は幅2.5～3.0m、深さ0.8mを測り、屈曲部では20cm程深くなっている。断



12



第9図 SK-103出土遺物実測図



- 1 墓灰褐色織砂混シルト
- 2 灰色シルト混粘質土
- 3 茶褐色と灰色粘質土のブロック土
- 4 青灰色砂織混粘質土

第10図 SD-102断面図

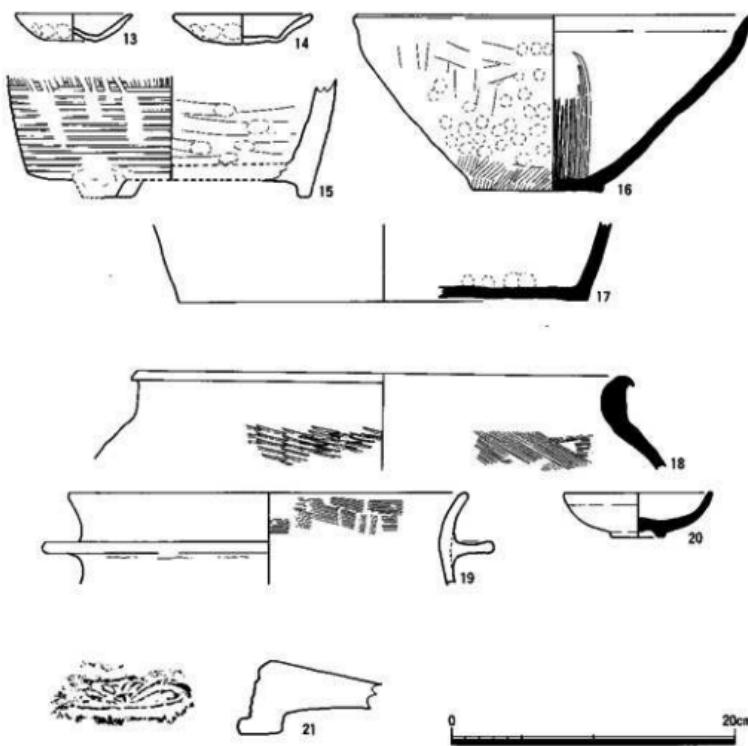


図11図 SD-102出土遺物実測図

面は半円形を呈する。堆積土は暗灰褐色砂泥シルト・灰色シルト混粘質土・茶褐色と灰色粘質土のブロック土・青灰色砂泥混粘質土上である（第10図）。遺物は、内部から古墳～室町時代に比定される土師器・須恵器・陶器・瓦器・瓦などの破片が少量出土している。図示できたものは9点で、土師器の小皿（13・14）・三足台付壺（15）・鉢（16）・甕（17・18）・羽釜（19）・磁器の高台付小皿（20）・軒平瓦（21）である（第11図）。

## SD-103

調査区南西部（2a区）で検出した。北部ではSK-102を切り、SD-101とSD-102が

合流している。方向は南北方向に伸び、南部は調査区外に至る。規模は検出部で、幅3.0m以上、深さ50cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色灰色砂質土である。遺物は、内部から古墳時代～室町時代に比定される土器片が少量出土している。図示できたものは7点で、V様式系壺(22)・鉢(23～25)・小型丸底壺(26)・羽釜(27・28)である(第12層)。

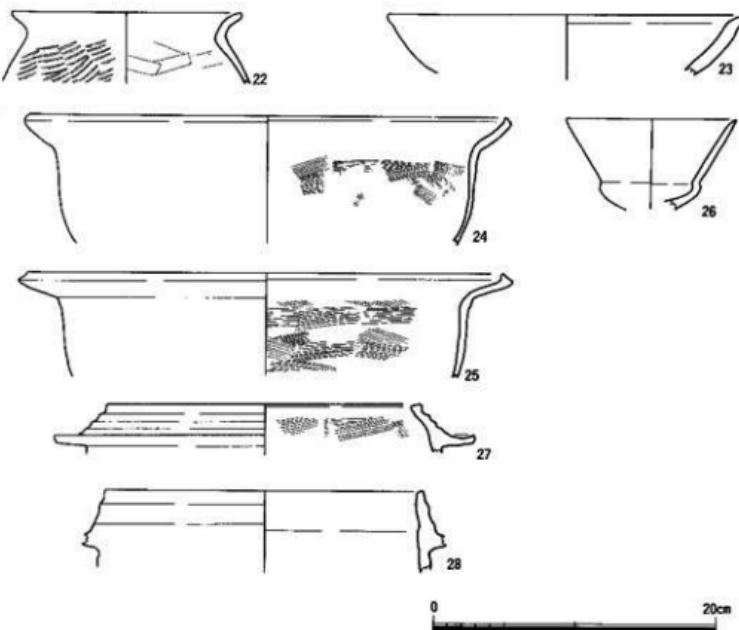
#### 小穴(S P)

##### S P-101～S P-118

調査区(2a・3a区)で18個を検出した(第2表)。すべて調査区の南部からである。平面の形状は、円形のものと椭円形のものがある。規模は検出部で、小さいものが径20～42cm、大きいものが径48～84cmに分けられる。深さは6～32cmを測る。小さい方の小穴には柱痕がみられることから、建物に関連する柱穴であろうと考えられる。小穴の時期については出土遺物及び埋土からみて、小さい方の小穴(S P-101～S P-113)が平安時代末、大きい方の小穴(S P-114～S P-118)は室町時代に比定されたもので、概ね2時期に分ける。

第2表 小穴(S P)法量一覧表

遺構番号	形 状		法 量(cm)			堆 積 上	備 考
	平 面 形	断 面 形	長 軸	短 軸	深 さ		
SP-101	円 形	半円形	48	33	17	暗褐色灰色砂質混じりシルト・黄褐色粘質シルト	上器片を少量含む
SP-102	円 形	逆台形	48	48	10	暗褐色灰色砂質混シルト・灰黄色粘質シルト	上器片を少量含む
SP-103	円 形	逆三角形	48	48	26	暗褐色灰色砂質混シルト・灰黄色粘質シルト	上器片を少量含む
SP-104	—	半円形	25	—	20	黄灰色粘質シルト	
SP-105	円 形	半円形	20	20	6	黄灰色粘質シルト	
SP-106	椭円形	半円形	40	32	6	灰褐色細膠泥シルト	
SP-107	円 形	半円形	52	52	19	暗褐色灰色砂質混シルト・灰黄色粘質シルト	土器片を少量含む
SP-108	円 形	半円形	42	42	7	黄灰色粘質シルト	
SP-109	円 形	半円形	40	40	12	黄灰色粘質シルト	上器片を少量含む
SP-110	円 形	半円形	26	26	6	暗褐色シルト・黄灰色粘質シルト	土器片を少量含む
SP-111	—	半円形	25	—	14	灰褐色シルト	
SP-112	椭円形	半円形	50	39	12	暗褐色黄色粘質シルト(灰含む)・黄褐色シルト	土器片を少量含む
SP-113	円 形	半円形	24	24	8	暗褐色粘質シルト	土器片を少量含む
SP-114	—	半円形	95	80	16	暗褐色灰色砂質混シルト	
SP-115	—	半円形	60	58	20	暗褐色灰色砂質混シルト・灰黄色粘質シルト(緑を少含む)	土器片を少量含む
SP-116	椭円形	半円形	84	72	18	暗褐色灰色砂質混シルト	土器片を少量含む
SP-117	円 形	半円形	88	88	16	灰褐色砂質混シルト	土器片を少量含む
SP-118	—	半円形	82	—	52	暗褐色灰色砂質混シルト・灰褐色粘質シルト(灰・植物遺体を少量含む)	



第12図 SD-103出土遺物実測図

## &lt;東調査区&gt;

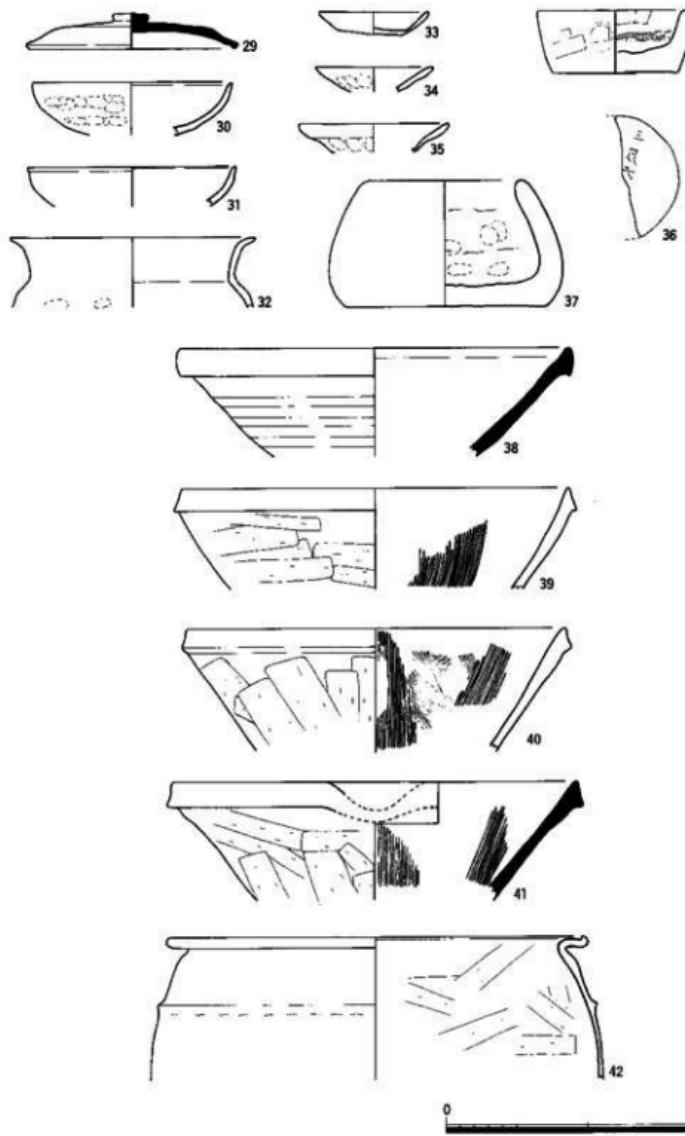
溝 (SD)

SD-102

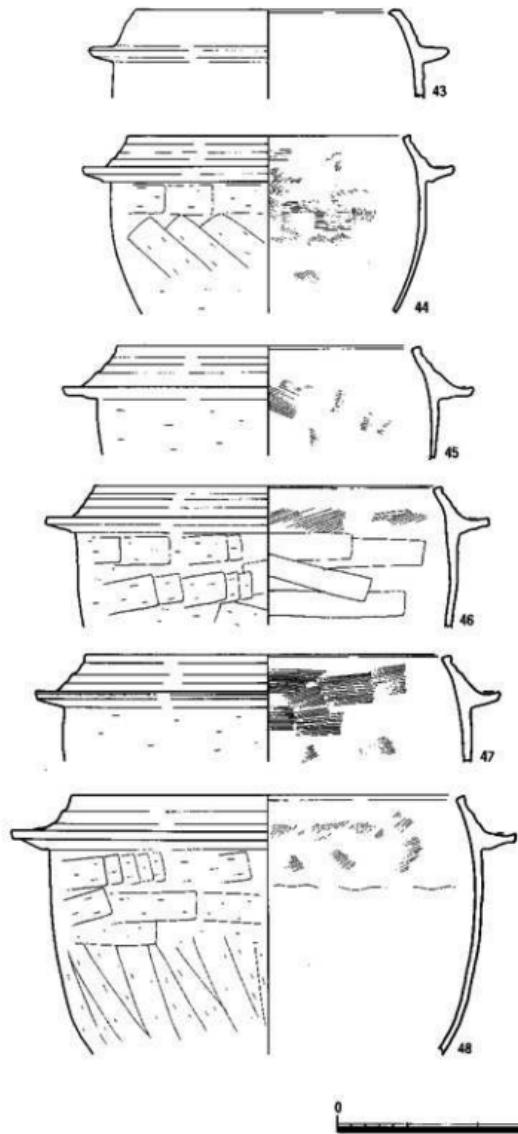
調査区の中央付近（2 b区）で検出した。方向は東西方向でSD-104を切っている。西側は西調査区で検出したSD-102に続くものと考えられる。東調査区での規模は幅2.7m、深さ80cmを測る。断面形は半円形を呈する。堆積土は暗灰褐色砂礫混シルト・灰色シルト混粘質土・茶褐色と灰色粘質上のブロック土・暗灰色粘質土・暗灰青色粘質土・茶灰色砂礫混粗砂である。遺物は室町時代の土器の小片がごく少量出土している。

SD-104

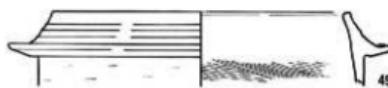
調査区の東側（1 b・2 b区）で検出した。方向は南北方向に伸びる。中央付近ではSK-102に切られている。規模は検出部で幅2.2m以上、深さ4.4cm以上を測り、東肩は調査区外に至る。堆積土は褐灰色細砂・暗灰色粘質土・淡灰褐色細砂・灰褐色砂礫混シルトである。遺物は溝底付近の土層内から室町時代の土器・須恵器・陶器・瓦器質土器・瓦・木製品などが出土している。



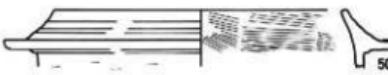
第13圖 SD-104出土遺物實測圖1



第14図 SD-104出土遺物実測図2



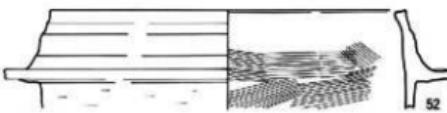
49



50



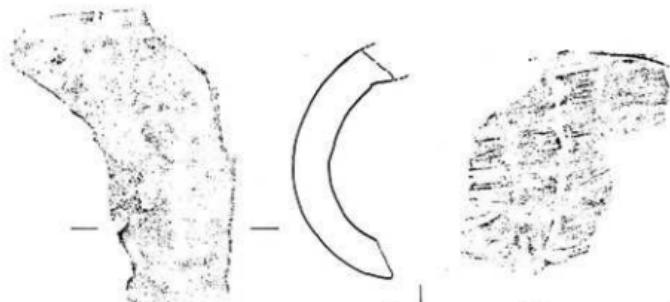
51



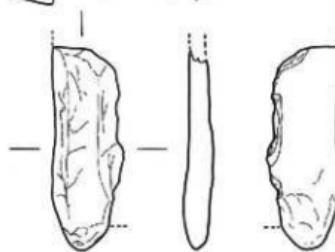
52



53



54



55

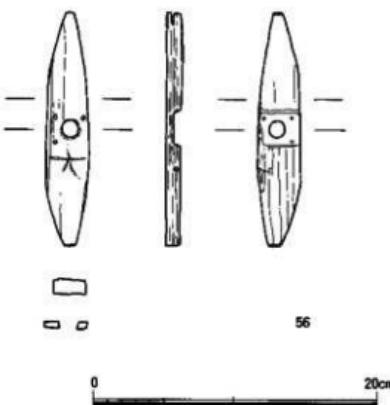


第15圖 SD-104出土遺物實測圖3

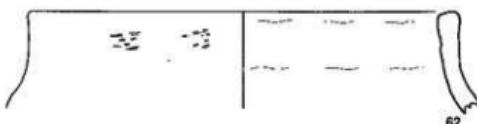
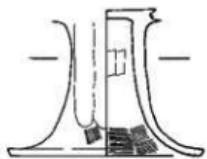
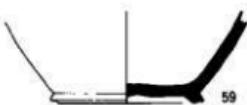
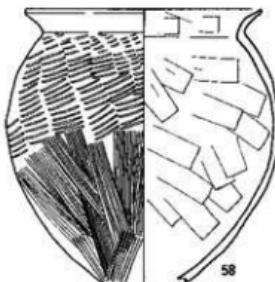
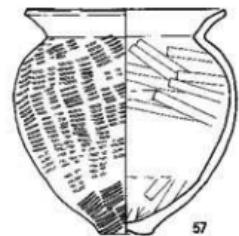
上した。図示できたものは27点で、土器では須恵器の杯蓋（29）、土師器の杯（30・31）・甕（32）・小皿（33～35）・鉢（36）、瓦質の鉢（37）、すり鉢（38～53）・丸瓦（54）・かまど（55）である。木製品では機織の糸巻機の部品の一部と思われるもの（56）で、偏平な菱形で長さ16.8cm、幅3.0cm、厚み1.1cmを測る。中央部の片面を幅2.5cm、深さ0.5cmにカットし、中央に円形の穿孔あけ、その周囲には径2mmの孔が三ヶ所に穿かれている。反対側の面にはノミのようなもので「人」という字が彫られており、使用していた人の刻印であろう（第13図～第15図）。

#### 遺構に伴わない出土遺物

第5・6層内で古墳時代から室町時代に比定される遺物が少量出土した。図示できたものは7点である。古墳時代前期に比定されるV様式系甕（57）・庄内式甕（58）、奈良時代に比定される須恵器の甕（59）・土師器の高杯（60）・盤（61）・かまど（62）、鎌倉時代に比定される須恵器のすり鉢（63）である（第17図）。



第16図 SD-104出土遺物実測図4



0 20cm

第17回 出土物実測図

## 5) 出土遺物観察表

遺物番号 回数番号	基 種 遺物番号	法量 (m)	口径 器高	高 筒・枝 法 等 の 特 徴	色 質	胎 土	焼 成	遺存状況	備 考
1	実 (微土土器) SD-101	口徑	14.0	内外面ヨコナデ。	灰褐色~灰色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・漂白化粧)を多量に含む	良	1/2	
2	例上 第5層	口徑	13.6	口縁部外層ヨコナデ、内面ハケナデ、体部外層タクキ(4本/cm)、内面ハラケズリ。	淡茶褐色	1mm以下の砂粒(長石・角閃石・漂白)を少量含む	良好	口縁1/2	
3	実 (土器) 第5層	口徑	20.0	口縁部外層ヨコナデ、体部外層ハカナデ、内面ハラケズリ。	外 淡灰茶色 内 淡灰色	2mm以下の砂粒(長石・漂白・赤褐色・漂白化粧)を多量に含む	良好	口縁1/4	
4	小皿 (土器) SK-101	LIPH 器高	8.8 1.4	内外面ヨコナデ、体部ナデ。	乳灰褐色	1mm以下の砂粒(赤褐色・漂白化粧)を含む	良	完形	
5	丼上 SE-101	口徑 器高	9.0 1.2	内外面ヨコナデ、体部ナデ。	乳灰茶色	1mm以下の砂粒(長石)を含む	良好	1/2	
6	碗 (瓦器) SE-101	口徑 器高 底径	15.1 6.1 7.6	内外面ハラミガキ、高台外層ヨコナデ、底部外層不定方向ナデ。	黒灰色	精良	良好	1/4	
7	椀 (白釉) SE-101	底径	6.9	圓軸ナデ。	白灰褐色	青	良好	底部1/4	
10	碗 (伊万里器) SK-103	底径	4.3	内外面ヨコナデ。	外 国産色 内 灰褐色~微灰褐色	2.5mm以下の砂粒(長石)を多量に含む	良好	底部のみ	
11	碗 (石製品) SK-103	横 底径	7.1 3.0		灰褐色	青	—	1/5	
12	瓦化合 (瓦製品) SK-103	一端 高さ	26.2 6.2	蓮の花びらを型どっている。	乳白色			1/2	
13	小皿 (土器) SD-102	口徑 器高	8.2 2.0	外層ヨコナデ・ナデ、内面ヨコナデ、底部ナデ。	灰青色	2mm以下の砂粒(漂白)を含む	良	完形	
14	丼上 SD-102	口徑 器高	9.6 2.1	外層ヨコナデ・ナデ、指頭圧痕、内面ヨコナデ。	淡灰茶色	2.5mm以下の砂粒(長石・赤褐色・漂白化粧)を含む	良	完形	
15	一足台付 (土器) SD-102	底径	16.4	外由ハラナデ・カキリ、内面脂ナデ。	外 淡灰茶色 内 陶泥色	8mmの窓1箇、4mm以下の砂粒(長石・赤褐色・漂白化粧)を多量に含む	良好	底部1/3	
16	すり鉢 (灰陶器) SD-102	口徑 器高 底径	27.8 12.6 8.5	外層ヨコナデ・ナデ後ハラケズリ、都部ハケナデ(4本/cm)、結合痕、内面ヨコナデ後擦状(具によるハケ目)	外 灰色 内 淡灰茶色	3mm以下の砂粒(長石)を含む	良好	1/4	
17	碗 (瓦器) SD-102	口徑	29.0	外面ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	外 淡灰茶色 内 淡灰色	青	良好	口縁1/6	
18	盃 (漆器) SD-102	底径	25.6	LIPH内面四軒ナデ、体部外層タクキ(2本/cm)、内面ハケナデ(2本/cm)。	暗灰茶色	青	良好	底部1/4	
19	羽釜 (土器) SD-102	口徑	28.0	口縁部外層ヨコナデ、内面ハケナデ(8本/cm)、体部外層ナデ、内面ハラナデ。	暗系褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・漂白・赤褐色・漂白化粧)を少量含む	良好	口縁1/5	
20	高台付小皿 (土器) SD-102	口徑 器高 底径	10.4 3.6 3.2	内外面脂ナデ。	外 淡灰茶色 内 淡灰色	精良	良好	1/2	縫隙
21	新平瓦 (瓦器) SD-102			筋書き文	淡灰褐色	4mm以下の砂粒(長石・漂白・石英)を少量含む	良好	1/6	
22	実 (土器) SD-103	口徑	14.0	内外面ヨコナデ。	灰褐色~灰色	4mm以下の砂粒(長石・赤褐色・漂白化粧)を多量に含む	良	1/2	

遺物番号	名 備 遺構番号	法量 (cm)	口徑 基高	調査・技法等の特徴	色 質	胎 上	燒 成	保存状況	備 考
23	錐 (土師器) SD-103	口徑	13.6	口縁部外側ヨコナデ、内面ハケナデ、体部外側タケキ(4本/cm)、内面ヘラケズリ	淡茶灰色	1mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を少量含む	良好	口縫1/2	
24	同上 SD-103	口徑	20.0	口縁部内外側ヨコナデ、体部外側ハケナデ、内面ヘラケズリ	外 淡茶灰色 内 淡灰茶色	7mm以下の砂粒(長石・雲母・赤褐色鐵化物)を多量に含む	良好	口縫1/4	
25	同上 SD-103	口徑	33.4	口縁部外側ヨコナデ、内面ヘラケズリ、体部外側ナデ、内面ハケナデ(8本/cm)。	淡灰茶色~褐色	1mm以下の砂粒(赤褐色鐵化物)を含む	良好	口縫1/4	
26	小切丸底 (土師器) SD-103	口徑	22.0	口縁部内外側ヨコナデ。	淡茶灰色	3mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を少量含む	良好	1/3	
27	羽釜 (瓦質) SD-103	口徑	22.4	口縁部外側ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部外側タケズリ、内面ハケナデ。	白灰色~淡灰 色	3mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を少量含む	良好	口縫1/4	
28	羽釜 (土師器) SD-103	口徑	4.3	内外面ヨコナデ。	外 灰白色 内 灰白色~ 淡灰茶色	1mm以下の砂粒(長石)を含む	良好	口縫1/4	
29	糸垂 (灰陶器) SD-104	口径 基高 つまみ怪 2.5 2.1	14.4	外側薄手ナデ、天井部外側凹凸ハケズリ、つまみナデ、内面凹凸ナデ。	外 灰白色 内 淡灰茶色	1mm以下の砂粒(長石・チャート)を微量含む	良好	1/5	
30	糸垂 (土師器) SD-104	口徑	13.8	口縁部内外側ヨコナデ、体部外側凹凸 压痕、内面ナデ。	外 淡茶灰茶色 内 明茶褐色	1mm以下の砂粒(長石・雲母・赤褐色鐵化物)を少量に含む	良好	口縫1/4	
31	同上 SD-104	口徑	14.4	口縁部内面ヨコナデ、外曲ナデ、体部 内凹曲ナデ。	淡茶灰茶色	1mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を微量含む	良好	口縫1/5	
32	裏 (土師器) SD-104	口徑	17.2	口縁部内外側ヨコナデ、体部外側ナデ ・指痕压痕、内面ナデ。	外 乳灰茶色 内 淡茶灰茶色	2mm以下の砂粒(長石・石英)を少量含む	良好	口縫1/4	
33	小皿 (土師器) SD-104	口徑 基高 1.7	7.6	内外面ナデ。	淡灰茶色	1mm以下の砂粒(長石・雲母・角閃石)を多量に含む	良好	完形	
34	同上 SD-104	口徑	8.2	内外面ナデ。	乳灰茶色	2mm以下の砂粒(長石・石英)を少量含む	良好	1/2	
35	同上 SD-104	口徑	10.4	外曲ヨコナデ・ナデ、内面ヨコナデ。	淡灰茶色	1mm以下の砂粒(長石・赤褐色鐵化物)を微量含む	良好	1/2	
36	錐 (土師器) SD-104	口徑 8.9 4.4	11.0	外側ナデ後ヘラナデ、内面上位ヘラナ デ・ドウヘラミガキ。	淡灰茶色~淡 灰褐色	2mm以下の砂粒(長石)を少量含む	良好	1/2	ヘラ記号
37	錐 (瓦質) SD-104	口徑 基高 14.0	10.4	内外面ナデ、内面一部に指痕压痕・擦 痕。	暗青灰茶色	3mm以下の砂粒(長石・云母・チャート)を微量に含む	良好	2/3	
38	すり鉢 (灰陶器) SD-104	口徑	27.4	内外面四脚ナデ。	淡青灰茶色	3mm以下の砂粒(長石・云母・チャート)を少量に含む	良好	1/5	
39	同上 SD-104	口徑	27.2	口縁部外側ヨコナデ、体部外側ヘラケ ズリ、内面ヨコナデ・ナデ後擦痕工具 によるカキ目。	淡灰茶色~暗 灰褐色	2mm以下の砂粒(長石・云母)を少量含む	良好	1/5	
40	同上 SD-104	口徑	26.6	口縁部外側ヨコナデ、体部外側ヘラケ ズリ、内面ヨコナデ・ナデ後擦痕工具 によるカキ目。	黑灰茶色	5mm以下の砂粒(長石・云母)を多量に含む	良好	1/6	
41	同上 SD-104	口徑	28.4	口縁部外側ヨコナデ、体部外側ヘラケ ズリ、内面ヨコナデ・ナデ後擦痕工具 によるカキ目。	灰白色	2mm以上の砂粒(長石・雲母・チャート)を少量含む	良好	1/5	
42	裏 (土師器) SD-104	口徑	29.0	口縁部内外側ヨコナデ、体部外側ヨ コナデ、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色~灰 茶色	1mm以上の砂粒(長石・石英)を含む	良好	1/2	
43	羽釜 (瓦質) SD-104	口徑	18.8	口縁部内外側ヨコナデ、体部内外側ナ デ。	灰白色	2mm以上の砂粒(長石・角閃石・雲母)を少量含む	良好	口縫1/2	

遺物番号 団体番号	器種 遺構番号	法蓋 (cm)	口径 (cm)	高さ・径法等の特徴	色調	断面	形状	保存状況	備考
44 羽釜 (瓦質) SD-104	口徑	20.0	11	縦部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	外: 暗灰色 内: 暗灰色 底: 淡灰色	3mm以下の砂粒(長石・石英・赤褐色鐵化鉄)を多量に含む	良好	口縫部1/4	
45 同上 SD-104	口徑	11.6	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	外: 暗白色 内: 暗灰色	3mm以下の砂粒(長石・石英・角閃石)を含む	良好	口縫部1/4	
46 同上 SD-104	口徑	22.6	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	外: 暗白色 内: 暗白色	3mm以下の砂粒(長石・石英・角閃石)を少量含む	良好	口縫部1/5	
47 同上 SD-104	口徑	25.8	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	淡系灰褐色	3mm以下の砂粒(長石・石英・角閃石)を多量に含む	良好	口縫部1/4	堆積着
48 同上 SD-104	口徑	27.8	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ナダ。	淡黒褐色	3mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を少量含む	良好	底面破損	
49 同上 (瓦質) SD-104	口徑	21.0	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	黒褐色	1mm以下の砂粒(長石・雲母)を少量含む	良好	口縫部1/5	
50 同上 SD-104	口徑	10.8	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	黒褐色	3mm以下の砂粒(長石・雲母・石英)を少量含む	良好	口縫部1/5	
51 同上 SD-104	口徑	24.0	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	灰白色	3mm以下の砂粒(長石・石英)を微量含む	良好	口縫部1/4	
52 同上 SD-104	口徑	23.2	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ハケナダ。	暗灰褐色	3mm以下の砂粒(長石・石英)を微量含む	良好	口縫部1/5	
53 同上 SD-104	口徑	28.4	10	口縫部内外面ヨコナギ。体部外面ヘラケズリ、内面ナダ。	外: 暗灰色 内: 暗褐色	3mm以下の砂粒(長石・石英)を微量含む	良好	口縫部1/5	
54 丸瓦 (瓦質) SD-104				内外面ナダ。	乳灰褐色	2mm以下の砂粒(長石・雲母)を少量含む	良好	1/6	
55 かまと (十輪器) SD-104				内外面ナダ。	明系褐色	5mm以下の砂粒(長石・石英・角閃石)を多量に含む	良好	小片	
57 壺 (瓶生土器) 瓦合層	口徑	14.0 器高 16.0 底径 3.6	10	体部外面タキヨ(3本/cm)・内面ヘラナギ、口縫部ヨコナギ。	外: 乳灰褐色 内: 乳灰褐色	2mm以下の砂粒(長石・山緑色鐵化鉄)を少量含む	良好	1/2	寸半程度
58 壺 (上部器) 瓦合層	口徑	16.5	10	体部外面上位タキヨ(3本/cm)・下位ハケナダ(10本/cm)・内面ヘラナギ、口縫部ヨコナギ。	外: 暗灰褐色 内: 暗褐色	6mm以下の砂粒(長石・赤褐色鐵化鉄)を少量含む	良好	1/2	黒泥あり
59 壺 (瓶生土器) 瓦合層	底径	9.2	10	内外面凹凸ナダ。	褐色	2mm以下の砂粒(長石)を少量含む	良好	口縫部1/4	ヘラ記号 自然端
60 高杯 (土師器) 瓦合層	底面径	13.4	10	脚部外面ヘラコによるナダ。内面ヘラナギ・ハケナダ。	褐灰色	4.5mm以下の砂粒(長石・赤褐色鐵化鉄・チート子)を含む	良好	脚部のみ	
61 盤 (土師器) 瓦合層	口徑	27.6	10	外側ナダ、内面ヘラナギ。	暗灰褐色	3mm以下の砂粒(長石・石英・雲母・赤褐色鐵化鉄)を含む	良好	1/3	
62 すり钵 (土師器) 瓦合層	口徑	31.8	10	外側ヘラケズリ、内面ナダ。	外: 淡灰褐色 内: 暗灰褐色	3mm以下の砂粒(長石・石英)を多量に含む	良好	口縫部1/5	
63 かまと (土師器) 瓦合層	口徑	30.0	10	内外面タキヨ後ナダ。	外: 淡灰茶褐色 内: 褐灰茶褐色	6mm以下の砂粒(長石・雲母・角閃石)を多量に含む	良好	小片	

### 3.まとめ

今回の発掘調査は第21次調査地に隣接することから、それに関連する遺構が予想された。市教育委員会の試掘調査の結果でも確認されていた。調査の結果、弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構面と平安時代末～室町時代の遺構面が検出された。以下、検出した各時代について記す。

#### 弥生時代後期末～古墳時代前期

近接の調査では南側の当調査研究会が実施した第21次調査（KS91-21）で布留式期の土器が出上している。また大阪府教育委員会が府道拡張工事に伴う発掘調査で遺構が確認されている。溝を検出したのみであるが、出土遺物には完形に近い状態で弥生時代後期末に比定されるV様式壺1点が出土しており、近接にはこの時期の居住域が存在することが想定される。

#### 平安時代末

この時期の遺構は第21次調査では確認されていないが、南側約200mのところで実施した区画整理事業に伴う小阪合遺跡第8次調査（KS86-8）で集落遺構が確認されており、楠根川の左岸沿いに集落が北部へ続いているものと考えられる。

#### 室町時代

この時期の遺構は南側の第21次調査（KS91-21）で瓦集積や五輪塔などが検出されている。今回の調査においても水路と思われる溝内から瓦質羽釜・陶磁器・基礎石・瓦などが出上している。特に基礎石には蓮花をかたどっており、灯籠・五輪塔・仏像などの台座が考えられる。よって、これが使われていたと思われるところは寺院ないしは有力士家の屋敷が想定できる。

#### 参考文献

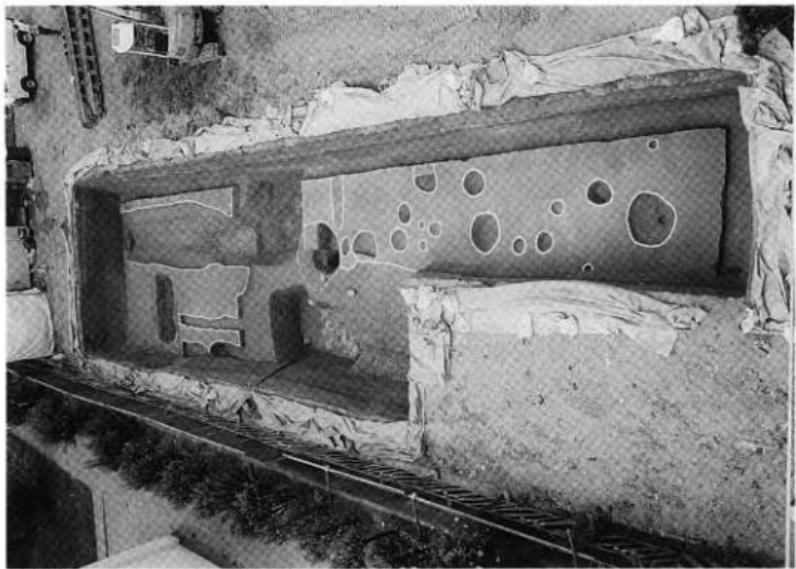
- （財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」一区画整理事業に伴う発掘調査－（財）八尾市文化財調査研究会報告10 1984
- （財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」一区画整理事業に伴う発掘調査－（財）八尾市文化財調査研究会報告11 1984
- （財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡発掘調査」一流域下水道等整備に伴う発掘調査－（財）八尾市文化財調査研究会報告8 1985
- （財）八尾市文化財調査研究会「昭和61年度事業概要」（財）八尾市文化財調査研究会報告14 1986
- （財）八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」（財）八尾市文化財調査研究会報告16 1987
- （財）八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度」（財）八尾市文化財調査研究会報告25 1988
- （財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」一区画整理事業に伴う発掘調査－（財）八尾市文化財調査研究会報告12 1988
- （財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」一区画整理事業に伴う発掘調査－（財）八尾市文化財調査研究会報告18 1990
- 大阪府教育委員会「小阪合遺跡発掘調査概要Ⅱ」大阪府教育委員会 1989
- （財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」第8・13・16次調査発掘調査報告－（財）八尾市文化財調査研究会報告26 1990
- （財）八尾市文化財調査研究会「平成2年度 （財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会 1990
- （財）八尾市文化財調査研究会「平成3年度 （財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会 1991



西調査区 第2調査面全景（南から）



東調査区下層確認（北から）



西調査区 第1調査面（南から）



西調査区 S E - 101（南から）

図版三

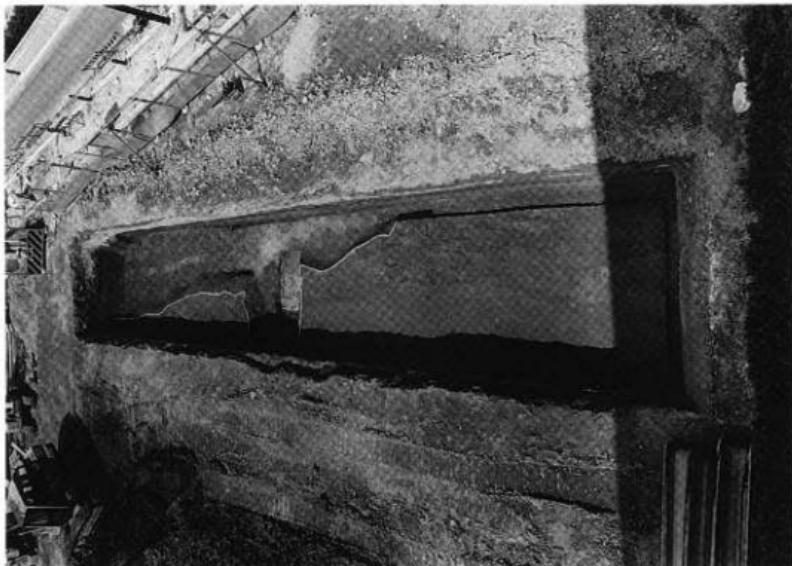


西調査区 S E-101 (南から)



西調査区 S K-103 (東から)

図版四



東調査区 第1調査面（南から）



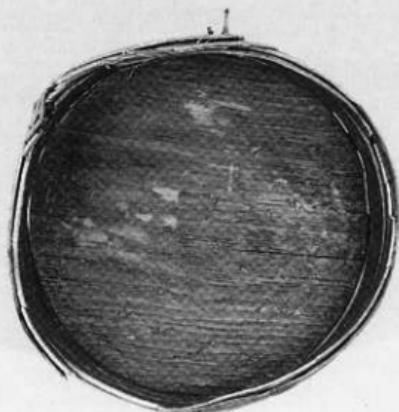
東調査区 SD-104（西から）



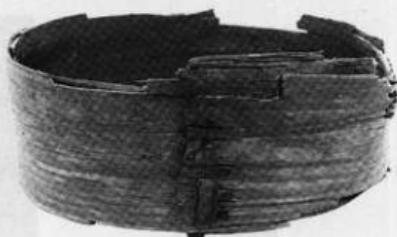
2



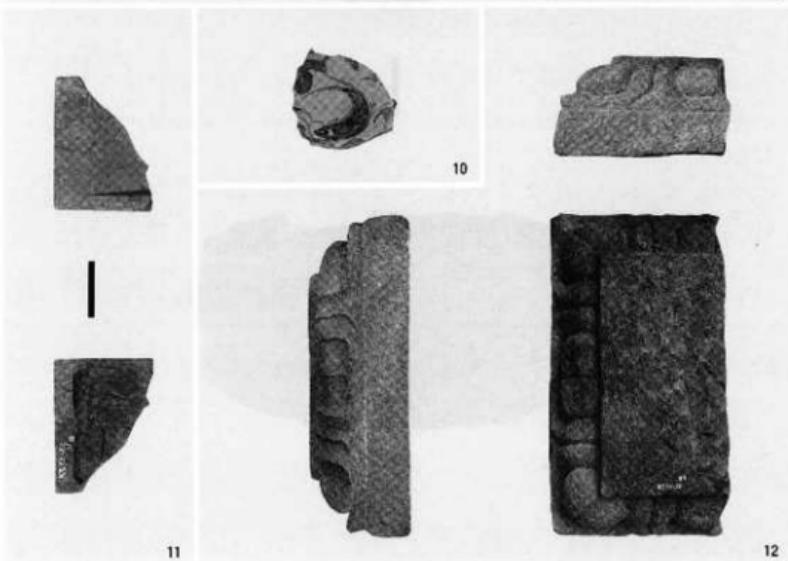
6



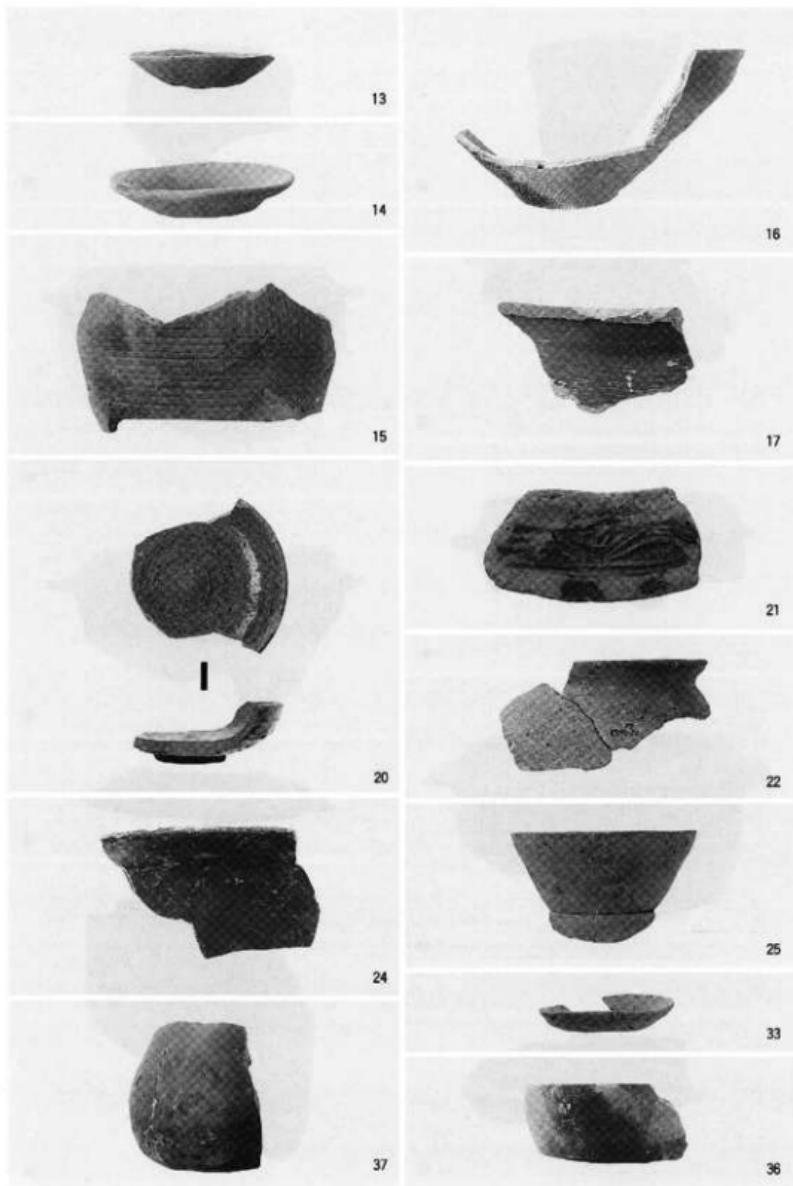
|



8



## 図版七 出土遺物



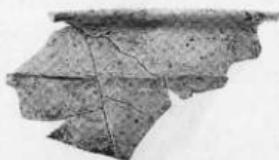
圖版八  
出土遺物



38



39



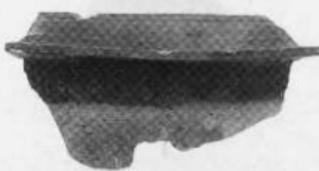
42



44



45



46



48



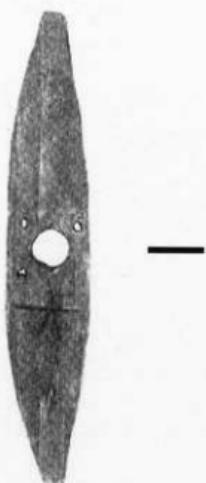
49



52



54



55



56



57



58



59



60



61



## V 小阪合遺跡第23次調査 (K S 92-23)

## 例 言

1. 本書は、八尾市青山町2・3丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する小阪合遺跡第23次調査（KS92-23）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第73号 平成4年7月27日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託をうけて実施したものである。
1. 現地調査は、平成4年9月14日から11月26日にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は106.56m<sup>2</sup>を測る。なお調査においては坂下 学・濱田千年が参加した。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子・山内千恵子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	63
2.調査概要.....	64
1) 調査方法と経過.....	64
2) 検出遺構と出土遺物.....	64
3) 出土遺物観察表.....	69
3.まとめ.....	70

## V 小阪合遺跡第23次調査 (K S 92-23)

### 1. はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1~5丁目、若草町、山本町南7~8丁目がその範囲にある。

地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。

当遺跡内では昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地の1区~2区間の道路部分は、当調査研究会が土地区画整理事業に伴い昭和61年に実施した第8次調査の第5調査区であり、この調査では弥生時代後期から近世の遺構・遺物が検出されている。



第1図 調査地位位置図 ( $S = 1/5000$ )

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事に伴う調査で、立坑部分を対象としている。調査区は5か所に分かれており、東から1区～5区として1区から調査を進めた。

調査は地表下0.7m～1.9mまでを機械掘削し、以下を人力掘削により実施した。また調査終了後機械掘削による下層確認調査を実施した。

### 2) 検出遺構と出土遺物

#### 〈1区〉

##### ・基本層序

第3・4層上面が遺構面である。第3層以下は河川堆積と考えられ、粘土層や砂層が複雑に切り合った状況である。第3層は近世頃の楠根川の堆積土の可能性がある。

##### ・検出遺構と出土遺物

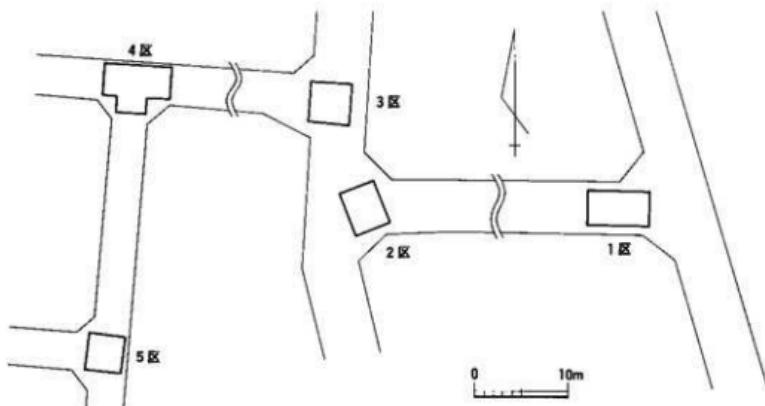
調査区の南部中央で南北方向の水田畦畔1条（畦畔1101）を検出した。

畦畔1101の方位は北から西に約8度振っている。断面台形を呈し、上幅20～30cm・下幅50～80cmを測る。水田埋土の第2層からは軒丸瓦の瓦当部の破片が1点出土しており、時期は中世～近世頃と考えられる。

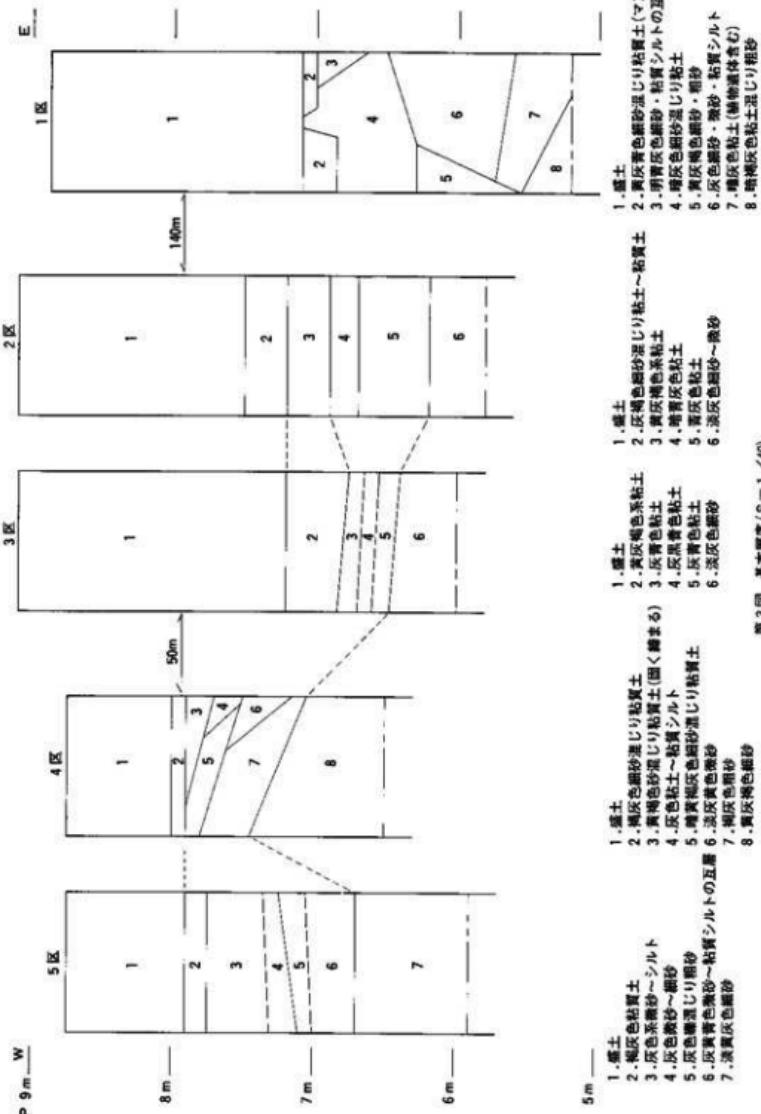
#### 〈2区〉

##### ・基本層序

第3層上面が遺構面である。第4層以下は河川堆積と考えられるが、1区とは異なりほぼ水平な堆積状況を呈している。



第2図 調査区位置図(S=1/600)



第3回 基本断面(S=1/40)

・検出遺構と出土遺物

土坑4基（SK2101～2104）・溝1条（SD2101）を検出した。

土坑はいずれも平面不定形なもので、法量（長辺×短辺×深さ）・埋土は、SK2101—54cm×30cm×約7cm・灰褐色細砂混じり粘土（炭を多量に含む）、SK2102—80cm以上×65cm以上×約5cm・にぶい灰褐色細砂混じり粘土、SK2103—90cm以上×35cm×約5cm・にぶい灰褐色細砂混じり粘土、SK2104—130cm以上×74cm以上×約8cm・にぶい灰褐色細砂混じり粘土である。

SD2101は北西—南東方向に直線的に伸びる溝で、法量は幅約45cm・深さ約7cmを測る。埋土は黄灰褐色粘土混じり微砂で、流水していたと考えられる状況である。

これらの遺構からは遺物は出土していないが、遺構面を覆う包含層（第2層）からは弥生時代後期末に比定される土器（1～3）が出土している。

〈3区〉

・基本層序

3区は2区の北西約10mに位置しており、ほぼ同様の層序を呈しているが、第3層以下の河川堆積の各層は西部がやや高くなっている。第2層上面が遺構面である。

・検出遺構と出土遺物

土坑1基（SK3101）・溝1条（SD3101）を検出した。

SK3101は検出部の平面形は長方形を呈し、法量は95cm以上×62cm・深さ約30cmを測る。埋土は青灰色細砂混じり粘土で、近世陶磁器を含んでいる。

SD3101は幅80cm以上・深さ約12cmを測り、埋土は2区のSD2101と同様の黄灰色粘土混じり微砂で、連続する溝である可能性がある。

〈4区〉

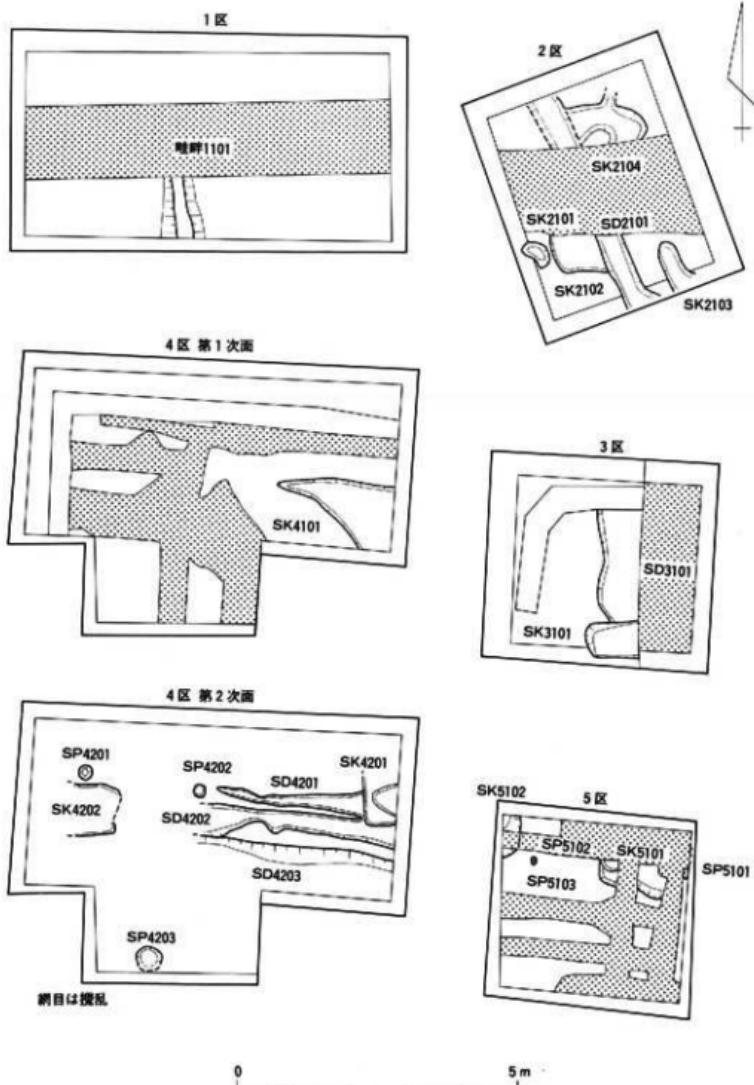
・基本層序

第2層上面が第1次面、第3層上面が第2次面である。第3層は上面が固く締まっており、整地層の可能性がある。第4層以下は河川堆積と考えられ、各層は北西部が高い傾斜堆積を呈している。

・検出遺構と出土遺物

第1次面で土坑1基（SK4101）、第2次面で土坑2基（SK4201・4202）・溝3条（SD4201～4203）・ピット3個（SP4201～4203）を検出した。

SK4101は平面不定形で、法量は2.1m以上×1.2m以上・深さ約6cmを測り、埋土は褐灰色細砂混じり粘質土である。瓦器挽（4・5）の他土師質土器・須恵器・縁軸陶器片が出土している。



第4図 透構平面図(S=1/100)

S K 4201・S K 4202は、検出部の平面形は方形を呈し、法量（長辺×短辺×深さ）・埋土はS K 4201-90cm以上×65cm以上×約20cm・暗褐色細砂混じり粘土、S K 4202-90cm×85cm×約6cm・暗褐色細砂混じり粘質土である。S K 4201から土師質上器・須恵器片が出土している。

溝は東西方向に平行して伸びるもので、法量（幅×深さ）・埋土はS D 4201-約20cm×約4cm・淡灰褐色細砂混じり粘質土、S D 4202-約35cm×約5cm・淡灰褐色細砂混じり粘質土、S D 4203-82cm以上×約7cm・にぶい灰黄色細砂混じり粘質土である。S D 4201・4202からは中世頃、S D 4203からは古墳時代前期から奈良時代の土器片が出土している。

ピットはいずれも平面円形を呈し、法量（径×深さ）・埋土はS P 4201-25cm×26cm×15cm・褐灰色細砂混じり粘土、S P 4202-20cm×22cm×20cm・褐灰色細砂混じり粘土、S P 4203-46cm×34cm×14cm・暗褐色細砂混じり粘土である。平安時代頃の土器が出土している。

これらの遺構の時期は、出土遺物から平安時代後期頃に比定される。また河川埋土の上層にあたる第5層から古墳時代前期～後期の土器（7～10）、第7層から弥生時代後期末の土器が出土している。

#### 〈5区〉

##### ・基本層序

第2層上面が遺構面である。第3層以下は砂層を基調とする河川堆積と考えられる。第4・5層の砂層の上面は南東から北西に向かって低くなっている。

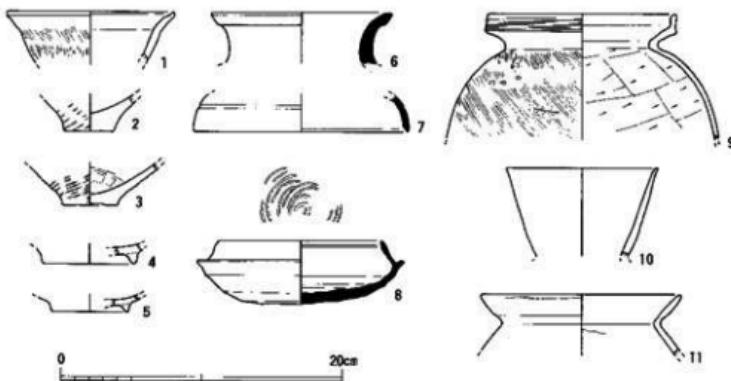
##### ・検出遺構と出土遺物

土坑2基（S K 5101・5102）・ピット3個（S P 5101～5103）を検出した。

土坑は平面不定形で、法量（長辺×短辺×深さ）・埋土はS K 5101-60cm以上×55cm以上×約9cm・上から淡灰褐色細砂混じり粘土・淡灰黄色微砂混じり粘質シルト・灰黄褐色粘土、S K 5102-75cm以上×34cm以上×約26cm・淡灰黄色細砂混じり粘質土である。瓦器・土師質上器・須恵器・陶器片が出土している。

ピットは東西方向に一列に並び、間隔は約1.4mを測る。S P 5101には杭の先端部らしい木片が遺存していた。法量（径×深さ）・埋土はS P 5101-20cm以上×17cm以上×21cm・暗灰色細砂混じり粘質土、S P 5102-48cm以上×35cm以上×32cm・上から暗灰色細砂混じり粘質土（炭を含む）・暗灰黄色細砂混じり粘質土・黄灰色微砂混じり粘土、S P 5103-13cm×10cm×3cm・褐灰色細砂混じり粘土である。S P 5102から黒色土器・土師質土器片が出土している。

これらの遺構の時期は、出土遺物から平安時代後期頃に比定される。また河川埋土の上層にあたる第4・5層からは弥生時代後期末～古墳時代前期の土器（11）が出土している。



第5図 出土遺物(S=1/4)

## 3) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調	胎 土	焼成	技法・形態等の特徴	我有 参考
1 1	弥生 体	2区 第2層		(12.0)	淡乳茶色 内・明茶 色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ハケ、内面 ナデ。	L/T 反転
2 2	弥生 壺	2区 第2層		底径 3.65	暗茶色 内・暗乳 茶色	やや粗	良好	底部外側タキ、内面ナデ。	底部完存 一部反転
3 3	弥生 壺	2区 第2層		底径 4.1	暗茶色	やや粗	良好	底部外側タキ、内面板ナデ。煤付羣。	底部完存 一部反転
4 4	瓦器 桶	4区 SK4101 森古径 森古高		(6.9) 0.8	黒灰色	密	良好	高台ヨコナデ。底部外側ナデ。底部内 面ハラミガキ。	高台1/3 反転
5 5	瓦器 桶	4区 SK4101 高台径 高台高		(5.6) 0.7	黒灰色	密	良好	高台ヨコナデ。底部外側ナデ。底部内 面ハラミガキ。	高台1/2 反転
6 6	瓦器 壺	4区 第2層		(13.0)	解灰茶色	密	良好	回転ナデ。	1/4 反転
7 7	瓦器 杯	4区 第5層		(15.6)	暗灰茶色	やや粗	良好	回転ナデ。	極小 反転
8 8	瓦器 杯身	4区 第5層	(11.6) 4.5	灰茶色	密	良好	底体部外側灰自然釉。底部内面2回の 同心円タキ。	口縁1/5欠 損 一部反転	
9 9	土師器	4区 第5層		13.6	淡乳茶色	やや粗(1mm 以下の砂粒を 多量に含む)	良好	口縁部ヨコナデのち口縁部外側面接突。 体部外側ハケ、内面ハラケズリ。肩部 外面剥突。	口縁4/5欠 損 一部反転
10 10	土師器 壺	4区 第5層		(10.8)	淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部外側ハラミガキ、内面ナデ?— 崩滅のため不明。	L/T 1/2 反転
11 11	土師器 壺	5区 第4-5層		(14.4)	淡乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。外側煤付 着。	L/S 反転

### 3. まとめ

今回の調査では弥生時代後期から近世の遺構・遺物を検出した。2・3区では標高7.2m前後で弥生時代後期末の遺構・包含層が検出されたが、既往の調査ではこの集落は東に約50mまで拡がることが確認されている。西部の4・5区周辺では標高7.9m前後に平安時代後期の集落が拡がっていると考えられ、またほぼ同レベルに古墳時代後期以降の集落が存在する可能性もある。東部の1区では標高7.1m前後に中世～近世の生産域が確認されたが、土層の堆積状況からそれ以前は東に位置する楠根川の主流路であったようである。



2区 全景（南から）



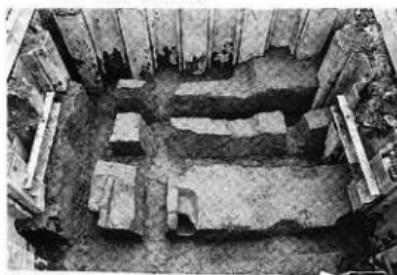
3区 全景（東から）



4区 全景（北から）



4区 遺物出土状況（西から）



5区 全景（北から）



5区 東壁（西から）



8



9



## VI 小阪合遺跡第24次調査 (K S 92-24)

## 例　　言

1. 本書は、八尾市青山町5丁目79-1で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する小阪合遺跡第24次調査（KS92-24）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第95号 平成4年9月1日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が浅田正雄氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年11月16日～12月5日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約230m<sup>2</sup>である。なお、調査においては中谷嘉多・八田雅美・西岡千恵子・西田寿・澤井幹が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	73
2.調査概要.....	75
1) 調査の方法と経過.....	75
2) 基本層序.....	75
3) 検出遺構と出土遺物.....	77
4) 出土遺物観察表.....	81
3.まとめ.....	82

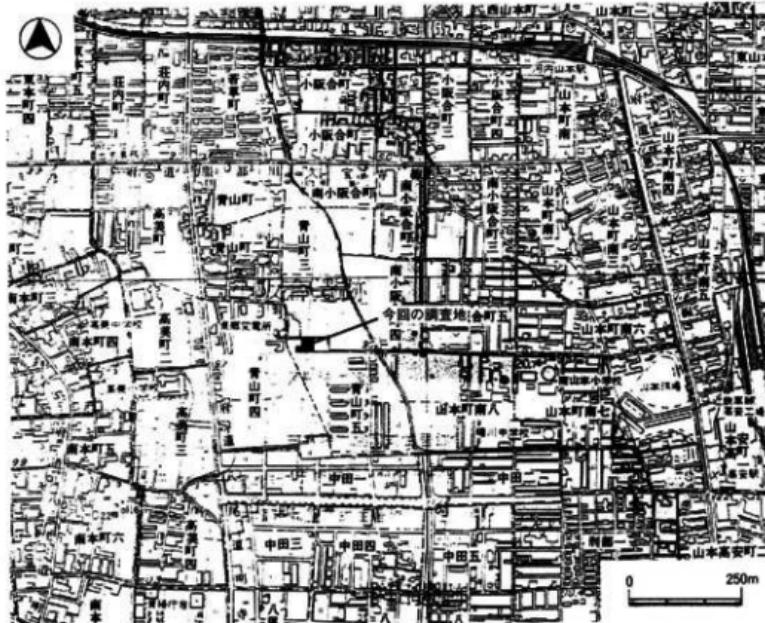
## VI 小阪合遺跡第24次調査 (K S 92-24)

### 1. はじめに

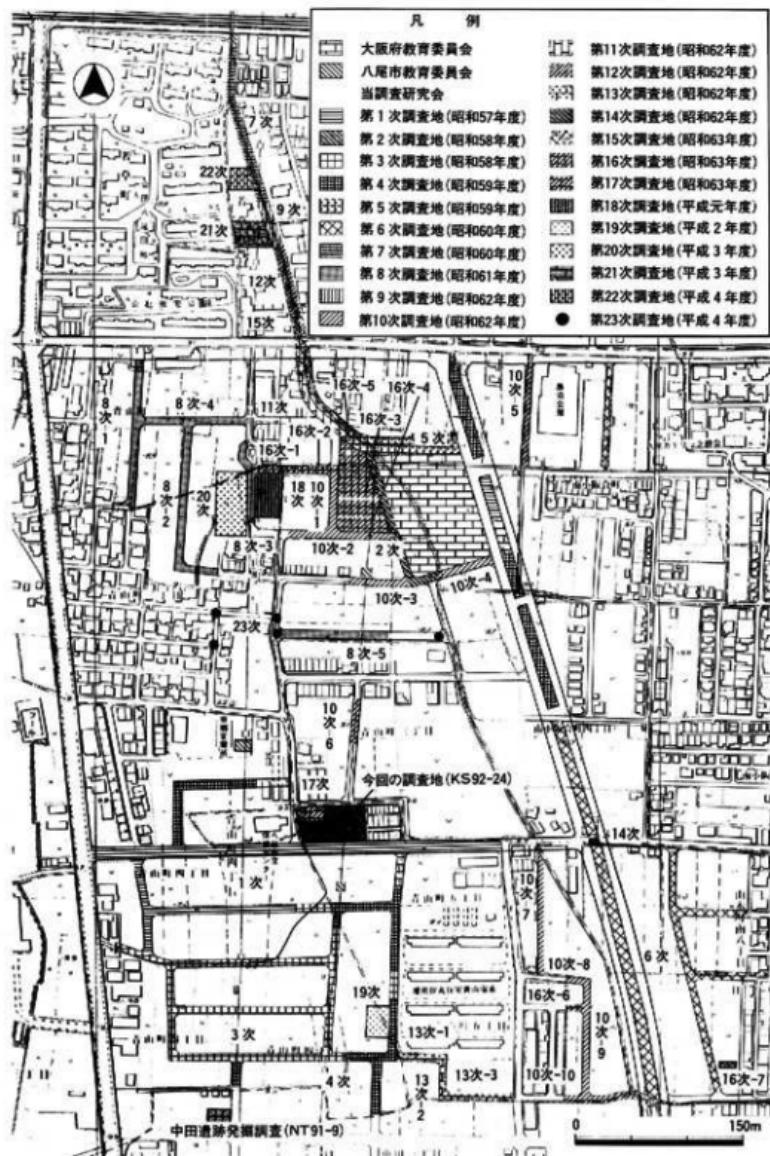
小阪合遺跡は、八尾市の中心部にあたる若草町・小阪合町1・2丁目・南小阪合町2・4丁目・青山町1~5丁目・山本町南7・8丁目の一带に存在する弥生時代~近世に至る複合遺跡である。地形的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡中央には小河川である楠根川が蛇行しながら北西流している。標高は現在8~9mを測る(第1図)。

周辺には当遺跡と同様の複合遺跡が密集している。西には成法寺遺跡、南西には矢作遺跡、南には中田遺跡、北には萱振遺跡、北西には東郷遺跡などが接している。

近接の調査では当調査研究会が第1次調査(K S 82-1)・第17次調査(K S 88-17)、八尾市教育委員会が昭和60年度に鉄塔建設に伴う調査を行っている(第2図)。なお、それらの既往調査については第1表に掲載した。



第1図 調査地位置図及び周辺図



第2図 調査地及び周辺の既往調査位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、事業者と八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査地は小阪合遺跡の中心部付近にあたり、南部約10mの所では区画整理事業に伴う第1次調査(KS82-1)、北部では共同住宅に伴う第17次調査(KS88-17)が行われている。

調査は建築の基礎工事で破壊される部分に東西方向のトレーニング2箇所を設定し、北部を第1調査区( $3 \times 37.5\text{m}$  [112.5 $\text{m}^2$ ])、南部を第2調査区( $3 \times 39$  [117 $\text{m}^2$ ])とした。調査順位としては第2調査区から実施した。まず、現地表から1.5~1.6mまでの土層を機械で掘削し、それより以下0.4~0.6mの土層について人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。調査期間は平成4年11月16日~12月5日である。調査面積は約230 $\text{m}^2$ を測る。

調査にあたっては、調査地東部の土地境界杭を起点にして北東部の土地境界杭に方向を合わせた南北軸から東へ90度振り、第2調査区の西部20mの地点に任意の点を設けた。それを基点にし、トレーニング全体が把握できる範囲に10m四方角の区画を作成した。なお、調査進行をスムーズに行うため、便宜上トレーニング方向に合わせた。それは起点から基点の東西軸の方向を基点より北へ2度修正して区画した。

地区名については基点より北へ5mの東西線が北から南へ数字の1~2を付称し、南北線が西から東へアルファベットのa~b、交差する北西側を優先して1a~2b区と呼称して調査を進めた(第3図)。

今回の発掘調査は、当調査研究会が当遺跡で実施した第24次調査(KS92-24)にあたる。

### 2) 基本層序

基本層序は第4図に示すように、調査区内で普遍的にみられる16層の土層を抽出して柱状図とした。なお、第10層~第16層は下層調査で確認した上層である。

第1層 盛土(層厚1.0m)。区画整理による盛り土である。

第2層 旧耕土(層厚10~20cm)。近年まで耕作していた土層である。

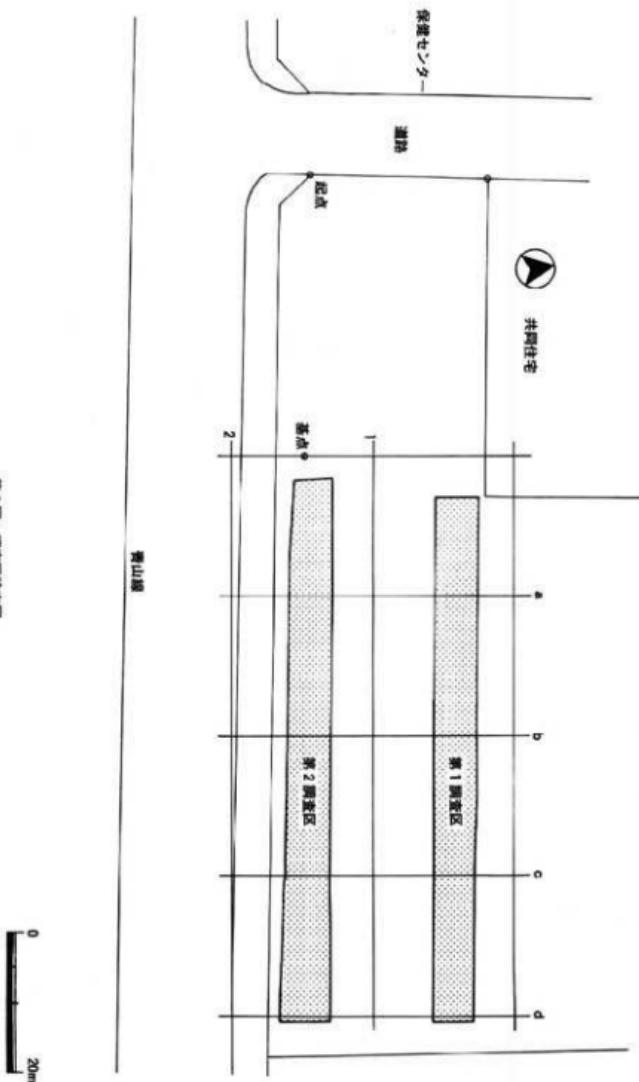
第3層 淡青灰色砂質土(層厚2~10cm)。

第4層 茶灰色粘質土(層厚10~20cm)。床土である。近世の土層である。

第5層 灰茶色粘質土(層厚15~20cm)。

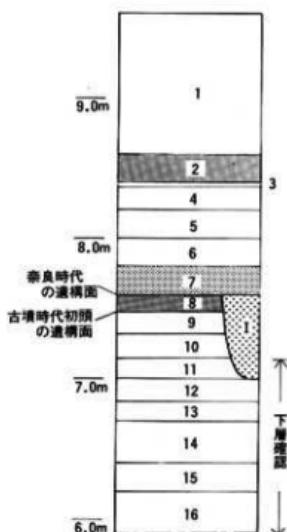
第6層 茶褐色細砂混粘土(層厚20~40cm)。中世の遺物を含む土層である。

第7層 鹿灰色シルト(層厚20cm)。この上面で奈良時代の河川が切り込まれている。標高は7.7m前後を測る。弥生時代後期末~古墳時代初頭の遺物及び炭化物を少量含む。



第3図 調査区地図

- また、褐色の斑点が無数にみられる。
- 第8層 暗灰色粘質シルト（層厚10~15cm）。上面で弥生時代後期末～古墳時代初期のベース面である。標高は7.5m前後を測る。
- 第9層 淡茶灰色粘土（層厚15~20cm）。粘着性の強い粘土である。
- 第10層 淡青灰色粘土（層厚40cm）。
- 第11層 暗青灰色粘土（層厚10cm）。植物遺体をごく少量含む。
- 第12層 青灰色粘土（層厚15~20cm）。
- 第13層 青灰色シルト（層厚15cm）。
- 第14層 青灰色粘土（層厚30cm）。
- 第15層 暗青灰色粘土（層厚20cm）。
- 第16層 灰青色シルト（層厚30cm以上）。
- 以上、調査区で確認した基本層序である。第8層上面から奈良時代に埋没した河川跡が切り込まれている。第1調査区では東部で、第2調査区では4分の3が河川であった。下層調査で検出した第10層～第16層は水平堆積で、遺物を含む層及びベース面となる層は認められなかった。

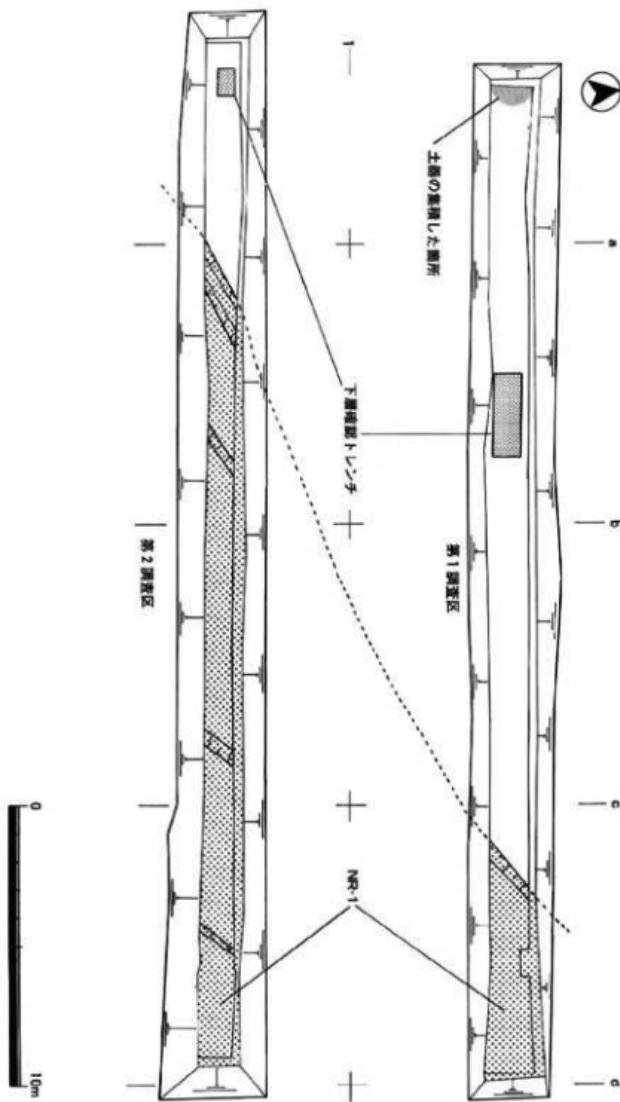


第4図 基本層序柱状図(S=1/40)

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代後期末～中世に至る遺構・遺物を検出した（第5図）。第1調査区では2面の調査を行った。第1調査面は第7層上面から切り込む面で奈良時代の河川1条（N R-1）、第2調査面は第8層上面から切り込む面で弥生時代後期末から古墳時代初期の遺物包含層を検出した。第2調査区では第1調査区の第1調査面で検出した奈良時代の河川1条（N R-1）を検出した。第2調査面では遺物包含層のみの検出で、遺構はなかった。調査区で出土した遺物は弥生時代後期末～中近世に至るもので、総数はコンテナ箱にして約2箱分である。以下、各調査面について記す。

第5図 調査区測量平面図

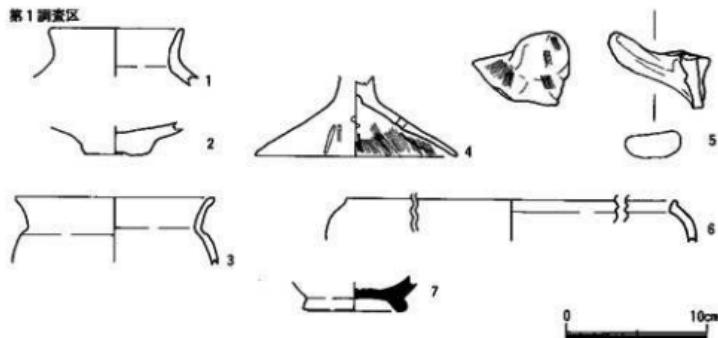


## ① 第1調査面

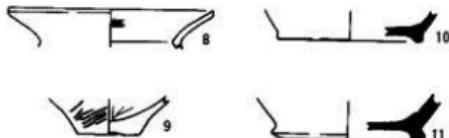
河川 (N R)

N R - 1

第1調査区は東側の1 d区で、第2調査区は2 a～4 d区で検出した。方向は南西～北東方向に伸びる。第2調査区が上流で、第1調査区が下流にある。この南側の下流部分が第1次調査 (KS22-1) のA～IV区で検出した河川跡と考えられる。全体の規模は調査区では確認できなかった。調査区で検出した規模は第1調査区で幅10m、深さ20cm、第2調査区では幅30m、深さ80cmを測る。第2調査区ではこの調査区での規模は2ヶ所に深くなった河筋がある。深い部分では断面半円形で、中洲になっている高い部分はほぼ平坦面である。堆積土は淡灰色シルト混細砂・茶灰色～乳灰色粗砂である。遺物は、内部から古墳時代～奈良時代に比定される土師器・須恵器などの破片が少量出土した。図示できたものは5点で、奈良時代の土師器の杯(1)・須恵器の杯(2・3)・壺(4・5)である(第6図)。



第2調査区

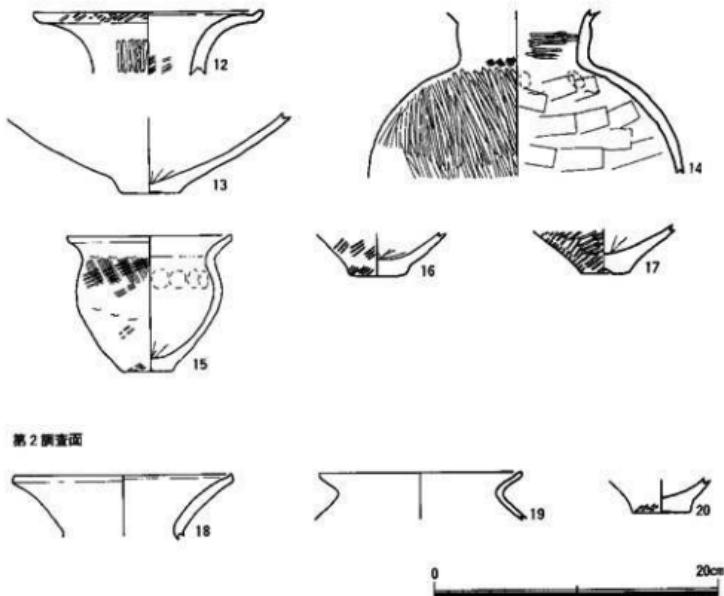


第6図 N R - 1 出土遺物実測図

## ② 第2調査面

調査区の西部で検出した第9層が弥生時代後期末から古墳時代初頭のベース面と考えられた遺構は検出しなかった。第1調査区の西部隅で掘形を有しない土器(V様式)が集積した状

態で検出したのと、第2調査区の西部階の北壁で炭化物を多く含む層がみられた程度であった。第8層から出土した土器は壺・鉢・壺などの破片である。出土量は第1調査区・第2調査区を合わせてコンテナに1箱分程度である。図示できたものは第1調査区の土器集積から完形の小型のV様式壺(6)1点、その他10点は破片で壺(7~10)・壺(11~13)・鉢(14~16)である(第7図)。



第7図 遺物実測図

## 4) 出土遺物観察表

遺物番号 国歴番号	名 称 遺構番号	法量 (m)	口径 直角	調査・柱法等の状態	色 調	断 面	施 工	保存状況	備 考
1 土 (土+土) NR-1	口径	9.2		内外面とも剥離のため調整不明。	灰褐色	断面	良好	U1壁1/3	第1調査区
2 内1 底部径	4.4			内部面と右側壁のため調整不明。	赤褐色	5mm以下の砂粒(長石・チート・雲母)を多量に含む	良好	底部のみ	第1調査区
3 内2 (上部) NR-1	底部径	14.4		外部外周へタミガキ、内部ハラナダ。	灰褐色	4mm以下の砂粒(長石・雲母)を多量に含む	良好	底部のみ	第1調査区
4 取子(土) (上部) NR-1				内外面面ナダ。	褐灰色	1mm以下の砂粒(長石・小褐色酸化鉄)を少量含む	良好	表干部のみ	第1調査区
5 土 (土+土) NR-1	口径	14.0		内面コナダ。内面剥離のため調整不明。	外:赤褐色 内:灰褐色	2mm以下の砂粒(長石・雲母)を含む	良好	U1壁1/2	第1調査区
6 井 (下部) NR-1				外周コナダ。内面剥離のため調整不明。	浅灰茶色	2mm以下の砂粒(長石・雲母)を含む	良好	U1壁1/6	第1調査区
7 土 (底裏) NR-1	底部径	6.4		回転ナダ。	灰色	断面	良好	底部1/2	第1調査区
8 土 (上部) NR-1	口径	14.4		内外面とも剥離のため調整不明。	外:灰褐色 内:灰褐色~ 褐色	2.5mm以下の砂粒(長石)を多量に含む	良好	底部のみ	第2調査区
9 土 (底裏) NR-1	底部径	4.4		外周タキ、内面ハラナダ。	灰褐色	3mm以下の砂粒(長石・雲母)を多量に含む	良好	1/5	第2調査区
10 杯身 (底裏) 包含層	底部径	10.3		内面ナダ。	灰褐色	断面	良好	底部1/4	第2調査区
11 土 (底裏) NR-1	底部径	11.0		内面ナダ。	浅灰褐色	断面	良好	底部1/4	第2調査区
12 同上 (土+土) 包含層	口径	16.0		内外面ハリミガキ、通常に崩れ目。	浅褐色	4mm以下の砂粒(長石・チート・雲母)を含む	良好	U1壁部のみ	第1調査区
13 同上 包含層	底部径	4.0		外周剥離のため調整不明、内面ハラナダ。	外:灰灰茶色 内:灰褐色	3mm以下の砂粒(長石)を多量に含む	良好	底部1/3	第1調査区
14 同上 包含層				U1壁部外周コナダ、底部ハラナダ、内面ハリミガキ、体部外周へタミガキ。	外:黑褐色 内:灰褐色	5mm以下の砂粒(長石・雲母・小褐色酸化鉄)を多量に含む	良好	1/4	第1調査区
15 土 (土+土) 包含層	口径	11.6		U1壁部外周コナダ、底部内面ヘラナダ、底面圧痕、外周タキ後ハラナダ。	褐灰色	4mm以下の砂粒(長石・雲母・角閃石)を多量に含む	良好	ほぼ光沢	第1調査区
16 土 (土+土) 包含層	底部径	4.3		外周タキ、内面ヘラナダ。	外:褐色 内:灰褐色	5mm以上の砂粒(長石・雲母)を多量に含む	良好	底部のみ	第1調査区
17 同上 包含層	底部径	3.2		外周タキ、内面ヘラナダ。	暗茶褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母・小褐色酸化鉄)を少量含む	良好	U1壁1/5	第1調査区
18 土 (土+土) 包含層	口径	10.4		外周剥離のため調整不明、内面ハラナダ。	外:淡褐色 内:灰褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母・小褐色酸化鉄)を少量含む	良好	1/2	第2調査区
19 土 (上部) 包含層	口径	14.4		外周剥離のため調整不明、内面ハラナダ。	灰褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母・小褐色酸化鉄)を少量含む	良好	底部のみ	第2調査区
20 同上 包含層	底部径	4.0		外周タキ、内面剥離のため調整不明。	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母・小褐色酸化鉄)を少量含む	断面	良好	底部のみ	第2調査区

### 3. まとめ

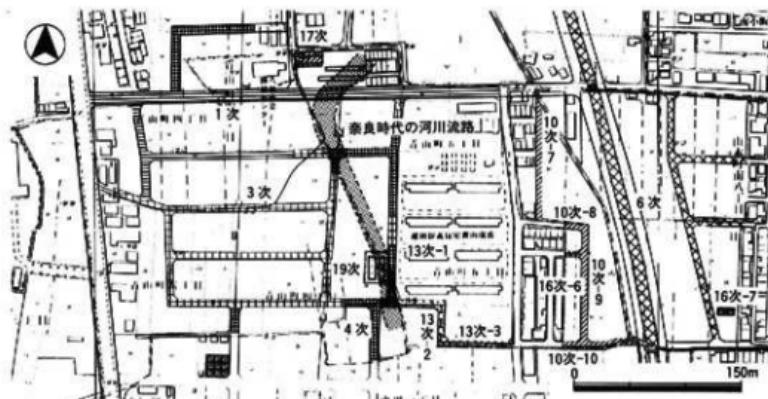
今回の発掘調査は第1次調査地に隣接することから、それに関連する遺構が予想された。市教育委員会の試掘調査の結果でも確認されていた。調査の結果、弥生時代後期末～古墳時代初頭の包含層と奈良時代の河川跡が検出された。以下、各時代について記す。

#### 弥生時代後期末～古墳時代初頭

近接の調査では南側の当調査研究会が実施した第1次調査（KS82-1）で庄内式期の遺構や土器が出土しているが、今回の調査区では遺構は検出しなかった。遺物は弥生時代後期末に比定されるV様式の土器の出土がほとんどであった。また、調査区東部は奈良時代の河川で削平を受けており、詳細なことは不明であるが、東部の包含層に含まれる遺物量をみると東側へ行くに従い遺物量が減少しており、北東部へはあまり広がらないようである。

#### 奈良時代

この時期の遺構は第1次調査では集落遺構が確認されているが、今回は河川跡のみであった。この河川は当調査研究会が実施した第4次調査（KS84-4）の第5調査区・第7調査区と第19次調査（KS90-19）で検出している。上流の第4次調査の第5調査区から下流の当調査区までの流路を線で結んでみると、第4次調査の第5調査区から第19次調査へは北流する。そして第19次調査から第1次調査へ北西方向に流路が変わる。そしてさらに、第1次調査から北東方向へ流路を変え、そのままの方向で当調査区へと続く。確認した流路は緩やかなS字を描くようである。このように同時期の河川の流路が約500mにわたり復元できた。今後、さらに周辺の発掘調査が増加するに従い上下の流路をより長く復元することにより、この時期の様相をより明確にすることできるであろう。



第8図 奈良時代の河川流路復原想定図

## 中世

土層（第6層）は確認されたが、遺構はなかった。南部で実施した第1次調査では東西方向の築溝が検出されており、当調査区へ続くものと考えられる。

## 参考文献

- (財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」－区画整理事業に伴う発掘調査－(財)八尾市文化財調査研究会報告10 1984
- (財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」－区画整理事業に伴う発掘調査－(財)八尾市文化財調査研究会報告11 1984
- (財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡発掘調査概要」－流域下水道等整備に伴う発掘調査－(財)八尾市文化財調査研究会報告8 1985
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告16 1987
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告25 1988
- (財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」－区画整理事業に伴う発掘調査－(財)八尾市文化財調査研究会報告12 1988
- (財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」－区画整理事業に伴う発掘調査－(財)八尾市文化財調査研究会報告18 1988
- 大阪府教育委員会「小阪合遺跡発掘調査概要II」大阪府教育委員会 1989
- (財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」－第8・13・16次調査発掘調査報告－(財)八尾市文化財調査研究会報告26 1990
- (財)八尾市文化財調査研究会「平成2年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会 1990
- (財)八尾市文化財調査研究会「平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会 1991



第1調査区全景（西から）



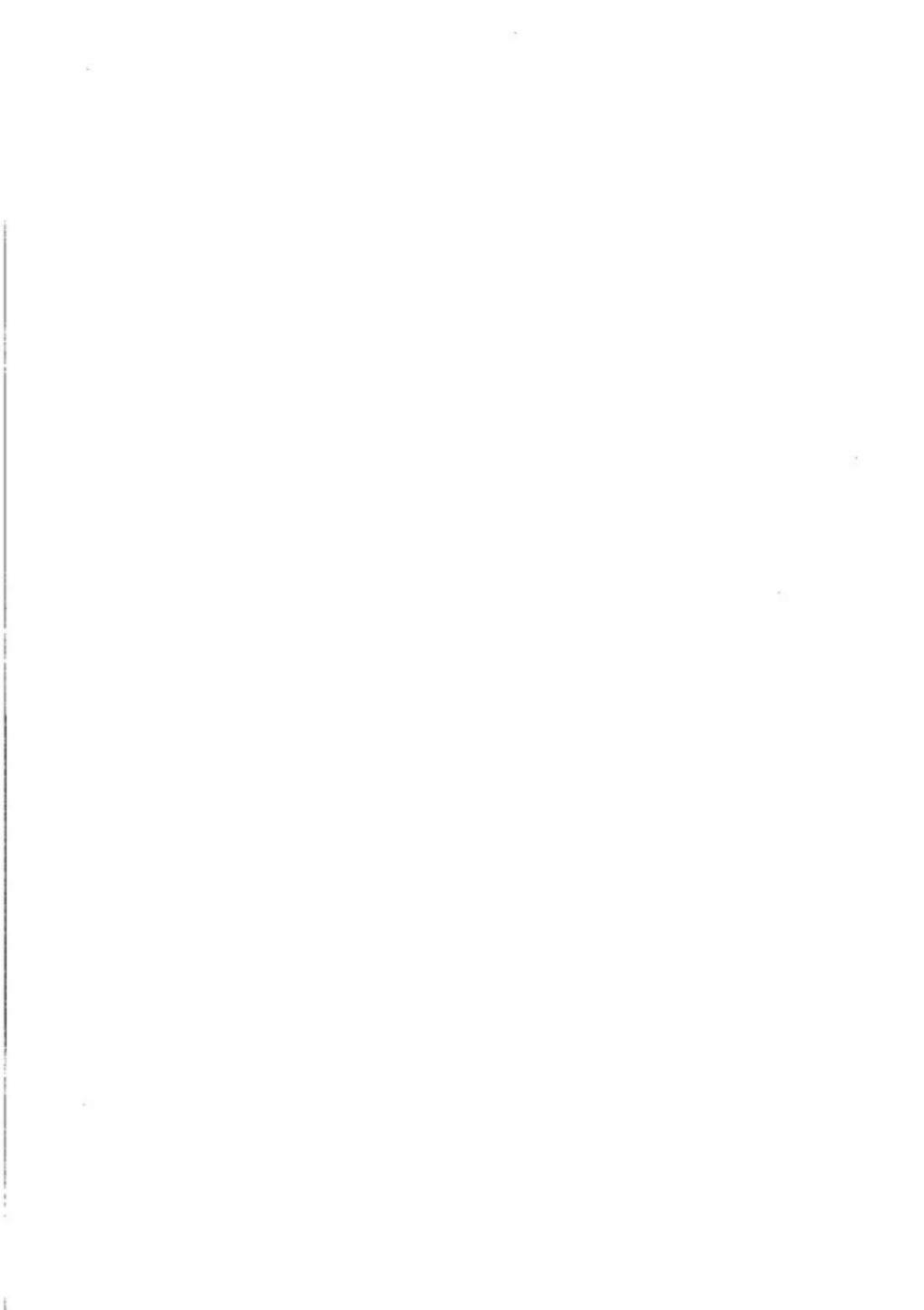
第2調査区全景（西から）



第1調査区 第9層土器出土状況（東から）



第1調査区 下層確認（南から）



## VII 中田遺跡第11次調査 (N T 92-11)

### 調査文書

## 例　　言

1. 本書は、八尾市刑部3丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第11次調査（NT92-11）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第103号 平成4年9月16日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託をうけて実施したものである。
1. 現地調査は、平成4年11月6日から平成5年3月23日にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は81m<sup>2</sup>を測る。なお調査においては坂下 学・濱田千年・山内千恵子・柴田達弥が参加した。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめ	87
2. 調査概要	89
1) 調査方法と経過	89
2) 基本層序と出土遺物	89
3) 検出遺構と出土遺物	90
4) 出土遺物観察表	92
3.まとめ	93

## VII 中田遺跡第11次調査 (N T 92-11)

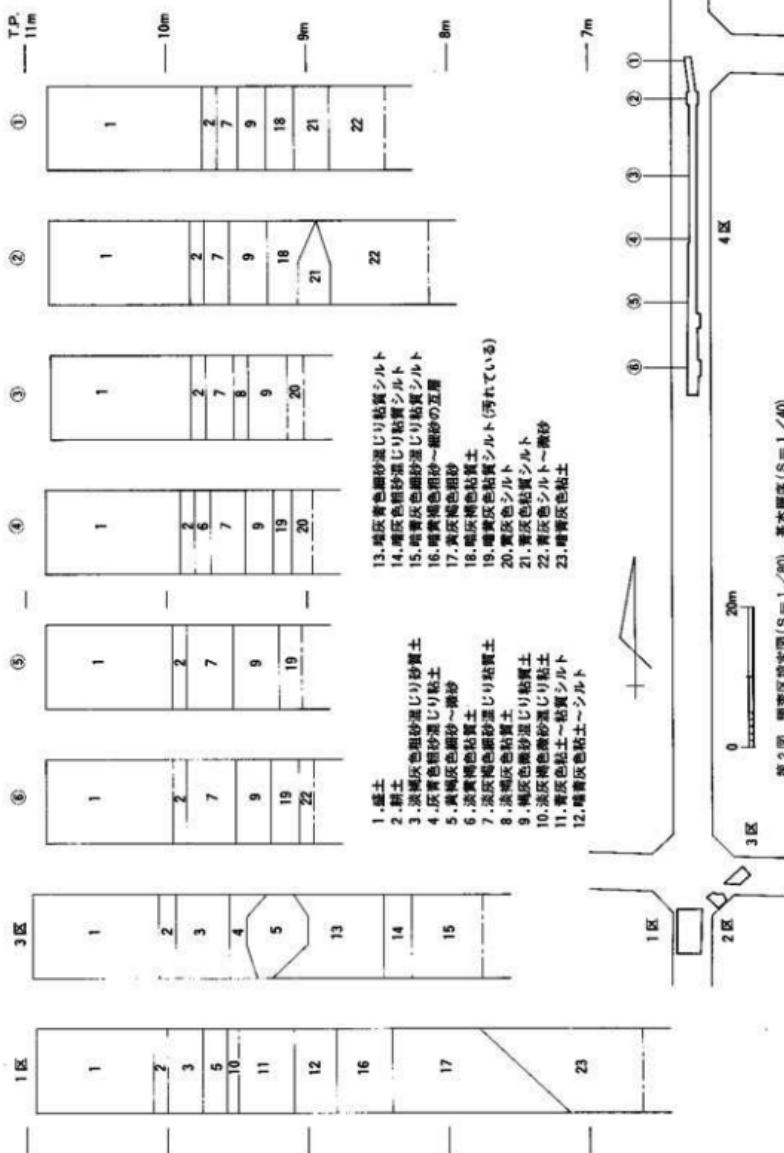
### 1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲に広がる。旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。なお今回の調査地の南部付近では、吉備系の土器を多量に含む古墳時代前期（庄内式期初頭）の一括遺物が出土している。



第1図 調査地位略図 ( $S = 1/5000$ )



第2図 調査区設定図(S=1/80)、基本順序(S=1/40)

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は公共下水道工事に伴う調査で、調査区は立坑部分1か所（1区）、人孔部分2か所（2・3区）、埋管のための開削トレーンチ部分（4区）に分かれている。

調査は、1区ではまず地表下約1.1mまでを機械掘削し、以下の約0.7mを人力掘削で、さらに約0.5mを人力掘削と機械掘削を併用して発掘調査を行った。また以下約2.0m（地表下約4.3mまで）の機械掘削については下層確認のための立会調査を実施した。2・3区では地表下約1.5mまでを機械掘削し、以下の約1.7mを人力掘削と機械掘削を併用して発掘調査を行った。4区では工事進行に合わせて立会調査を行い、主に断面観察・遺物採集を実施した。

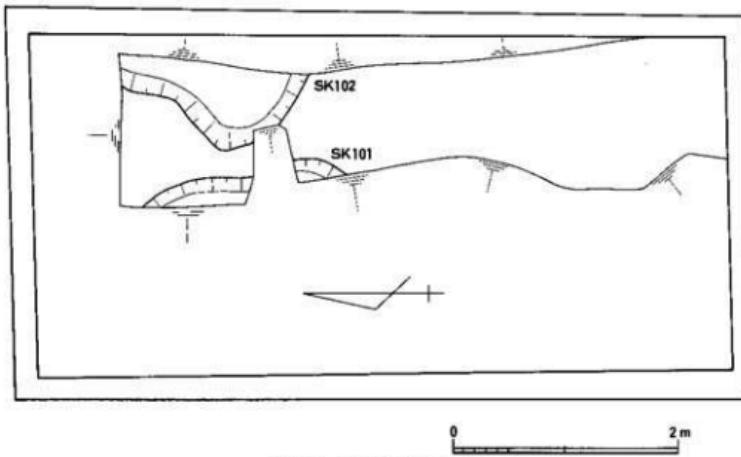
### 2) 基本層序と出土遺物

調査地全域に見られる第1・2層は、近世以降の盛土・旧耕土である。

1区第3層からは屋瓦片が多く出土している。1～3区第4・5層は中世頃の河川堆積層と考えられ、河底付近の堆積上は鉄分を多く含み、ここから弥生時代後期～中世の土器（2・3・9）が出土している。

4区の全域でみられた第6・7層は平安時代～鎌倉時代頃の包含層で、第7層は2層に分かれる可能性がある。第8・9層は古墳時代後期～奈良時代の包含層にはば比定されると考えられる。土器の他埴輪片が全域にわたって出土している（10～33）。

1～3区の第10～17層は河川堆積層と考えられる。河床面とした第23層上面は北から南に低くなっている、東西方向の流路が想定される。出土遺物は少量で、上層にあたる青灰色系粘土



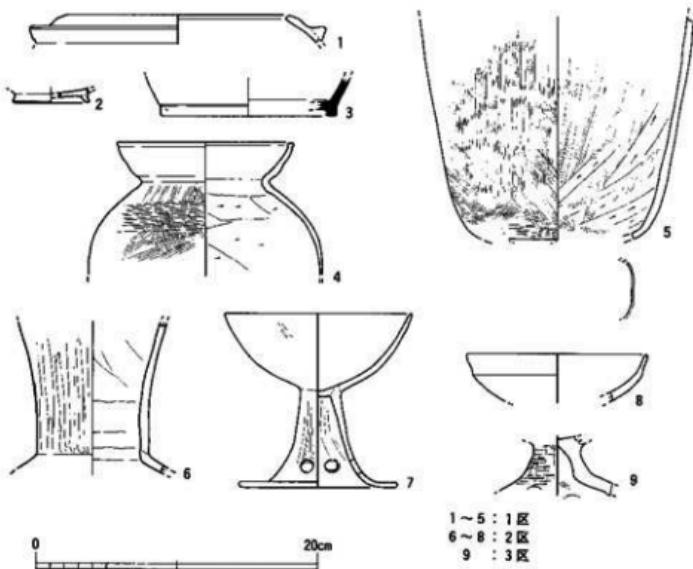
第3図 1区平面図 (S = 1/50)

層（第10—13層）の第12層からは弥生時代後期から布留式期の土器（4・6～8）が出土している。下層にあたる第16・17層の砂層からは布留式期以降の土器が出土しており、層位の逆転がみられた。下層出土の上器の時期は、破片のため明確にはできないが、飛鳥—奈良時代まで下る可能性がある（土器類一5）。

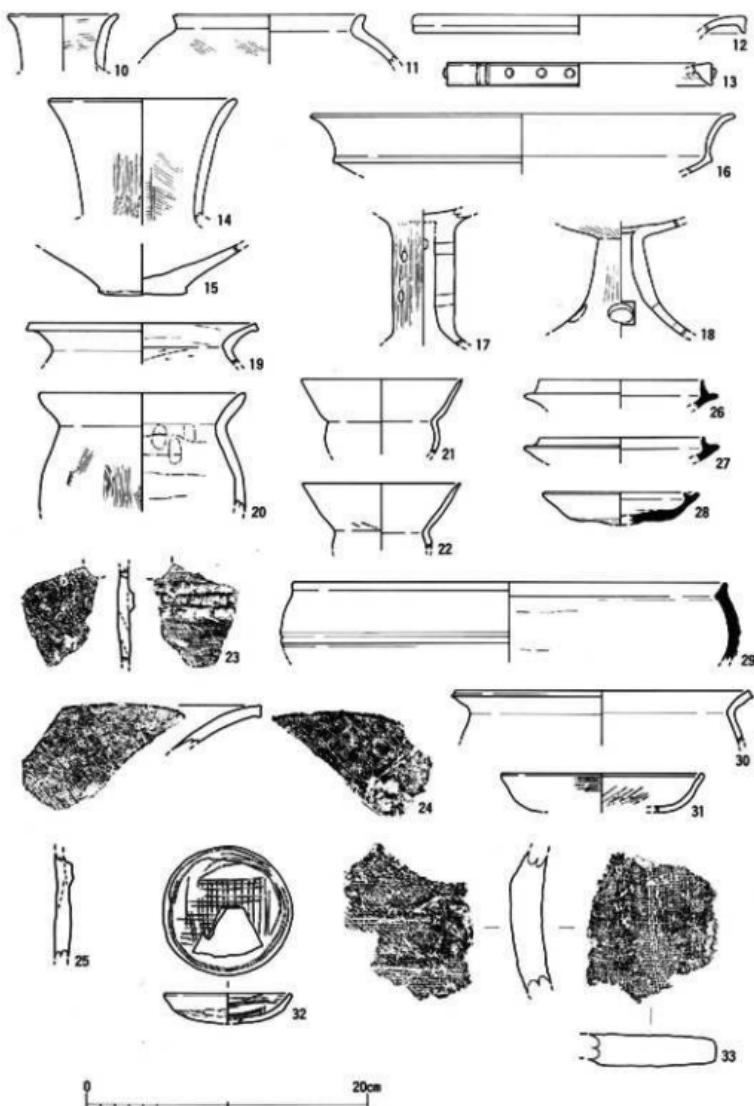
4区北端から約10mの範囲で見られた第18層は、弥生時代後期の土器（10～18）を多量に含む包含層であり、第21層あるいは第22層上面が当該期の遺構面であるのは確実であろう。

### 3) 挖出遺構と出土遺物

遺構が確認できたのは1区のみで、第3層上面、調査区の北部で土坑2基（SK101・102）を検出した。いずれも平面不定形で、法量（長辺×短辺×深さ）はSK101—155cm以上×25cm以上×約10cm、SK102—160cm以上×75cm以上×約10cmである。埋土はいずれも暗灰褐色繊砂混じり粘質土である。時期は出土遺物から中世以降と考えられる。



第4図 1～3区出土遺物（S=1／4）



第5図 4区出土遺物 (S = 1/4)

## 4) 出土遺物観察表

遺物番号 測定番号	器種	山土地点	法量(cm) (復元値)	口径 径高	色調 外 内	胎 土	焼成	技法・形態等の特徴	参考
1 瓦質 羽筆	1 区 第3層		(15.9)	脚付 (21.3)	乳白色	青	良好	不明。	極小 反転
2 黒色土器 碗	1 区 第5層	高台径 5.5 高台高 0.7		灰黑色	青	良好	高台部ナデ。	1/2 反転	
3 土器部 底盤	1 区 第5層	高台径 (13.6) 高台高 0.7		淡灰色	青 1.5mm以 下の砂粒を含 む	良好	圓軋ナデ。	1/8 反転	
4 土器部 底盤	1 区 第12層		(12.7)	淡褐色系	青 1.0mm以 下の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。底部内面ナデ。体部外側ハケ、内 面ハラケズリ。	1/3 反転	
5 土器部 底盤	1 区 第16層			明乳白色	やや粗 3mm 以下の砂粒を含む	良好	底部外側ハケ。内面ハラケズリのちハケ。	1/4 反転	
6 陶生 豆	2 区 第11層	頭部径 (8.0)		暗乳白色	やや粗 1mm 以下の砂粒を含む	良好	外側ヘラミガキ、内面ナデ。	1/2 反転	
7 陶生 高杯	2 区 第11層	(13.4) 底径 (11.4)		暗灰褐色	W 4mm以下 の砂粒を多量 に含む	良好	脚部外側ヘラミガキ、内面ナデ。脚部4方向に円形 スカシ。	1/2 一部反転	
8 土器部 鉢	2 区 第11層		(13.0)	乳白色	青	良好	外側は口縁部ヨコナデ、体部ナデ、内面ナデ。外壁 底盤あり。	1/4 反転	
9 土器部 高杯	3 区 第5層			乳白色	やや粗 1~ 3mmの砂粒を含む	良好	脚部外側ヘラミガキ、内面ナデ。脚部にハケ残る。 脚部4方向に円形スカシ。	前部のみ 一部反転	
10 陶生 豆	4 区 第18層		(7.9)	淡灰白色	青 2.5mm以 下の砂粒を含む	良好	口縁部外側ナデ、内面ハケ。	1/4 反転	
11 陶生 無柄型	4 区 ① 第18層		(13.6)	乳白色	青	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ヘラミガキ、内面ナデ。	1/6 反転	
12 陶生 豆	4 区 ① 第18層		(24.0)	灰白色	青 2mm以下 の砂粒を含む	良好	ヨコナデ。	極小 反転	
13 陶生 豆	4 区 ①~② 第18層		(19.1)	暗灰白色	やや粗	良好	口縁部外端面に円形浮文及U形状浮文。	1/8 反転	
14 陶生 長脚袋	4 区 ①~② 第18層	口頭部高 8.3	(13.5)	暗乳白色	青	良好	外側ヘラミガキ、内面ハケ。	1/5 反転	
15 陶生 地盤落	4 区 ① 第18層	底径 6.4		乳灰白色	やや粗	良好	ナデ。	底部のみ 一部反転	
16 陶生 高杯	4 区 ①~② 第18層		(30.4)	淡灰白色	青 2.5mm以 下の砂粒を多 量に含む	良好	不明。	極小 反転	
17 陶生 高杯	4 区 ③~⑥ 第9~19層	脚径 4.4		乳白色	やや粗 1~ 4mmの砂粒を含む	良好	外側ヘラミガキ、内面ナデ。脚柱部一段二方向に円 形スカシ。	脚部のみ 一部反転	
18 陶生 高杯	4 区 ① 第19層			素色	青 1~3mm の砂粒を含む	良好	外側ヘラミガキ。脚部4方向に円形スカシ。	脚部のみ 一部反転	
19 土器部 底盤	4 区 ① 第9層		(16.5)	灰白色	青 1.0mm以 下の砂粒を多 量に含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部内面ハラケズリ。	1/5 反転	
20 土器部 底盤	4 区 ④~⑤ 第9層		(14.8)	淡灰白色	青 0.7mm以 下の砂粒を多 量に含む	良好	口縁部ナデ。体部外側ハケ、内面ナデでユビオサエ 残る。	1/4 反転	
21 土器部 底盤	4 区 ⑤~⑥ 第9層		(11.6)	茶褐色	青 1.0mm以 下の砂粒を含 む	不良	小明。	1/5 反転	
22 土器部 底盤	4 区 ⑤~⑥ 第9層		(11.4)	茶褐色	青 0.5mm以 下の砂粒を含 む	良好	小明。	1/5 反転	

遺物番号 回収番号	器種	出土地点	径深(cm) (底充填)	口径 底高	色調	外 形	胎 土	焼成	特徴・形態等の特徴	度 合 備 考
23 三	円筒埴輪	4 区 ②-③ 第9層	タガ高 タガ幅	0.4 1.8	乳茶色	直	良好	外周ヨコハケのちタテハケ、内面ナナメハケ。タガ部ヨコナデ。口部スカッシュ。楕円形。	極小	
24	朝慶形円筒埴輪	4 区 ①-② 第9層			明乳茶色	直	良好	内外面ナナメハケ。	極小	
25	円筒埴輪	4 区 ①-④ 第9層	タガ高 タガ幅	0.3 1.7	明乳茶色	直	良好	不明。	極小	
26	瓶底器 杯身	4 区 ②-③ 第9層	受部径 (11.8)	灰茶色	直 径 1 mm 以下 の砂粒を含む	良好	四輪ナゲ。		1/8 反転	
27	瓶底器 杯身	4 区 ③-⑤ 第9層	受部径 (14.0)	灰色	直	良好	四輪ナゲ。底部外周灰かぶり。		極小 反転	
28	瓶底器 杯身	4 区 ④-⑤ 第9層	受部径 (11.2)	灰茶色	直	良好	四輪ナゲ。底部外周ヘラ起し。		1/4 反転	
29	瓶底器 卷台	4 区 ① 第9層	(31.2)	灰色	直	良好	四輪ナゲ。		極小 反転	
30	十輪器 茎	4 区 ⑥ 第7層	(21.7)	乳茶色	直	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナゲ。		極小 反転	
31	上輪器 杯	4 区 ⑥ 第7層	(14.6) 2.8	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部～体部ヘラミガキのち内面放射状端突。底部外周ナゲ。		極小 反転	
32 三	瓦 皿	4 区 ③-④ 第7層	9.2 2.2	暗灰褐色	直 径 0.2mm 以下 の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。底縁部ユビオサエ。口縁部内面 圓錐状、底部内面格子状の縮穴。		4/5	
33	瓦 平瓦	4 区 ③-⑤ 第7層	厚さ	2.3	灰色	直	良好	口面刷毛、内面練打。端部ナゲ。		

### 3.まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から近世の遺構・遺物を検出した。出土遺物の量はコンテナに3箱を数える。

4区北部では弥生時代後期の土器を多量に含む包含層が確認された。遺構は検出できなかつたが標高9.1m前後に当時の集落が拡がると推定され、当地は集落域の南部にあたるものと考えられる。古墳時代前期の出土遺物は少量であるが、1~3区の河川堆積層から出土しており、周辺に集落が存在したのであろう。4区では出土遺物の状況から古墳時代後期以降、連綿と集落が営まれていたようである。また包含層より埴輪が出土していることも注目される。



1区 全景（北から）



1区 下層調査（南から）

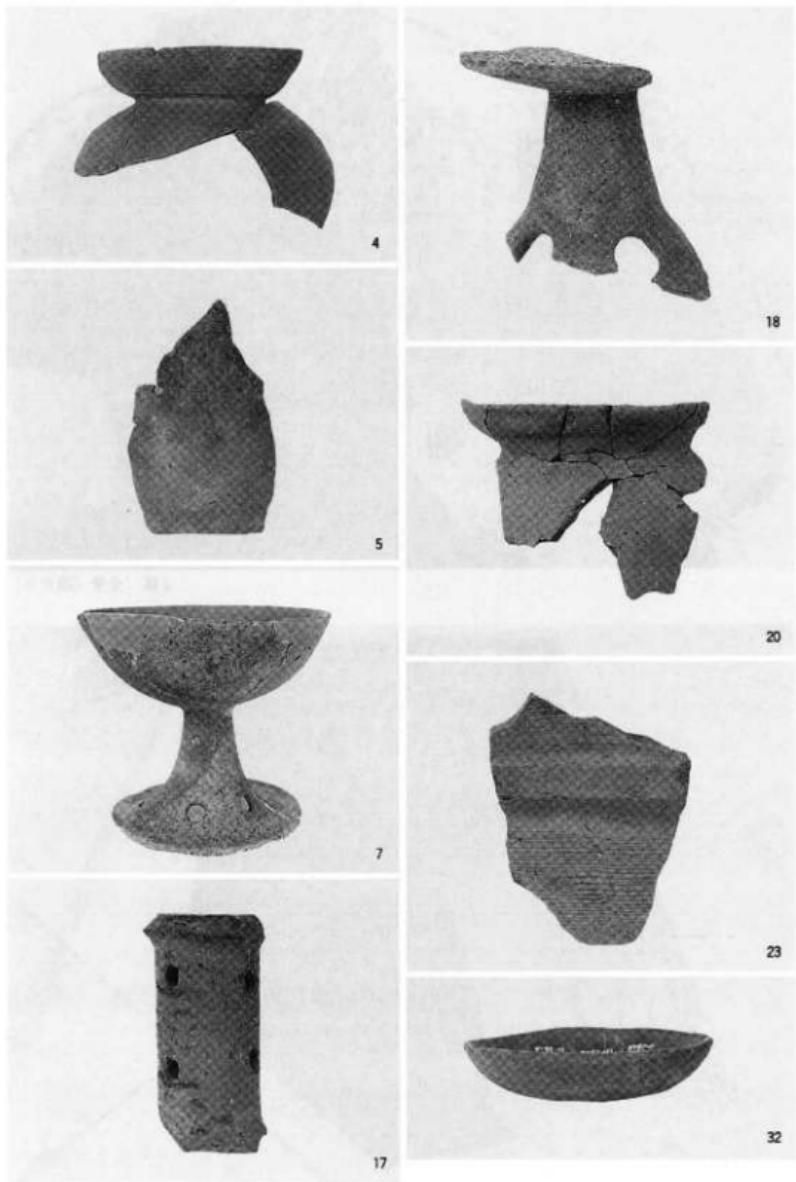


2区 全景（西から）



3区 全景（西から）

図版三 出土遺物



## VIII 中田遺跡第12次調査 (N T 92-12)

## 例　　言

1. 本書は、八尾市中田2丁目405番地で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第12次調査（N T92-12）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第143号平成4年12月15日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が松村清治氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成5年1月19日～1月30日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は120m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては千賀幸二、能勢尚樹、八田雅美が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子、西岡千恵子、遺物写真・本分の執筆－岡田が担当した。

## 本文目次

1.はじめに.....	97
2.調査概要.....	98
1) 調査方法と経過.....	98
2) 基本層序.....	98
3) 検出遺構と出土遺物.....	99
4) 出土遺物観察表.....	108
3.まとめ.....	111

## VIII 中田遺跡第12次調査 (N T 92-12)

### 1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目付近に広がる複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する。当調査地周辺の遺跡では、西に矢作遺跡、北に小阪合遺跡、南に東弓削遺跡が隣接する。当遺跡では、現在までに当調査研究会が11件の調査を実施しているほかに、大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・八尾市教育委員会により数次にわたって発掘調査が実施されている。それらの調査の結果、弥生時代から鎌倉時代に至る集落に伴う遺構・遺物が検出されている。そのなかで、昭和47年の中田遺跡調査会による調査では日本最古の貨幣である「和同開珎」をはじめ、平安時代～鎌倉時代の居住域とともに青磁・白磁・墨書き入り土器が出土している。また、八尾市教育委員会による調査では昭和53



第1図 調査地位位置図

年に古墳時代前期の土器（庄内式）とともに鳥形木製品、昭和61年に弥生時代の竪棺がそれぞれみつかっている。

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、当調査研究会が当遺跡内で実施した第12次調査にあたり、共同住宅建設工事に伴うものである。現地では八尾市教育委員会が実施した遺構確認調査結果に基づき、工事部分にあたる南北16m、東西8mの調査区を設定した。掘削に際しては、表土下0.7mまでの現代の耕土を含む土層を機械により除去した後、以下の0.8mの土層については人力による掘削・精査を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。

調査地の区割りは、建築設計範囲の北部中央に任意の点を設定し、そこを拠点として10m区画で東西をアルファベット（a・b）、南北を算用数字（1～5）として表した。地区名は交差する南西側を優先し、1a～5b区と呼称した。

### 2) 基本層序

現地表から下層確認を含むまでの深度は約1.8mを測り、この間に調査区全域に普遍的に堆積する9層を抽出して基本層序とした。なお、第7層については調査区の北部のみにしか存在していない。

第1層：盛土及び現耕土。層厚20cm前後。

第2層：旧耕土。層厚15cm前後。

第3層：床土

第4層：明茶褐色細砂混粘質土。層厚20～30cm。

第5層：茶褐色粘質土。層厚25～30cm。中世の遺物を少量

含んでいる。

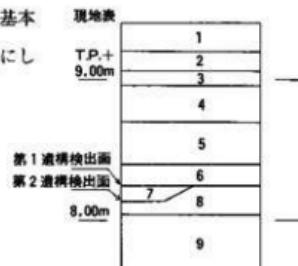
第6層：暗紫灰色砂礫混粘質土。層厚10～20cm。古墳時代

前期（布留式新相段階）の遺物を含んでいる。

第7層：暗茶灰色粘質シルト。層厚10cm前後。古墳時代前期（布留式古相段階）の遺物を含んでいる。調査区の北部に堆積する層で、南部においては後世によって削平されたものか存しない。また、北部ではこの層の上面が第1遺構検出面となる。

第8層：青灰色シルト。層厚15～20cm。遺物を含まない層で、この層の上面が調査区の南部では第1遺構検出面、北部では第2遺構検出面となる。

第9層：灰白色粗砂～砂礫層。層厚40cm以上。層内の出土遺物から古墳時代前期に埋没した



第2図 基本層序模式図(1/40)

自然河川の堆積層と考えられる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

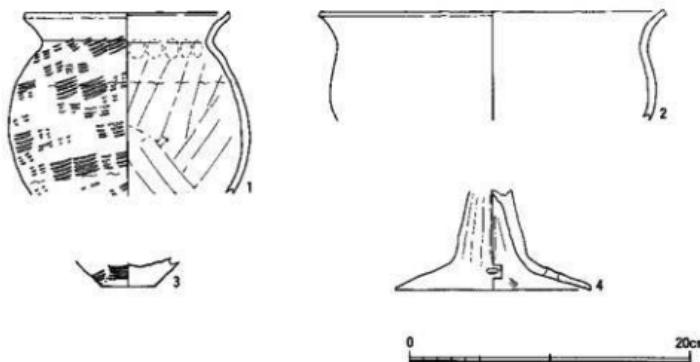
調査の結果、現地表下1.2m(標高8.2m)前後のところで鎌倉時代に比定される池状遺構1箇所・自然河道1条(NR-101)、古墳時代前期(布留式新相段階)に比定される土坑3基(SK-101~103)・溝4条(SD-201~204)・落ち込み1箇所(SO-101)・土器集積1箇所(SW-101)を検出した。なお、鎌倉時代の遺構が検出された付近では、古墳時代前期(布留式新相段階)の遺物包含層になる第6層の堆積がかなり希薄になっている。そして調査区北部にのみ存在する第7層を除去したところ(標高8.1m前後)で、古墳時代前期(布留式古相段階)に比定される土坑2基(SK-201・201)・溝2条(SD-201・201)・小穴2個(SP-201・201)を検出した。

#### ・第1遺構面

#### ◎鎌倉時代

#### <池状遺構>

1~2a区で検出した。遺構の西側部分は調査区外に至り、南側部分は試掘孔によって削平されているため全容は不明である。検出規模は東西幅4.7m・南北幅5.7m・深さ0.8mを測る。内部堆積土は上から灰白色細砂・青灰色細砂混粘土の2層に分層でき、下層の粘土・砂の互層の堆積状況と遺構底部に植物遺体等の沈殿がみられないことから、人為的に掘られてすぐに埋め戻されたと考えられる。また遺構の西側部分が不明なので決定的なことはいえないが、見方によれば当時の人々が井戸掘削途中で何等かの事情により掘り方を断念し、埋め戻したという解釈もできる。遺物は青灰色細砂混粘土層から土師器小皿・瓦器碗の小破片とともにV様式系の壺(1~3)・高杯(4)が出土した。

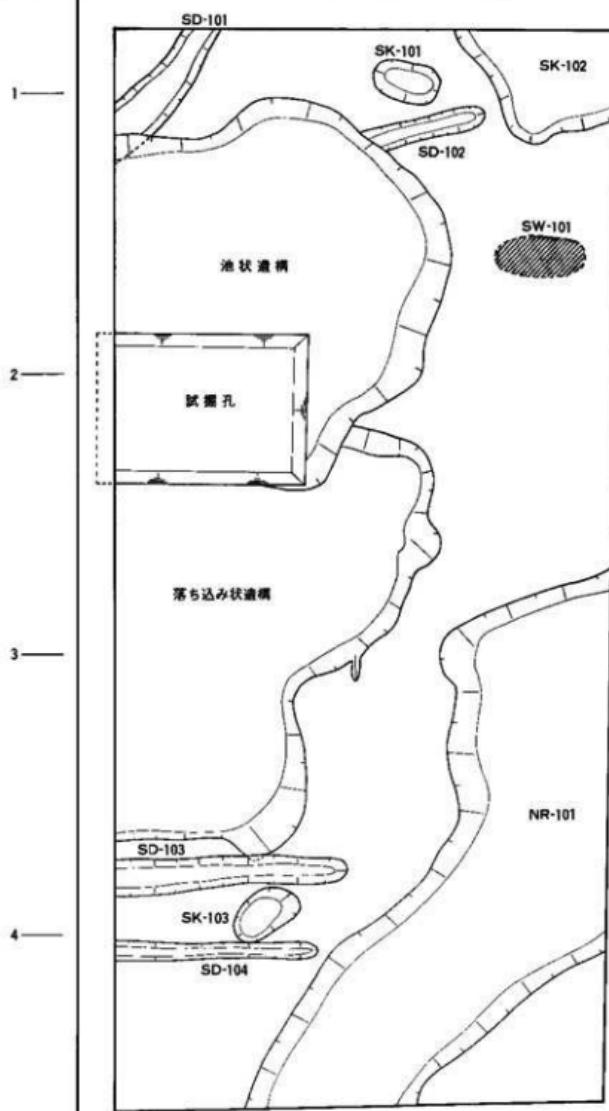


第3図 池状遺構出土遺物実測図



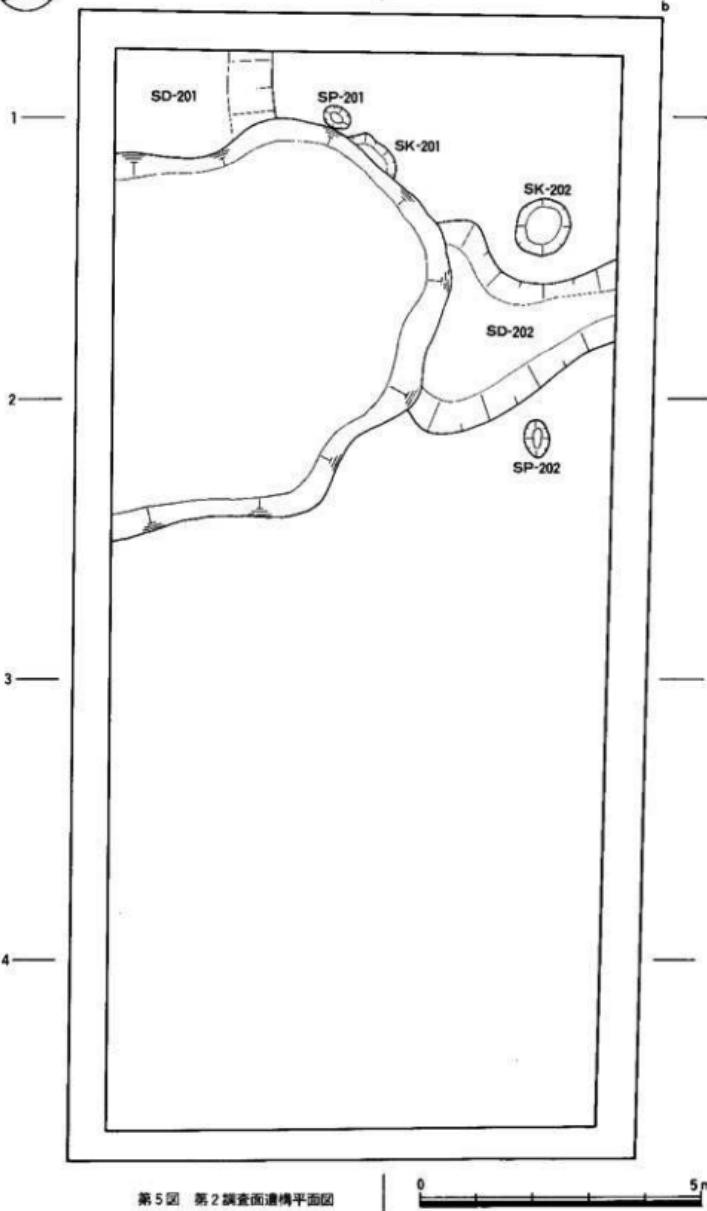
N

b



第4図 第1調査面透構平面図



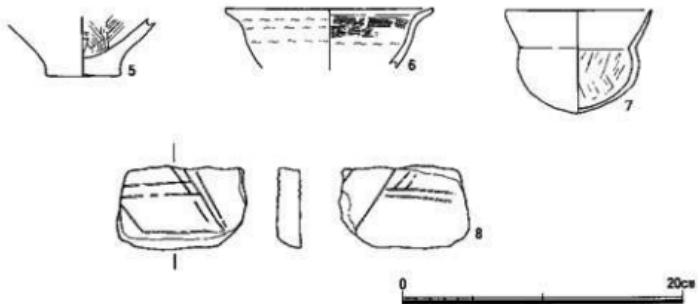


第5図 第2調査面構造平面図



<自然河道 (N R - 101) >

2 ~ 3 b 区で検出した。方向は調査区内で北東から南西への流れをもつとみられる。規模は幅2.4 ~ 5.5m・深さ0.3mを測る。内部堆積土は灰白色砂礫混粘土・灰色粗砂一砂礫の互層である。層内からは弥生時代後期末～鎌倉時代に比定される遺物が出土しており、なかには表裏面ともにヘラで線刻された形象埴輪の一部とみられるもの(8)が1点混入していた。そのほか図化できたものには、V様式系の壺(5)・鉢(6)・小型丸底壺(7)がある。



第6図 N R - 101出土遺物実測図

◎古墳時代前期（布留式薪相）

<土坑 (S K) >

S K - 101

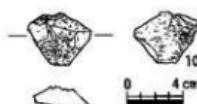
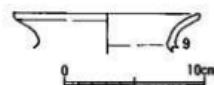
1 ~ 2 b 区で検出した。平面の形状は楕円形、断面は浅い皿状を呈する。規模は東西幅1.0m・南北幅0.6m・深さ0.17mを測る。内部堆積土は暗灰色粘質土である。遺物は壺の破片が数点出土したが図化できたものは(9)の1点だけである。

S K - 102

1 ~ 2 b 区で検出した。北部及び東部が調査区外に至るため全容は不明である。規模は検出部で、東西幅2.3m・南北幅1.6m・深さ0.16mを測る。内部堆積土は暗灰色粘質土である。遺物はV様式系の壺及び圧内壺の小破片とともにサヌカイト製の削器(10)が1点出土した。

S K - 103

3 a 区で検出した。平面の形状は楕円形、断面は浅い皿状を呈する。規模は長径1.0m・短



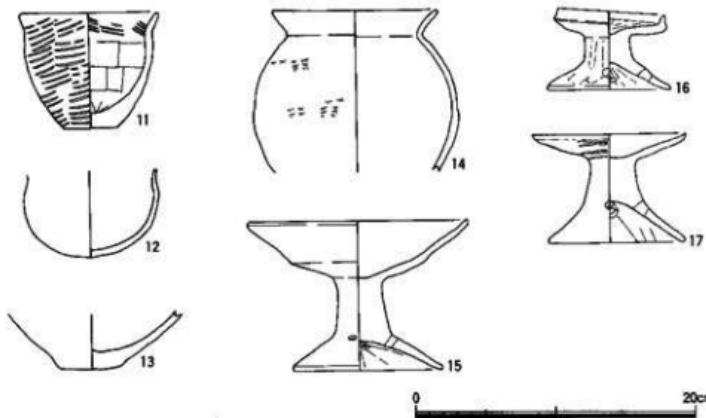
第8図 S D - 102出土遺物実測図

径0.6m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は暗灰色粘質土である。遺物は庄内壺の破片が少量出土した。

## &lt;溝(SD)&gt;

## SD-101

1~2a区で検出した。北東~南西方向に伸びる溝で、南西部は池状造構によって切られる。検出部の規模は幅1.8m・深さ0.07mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、内部堆積土は暗灰色粘質土である。遺物はV様式の鉢(11)・古墳時代前期に比定される壺(12・13)・甕(14)・高杯(15)・小型器台(16・17)がある。



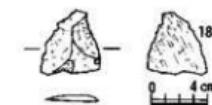
第9図 SD-101出土遺物実測図

## SD-102

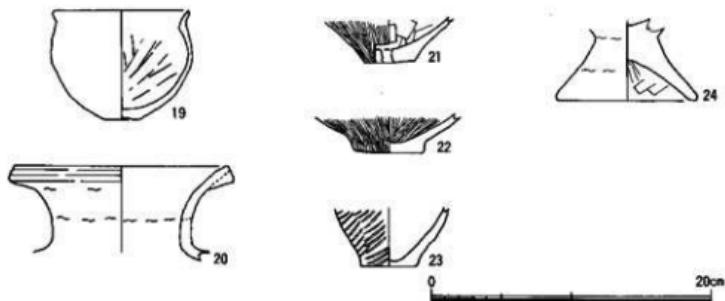
2a~b区で検出した。東西方向に伸びるが、西側部分は池状造構によって切られる。検出部の規模は幅0.3m・深さ0.17mを測る。断面形は逆台形を呈し、内部堆積土は暗灰色粘質土である。遺物は壺(19・20)・甕(21~23)・小型器台(24)がある。

## SD-103

4a区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出部の規模は幅0.5m・深さ0.05mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、内部堆積土は暗灰色微砂混粘質土で少量の炭化物を含む。遺物は上飾器の小破片が少量出土した。



第10図 SD-102出土遺物実測図



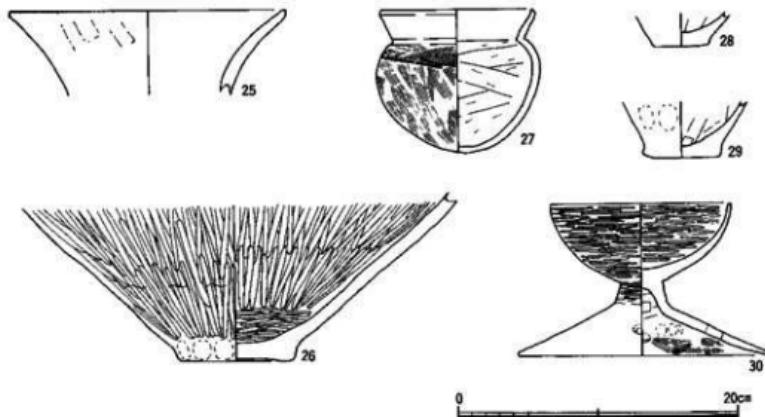
第11図 SD-102出土遺物実測図

#### SD-104

SD-103の南部で平行して伸びるものである。検出部の規模は幅0.3m・深さ0.05mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、内部堆積土は暗灰色微砂混粘質土である。遺物は土師器の小破片が少量出土した。

#### < 落ち込み (SO-101) >

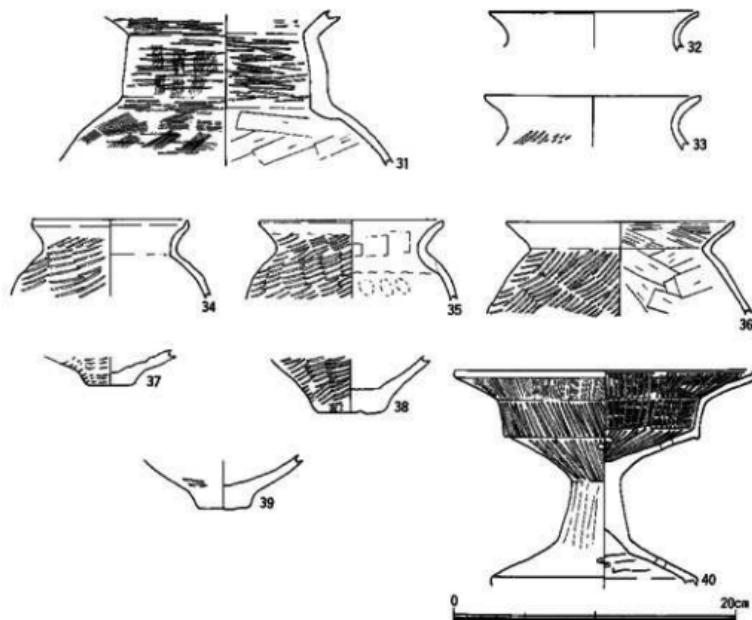
2a・b-3a区にかけて検出した。東側から西側に向かって緩やかに落ち込むもので、北側は試掘孔及び池状遺構によって削平され、西側は調査区外に至る。規模は検出部で東西幅4.2m・南北幅5.3m・深さは東部の浅いところで0.1m・西部の最深部で0.2mを測る。内部堆積土は上から暗灰色砂疊混粘質土・暗茶褐色粘質シルトの2層に分層され、少量の炭化物が含まれる。内部からの遺物は、壺(25・26)・完形品の小型の壺(27)やそれ以外の壺(28・29)・高杯(30)がある。



第12図 SD-101出土遺物実測図

## &lt;土器集積 (SW-101) &gt;

2 b 区で検出した。東西に長く集積するもので、掘り方は認められない。集積範囲の規模は東西幅1.2m・南北幅0.6mを測る。器種内容は、複合口縁壺(31)・壺(34~36)・器台(40)で、なかでも(40)の器台は口縁部と脚部の一部が欠損しているものの完形品に近いものである。



第1308 SW-101出土遺物実測図

## ・第2遺構面

## &lt;土坑 (SK) &gt;

## SK-201

2 a ~ b 区で検出した。南西部は池状遺構によって削平されているため全容は不明である。規模は検出部で最大幅0.9m・最小幅0.3m・深さ0.1mを測る。内部堆積土は暗灰色砂礫混粘質土で炭化物を多量に含む。遺物は土師器の小破片が少量出土した。

## S K - 202

2 b 区で検出した。平面の形状は円形を呈し、断面形は楕形を呈する。規模は、径0.8m・深さ0.12mを測る。遺物は壺の破片が出土した。

## <溝 (SD) >

### SD - 201

1 ~ 2 a 区で検出した。検出できたのは東岸部分のみで、南側は池状造構によって削平され、西側は調査区外に至る。規模は検出部で幅2.8m・深さ0.3mを測る。内部堆積土は暗灰色粘質土と灰白色細砂の互層である。遺物はV様式系の壺の体部片・庄内壺の口縁部の一部をはじめ土師器の小破片が僅かにみられたが、図化できるものはなかった。

### SD - 202

2 ~ 3 b 区で検出した。東西方向に伸びるとおもわれるが、西側は池状造構によって削平される。規模は検出部で最大幅3.7m・最小幅1.2m・深さ0.11mを測る。内部堆積土は暗灰色微砂混粘質土である。遺物はV様式系の壺の体部片・同式系高杯の脚部・庄内壺の体部片が含まれていたが図化できるものはなかった。

## <小穴 (SP) >

### SP - 201

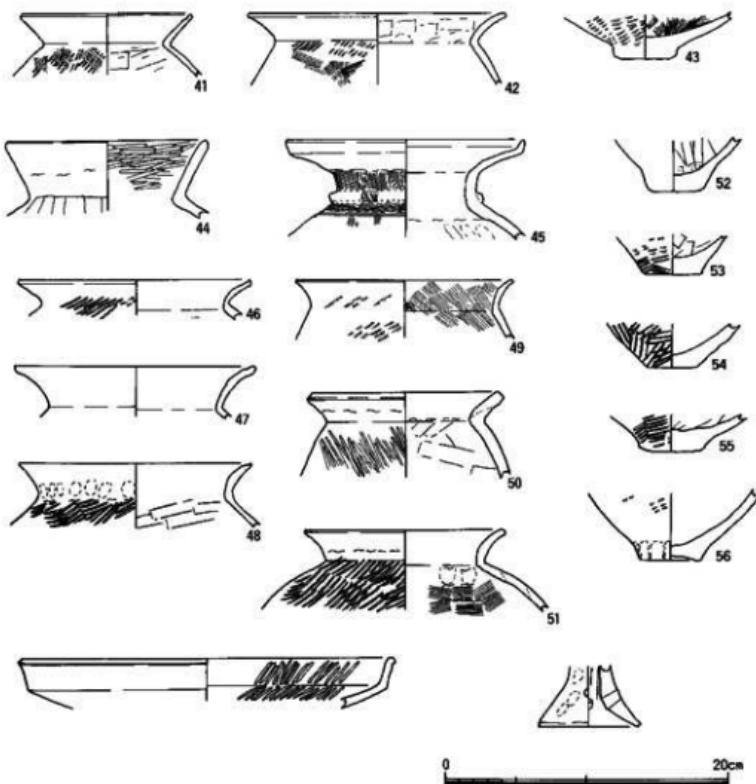
1 ~ 2 a 区で検出した。平面の形状はやや梢円形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径0.5m・短径0.3m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は暗灰色粘質土で、遺物はなかった。

### SP - 202

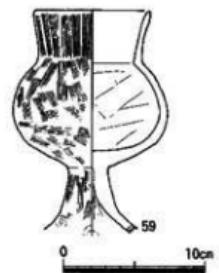
2 b 区で検出した。平面の形状は梢円形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径0.7m・短径0.4m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は暗灰色微砂混粘質土で、遺物は土師器の破片が少量出土した。

## 4) 遺構に伴わない出土遺物

第4層からは近世の陶磁器片、第5層からは土師器および瓦器の破片が僅かにみられたが、量的には第6・7層の古墳時代前期（布留式）が比較的多い。そのなかでも器種別にみると壺の占める割合が高い。出土量ではコンテナ3箱を数える。そのうち図化できたものは、第6層から壺3点（41~43）のみである。第7層からは、壺2点（44・45）・壺11点（46~56）・小型器台（58）・V様式の高杯（57）がある。また、下層確認調査では4 b 区の砂層内（第8層）から土師器の小破片とともに台付壺（59）が1点出土した。



第14図 造模に伴わない出土遺物実測図 第6層(41~43)・第7層(44~58)



第15図 下層(第9層)出土遺物実測図

## 4) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 (cm)	口径 器高	形態・調査の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況 備考
1 三 (土師器) 池状遺構		14.4		口縁部内外面ヨコナギ。体部外面タキキ、内面上位ユビオサエ。以下ヘラナデ。肩部内外面に1条ずつ縫合痕を有す。	内／灰茶色 外／灰橙色	2mm以下の 砂粒を多量 に含む	良	1/3
2	同 上	24.4		内外面ともに施漬が著しいため調整不明。	茶灰色	5mm以下の 砂粒を含む	良	1/3
3	同 上		底径 3.8	内面ヘラナデ。外面タキキ。外面に黒斑有り。	灰茶色	2mm以下の 砂粒を多量 に含む	良	底部のみ
4	高杯 (土師器) 池状遺構		底径 14.0	脚柱部内面ヘラナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。腹部内面ハケナデ。外曲唇或のため不明。底部の穿孔の数値は不明。	内／橙色 外／乳白色	1.5mm以下 の砂粒を少 量含む	良	脚部1/3
5	甕 (土師器)		底径 5.2	内面ヘラナデ、外面ナデ。内面に黒斑有り。	内／淡灰茶 色 外／灰茶色	3mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	底部のみ
6 三 三 N R - 101	鉢 (土師器)	14.8		口縁部内外面ヨコナギ。体部内面下位ハケナデ。下位ナデ。外曲ナデ。体部内面に1条、外面に3条の縫合痕を有す。	茶灰色	2mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	1/3
7 三 三 N R - 101	小型丸底甕 (土師器)	10.4 7.3		口縁部内外面ヨコナギ。体部内面ヘラケズリ、外 面施漬のため不明。体部外面に黒斑有り。	褐色	褐	良	ほぼ完形
9	甕 (土師器) N R - 101		13.2	口縁部内外面ヨコナギ。外面に黒斑有り。	茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/6
11 三 三 S K - 101	鉢 (陶土式)	9.6 8.1 底径 3.8		口縁部内外面タキキ後ヨコナギ。体部内面ヘラナ デ、外面タキキ。口縁部内外面に黒斑有り。	乳灰茶色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	3/4
12 三 三 S D - 101	甕 (土師器)		最大径 9.6	内外面ともに施漬が著しいため調整不明。	内／暗紅色 外／灰茶色 —褐色	5mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	口縁部の一 部欠損
13	同 上		底径 4.3	内外面ともに施漬が著しいため調整不明。	内／暗紅色 外／暗赤褐色	3mm以下の 砂粒を多量 に含む	良	底部のみ
14 三 三 S D - 101	甕 (土師器)	11.8		口縁部内外面ヨコナギ。体部外面タキキ、内面は 施漬のため調整不明。	内／暗紅色 外／暗赤褐色 —茶	4mm以下の 砂粒を多量 に含む	良	1/4
15 三 三 S D - 101	高杯 (土師器)	15.6 10.7 底径 10.6		底部内面ヘラナデ以外は、施漬が著しいため調 整不明。底部に四方孔を有す。	明茶褐色～ 茶灰色	3mm以下の 砂粒を多量 に含む	良	脚部一部欠 損
16 三 三 S D - 101	小型器台 (土師器)	7.1 5.5 底径 8.7		口縁部内外面ヨコナギ。受部内面ヘラナデ、外壁 ナデ。底部内面ヘラナデ、脚柱部及び脚底部内面 ヘラナデ。底部に四方孔を有す。受部内面に黒斑 有り。底部内面全体に煤付着。	茶灰色	1mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	脚底部一部 欠損
17 三 三	同 上	11.0 7.7 底径 9.5		受部内面施漬のため調整不明。外曲ヘラミガキ。 底部内面ヘラナデ。その他は施漬のため調整不明。 底部に四方孔を有す。底部内面煤付着。	灰褐色～褐 色	5mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	受部1/2欠 損
19 四 四 S D - 102	甕 (土師器)	9.6 7.7 底径 2.4		口縁部内外面ヨコナギ。体部内面ヘラナデ、外曲 施漬のため不明。体部外面に黒斑有り。	内／黃褐色 外／乳灰茶 色	4mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	5/6

遺物番号 同版番号	器種 出土地点	法量 口径 (cm)	形態・調整の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況 備考
20 盃 (土師器) SD-102		15.2	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外端に2条の凹 縫文。内面に1条、外面に2条の接合痕を有す。	淡灰褐色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/4
21 同上		底径 3.5	内面ヘラナデ、外面ヘラミガキ。底部穿孔。外面 に黒斑有り。	茶灰色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
22 同上		底径 5.0	内外面ヘラミガキ。	淡灰褐色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
23 盃 (土師器) SD-102		底径 4.0	内面ナデ、外面タキ。内外面焼付着。	褐灰色～茶 灰色	2mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
24 小形器台 (土師器) SD-102		底径 9.6	脚底部内面ヘラナデ。外面ナゲ。受部・脚部間外 面に1条、その下方に1条の接合痕有り。外面に 黒斑有り。	茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	脚底部1/2
25 盃 (土師器) SO-101		19.6	口縁部内外面ヨコナデ。内外面に黒斑有り。	灰黄色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/3
26 同上		底径 4.3	内外面ヘラミガキ、底部外面ユビオサエ・ヘラケ ズリ。外面に1条の接合痕有り。内面黒斑有り。	外ノ物灰色 内ノ茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
27 盃 (土師器) SO-101		10.8 10.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。外 面ハケナデ。	暗茶色	3mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	光形
28 同上		底径 4.0	内面ヘラナデ、外表面のため調整不明。	淡灰褐色	3mm以下の 砂粒を含む	良	底部のみ
29 同上		底径 5.5	内面ヘラナデ、外面ユビオサエ・ナデ。	淡灰褐色	3mm以下の 砂粒を含む	良	底部のみ
30 高杯 (土師器) SO-101		12.8 10.8 底径 17.6	杯部内外面ヘラミガキ。脚柱部内面ヘラナデ、外 面ヘラミガキ。脚柱部内面にユビオサエ・下位ハ ケナデ。外面部。脚部に4方孔を有す。	茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	底部3/4欠 損
31 四 盃 (土師器) SW-101		頂部最大径 14.7	口縁部内外面ヘラミガキ。底部内面ヘラミガキ。 外表面ハケナデ後ヘラミガキ。体部内面ヘラケズリ、 外表面ハケナデ。体部外面上に黒斑有り。	褐灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	頭部のみ完 存
32 盃 (土師器) SW-101		14.8	口縁部内外面ヨコナデ。	淡灰褐色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/4
33 同上		15.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外表面 ナデ。	茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/5
34 同上		11.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面削減のため調整 不明、外表面タキ	茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/6
35 同上		13.0	口縁部下位内外面ヨコナデ、下位内面ヘラナ・外 面タキ。体部内面ユビオサエ・ナデ、外表面タキ。 口縁部外面上に1条、底部内面に1条の接合痕を有す。	茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/6

遺物番号 出土地点	器種 法量 (cm)	口径 器高	形態・調査の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況 備考
36 壺 (土器) SW-101	16.2		口縁部内面ヨコナガ後ハケナデ、外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ、外面タタキ。内面に黒斑有り。外面に擦付着。	暗灰褐色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/4
37 同上		底径 3.5	内面剥離のため調整不明、外面タタキ。	内／暗灰色 外／暗灰色	2mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
38 同上		底径 5.0	同上	内／暗灰茶 色 外／灰橙色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
39 同上		底径 3.8	内外面ともに磨耗及び剥離のため、調整不明瞭。	茶灰色	4mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
40 甌 (土器) SW-201	21.2		口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面ハケナデ後 ヘラミガキ、外面ハケナデ。受部内外面ヘラミガ キ。脚柱部外側ヘラナデ。底部内面ヘラナデ、外 面ナデ受部及び脚柱部にそれぞれ四方孔を有す。	暗褐色	2mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	口縁部の… 及び底部 1/2欠損
41 壺 (土器) 第6層	12.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ、外 面タタキ後ハケナデ。	暗茶灰色	3mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	口縁部1/6
42 同上	18.0		口縁部内面ヘラナデ、外面ヨコナデ。体部内面磨 耗のため調整不明、外面タタキ後ハケナデ。体部 外面に黒斑有り。	茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/4
43 同上		底径 4.3	内面ハケナデ、外面タタキ。体部外面に擦付着。	暗灰茶色	7mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
44 甌 (土器) 第7層	14.0		口縁部内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ。体部内面 剥離のため調整不明、外面ヘラナデ。口縁部外側 に接合痕を1条有す。	茶灰色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部のみ
45 甌	同上	16.6	口縁部外側ヨコナデ。颈部内面ヨコナデ、外面上 位ハケナデ。下位粒付付け突起にヘラによる刻み目 を施す。体部内面ユビナデ、椎突に接合痕1条、外 面5条の波状紋、3条の沈縫、ハケナデを施す。	茶灰色	4mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部のみ
46 甌 (土器) 第7層	16.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ、外 面タタキ。	茶灰色	2mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	口縁部1/6
47 同上	17.0		口縁部内外面ヨコナデ。内面に黒斑有り。	茶灰色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/4
48 同上	15.2		口縁部内面ヨコナデ、外下面にユビナデ。体部 内面ヘラナデ、外面タタキ・接合痕1条を有す。	暗茶色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/3
49 同上	15.2		口縁部内面ヨコナデ後ハケナデ、外面ヨコナデ。 体部内面ユビナデ後ハケナデ、外面タタキ。	茶灰色	4mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/3
50 同上	13.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外 面ヘラミガキ。口縁部内外面に1条ずつ接合痕を有す。 口縁部外側に擦付着。	外／茶灰色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/4
51 同上	14.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ユビナデ・ハ ケナデ、外側たたき。口縁部外側に1条。体部内 面に3条の接合痕を有す。	灰茶色	5mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部1/3

遺物番号 図版番号	新 標 出土地点	法身 口径 （cm） 基高	形 态・調 整 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	遺 墓 状 況 備 考
52	壺 (上部器) 第7層	底径 3.8	内面ユビオサニ後ヘウナデ。外側底座のため調整不明。	乳褐色	4 mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
53	同 上	底径 4.2	内面ヘラナデ、外側タタキ。	内／淡灰被 色 外／淡灰色	3 mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
54	同 上	底径 3.6	内面底座のため調整不明、外側タタキ。	褐色	3 mm以下の 砂粒を多量 に含む	良好	底部のみ
55	同 上	底径 4.4	内面ヘラナデ、外側タタキ。内面黒斑有り。底部 外側に「-」のヘラ記号のようなもの有り。	内／黑色 外／茶灰色	3 mm以下の 砂粒を含む	良好	底部のみ
56	同 上	底径 4.2	内面消耗のため調整不明、外側タタキ・ユビオサ 3.0	淡灰色	3 mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	底部のみ
57	高 杯 (筒形式) 第7層	26.0	口縁部内面ヨコナデ後ヘラミガキ、外側ヨコナデ。 杯部内面ヘラミガキ、外側ナデ。	内／茶灰色 外／灰褐色	3 mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	口縁部1/6
58	小型器台 (上部器) 第7層	底径 7.0	手づくね成形。四方孔を有す。	茶灰色	3 mm以下の 砂粒を含む	良好	脚底部のみ
59	合体壺 (上部器) 第9層	8.0	13様部内面ヨコナデ、外側ヨコナデ後ハケナデ。 体部内面ヘコナデ、外側ハケナデ。脚柱部内面ナ デ・シボリメ、外側ハケナデ。器部に四方孔を有 す。下部に黒斑有り。	乳褐色	3 mm以下の 砂粒を含む	良好	脚底部欠損

### 3.まとめ

今回の調査では、鎌倉時代・古墳時代前期（布留式）の遺構・遺物を検出することができた。鎌倉時代を含む中世の遺構については、当調査地の西側域では昭和47年度に中田遺跡調査会（中田遺跡北区－第3地区）によって実施された調査で、同時期の集落跡が検出されており、今回検出した遺構との有機的な関係が推定できる。古墳時代については前期における集落遺構を確認することができたが、当調査地内の遺構の検出状況や壁面の土層の堆積状況からみて集落の中心は北部にあるとおもわれる。そして南部については、洪水層にみられる砂層の堆積から氾濫源と解釈すると、人々の生活を営むうえではひじょうに不安定な土地条件であったといえる。また、下層確認調査で部分的にグリット掘りで確認した結果、最終遺構面から2 m以上（最深部で標高6.0m）灰白色微砂～細砂層が堆積しており、湧水もかなり著しかった。これらは自然河川の堆積層と考えられるが、その埋没時期は層内からの出土遺物からみて、今回検出した古墳時代前期の集落遺構とはそれ程時期差はないと思われる。

### 註記

註1 中田遺跡調査会『中田遺跡《北区》発掘調査概要』1973



第1造構面全景（南から）



第2造構面全景（北から）

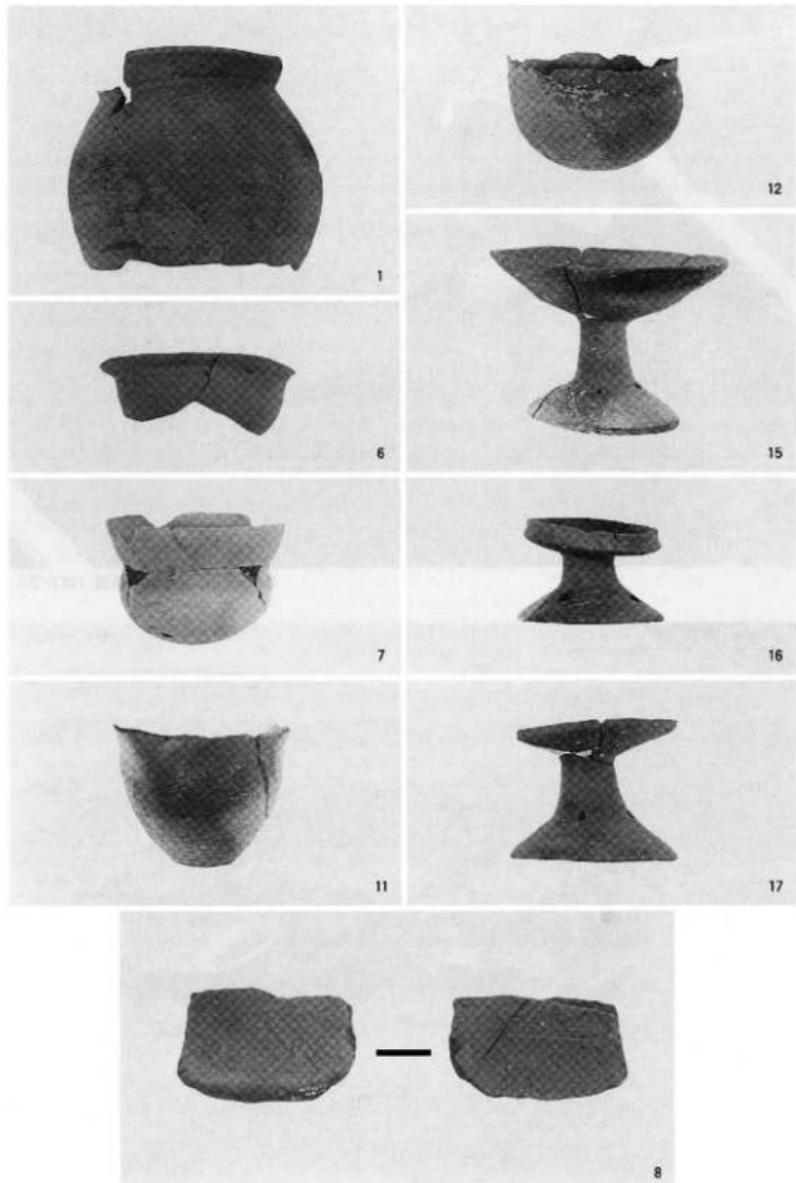
図版二



SD-101 遺物出土状況（北から）

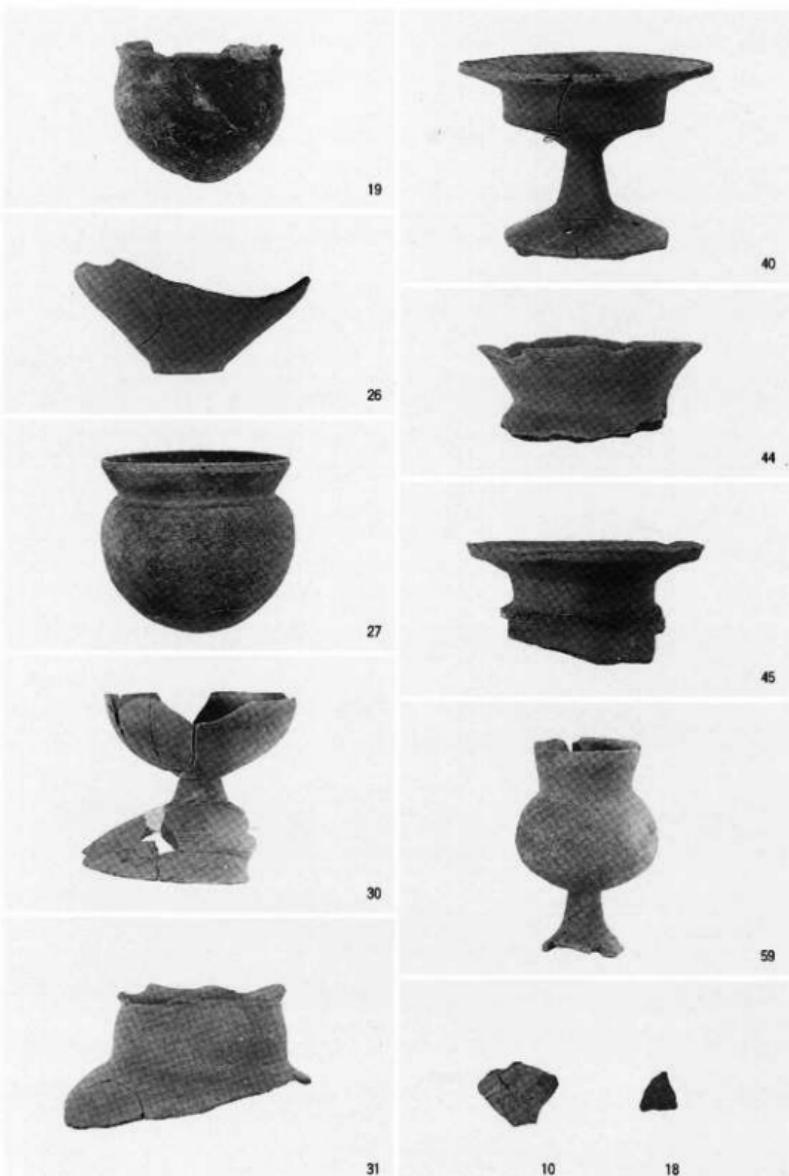


SW-101 掘出状況（北から）



池伏遺構 (1), NR-101 (6~8), SD-101 (11·12·15~17)

図版四



S D-102 (19), S O-101 (26・27・30), S W-101 (31・40), 遺構に伴わない出土遺物  
第7層 (44・45)・第8層 (59), S K-102 (10), S D-102 (18)



## 第五章

### IX 中田遺跡第13次調査 (N T 92-13)

中田遺跡第13次調査は、1992年10月25日から11月1日までの6日間で、中田遺跡の北側に位置する「中田新田」内にて実施された。調査は、主に遺跡の北側の区域を対象としたが、南側の区域も一部調査された。

調査は、主に遺跡の北側の区域を対象としたが、南側の区域も一部調査された。調査は、主に遺跡の北側の区域を対象としたが、南側の区域も一部調査された。

調査は、主に遺跡の北側の区域を対象としたが、南側の区域も一部調査された。調査は、主に遺跡の北側の区域を対象としたが、南側の区域も一部調査された。

## 六 目 文 本

中田遺跡第13次調査報告書	1
調査概要	1
調査方法	1
調査結果	1
考察	1
参考文献	1

## 例　　言

1. 本書は、八尾市八尾木北5丁目で実施した引出し管路新設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第13次調査（NT92-13）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第139号 平成4年12月9日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が関西電力㈱から委託をうけて実施したものである。
1. 現地調査は、平成5年1月28日から3月3日にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は123m<sup>2</sup>を測る。なお調査においては坂下 学・濱田千年・山内千恵子・柴田達弥が参加した。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

## 本 文 目 次

1. はじめに.....	117
2. 調査概要.....	117
1) 調査方法と経過.....	117
2) 検出遺構と出土遺物.....	117
3) 出土遺物観察表.....	123
3. まとめ.....	124